

---

# フラジャイルの日記帳

フラジャイル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フラジャイルの日記帳

### 【Nコード】

N8799F

### 【作者名】

フラジャイル

### 【あらすじ】

某ネットゲームのキャラクターの一人で、四人姉妹の次女であるフラジャイルが、そのゲーム世界での出来事を日記形式で綴ったフィクションです。

## 第一話・はじめに

これは「某ネットゲームに存在するキャラクターが綴った日記」という形式のフィクションであり、ゲーム、運営会社、プレイヤー、キャラクター、その他実在する人物／団体等とは一切関係ありません。

一月七日。今日から日記をつける事にした：といってもあまり深い意味は無い。自分が何をしたか、それによって何を得たか、或いは失ったか：それらを書き留めておく事は決して無意味ではないだろうと考えたのだ。

実際、わたしが生きているこの世界は様々な事象に満ち溢れている。うっかりしていたら生死に関わる程の事さえ忘却の彼方に置き忘れてしまうほどだ。

ついこの間も、とある神官に頼まれたモンスターの毛皮を集める仕事を達成しているのを忘れ、同じ依頼を受けにいつて嘲笑された恥ずかしい記憶がある。また、親切にしてくれた人や、逆にもう二度とパーティーを組みたくないという人もいる。その経緯と結果は自分にとっての戒めとなるだろうし、あるいはこの日記を笑覧してくれる誰かにとって他山の石となるかもしれない。もちろん他人の目に触れる事を前提とした文章であるからには、名前を出す事は出来ない時もあるし、言葉も慎重に選ばなければならないだろうが、それでも起こった事は出来る限り書き留めておこうと思う。

初日はまずわたし自身、そしてわたしの姉妹達について語る事にする。

わたしことフラジャイルは、この世界では「ドルイド」と呼ばれる職に就いている。世界観や歴史的背景を抜きにして簡単に言えば、

もっとも大きな特徴は他者やパーティーのメンバーの体力を回復したり毒を消したりする能力を持っている事だ(といっても、つい最近ボディーアクティベーションを覚えたばかりというレベルだが...)。この能力はダンジョンや危険地帯、或いはこの世界の目的のひとつである「塔」に登るパーティーにとって必須である。どんな強い戦闘集団でも補給態勢が整っていないければその能力は十分に発揮されない...この事は歴史が証明している。また幼い頃からいつも姉妹や友人たちに調整役や参謀役を任じられ、しかもそれが結構性に合っていると自覚していたから、この職はとても気に入っている。

さて、先ほどから「姉妹」と言っている通り、わたしには姉が一人、そして妹が二人いる。もっともまた増えるかもしれないが、さしあたりわたし達は四人姉妹で活動している。それぞれ職が違うが、人となりはもっと違う。

まず姉だが、名前はクロストウジエツジという。ただ、長ったらしいので周囲からはクロスと略されて呼ばれる事が多いらしい...実はわたしも妹達も、幼い頃から彼女をクロス姉と呼んでいた。本心でどう思っているかは知らないが、少なくともわたしを知る限り、略称で呼ばれて不機嫌になった事はない。職はメイジ。つい最近フアイヤーボール2を使えるようになって喜んでいたのが印象的だった。

姉については、ひとつだけどうしても避けて通れない事実がある。それは、わたしを含めた他の三人とは、肌と髪の色が違うという事だ。わたし達がブロンドの髪とピンクホワイトの肌なのに対して、クロス姉は髪も肌もダークブラウンである...ちなみに、わたし達の父母もブロンドの髪とピンクホワイトの肌をしている。

父母はわたし達四人を公平に扱ってくれたし、わたし達も気にしないようにしていたが、世の中には親切な人がいて知りたくもない

事を色々教えてくれるのだ。そのせいかどうか知らないが、一度だけクロス姉がこの事について口を開いた事がある。まだ幼い頃の話だが、夜中に寢床から階下のトイレに行ったわたしは、階段の踊り場で、居間から聞こえてくるクロス姉のこんな声を聞いた。

「お父さん、お母さん、どうしてあたしだけみんなと肌や髪の色が違うのよ」

その悲涙に彩られた叫び声を、わたしは生涯忘れないだろう。わたし自身はその事について絶対言及しなかったし、これからもそのつもりだ。実際、そんな事などどうでもいいと思わせる程、クロス姉は魔道の追求に余念がない。将来はソーサラーになるつもりだと聞いた。和を以って尊しとなすというのが姉の信条でありながら、エンチャントー志望では無いのがいかにも彼女らしいと言える。る。

三女の名前はリレイヤー。職はスカウト。わたしが見た限りでは姉妹の中で一番の美人だが、同時に一番気性の激しい娘でもある。スカウトという職にひとつのポリシー：或いは美学と呼べるものを持っていて、それが無いスカウト職プレイヤーの戦いぶりを見るといつも不機嫌になる。

彼女に言わせると、スカウトとは4つの職の中で唯一戦いを芸術に昇華出来る職であり、多彩なスキルを独自に組み立て、一連の流れの中で相手の弱点を正確に突き、如何にタイミングよく、かつ華麗に相手を倒すかを追求したいそうである。わたしや他の二人が如何に早く倒すかという結果重視型なのに対して、リレイヤーは倒す経過にもこだわりがあるらしい。わたしにはよくわからないが。

また、クロス姉に対して唯一露骨にライバル意識を剥き出しにするのがリレイヤーだ。波風立てるのが嫌なわたしや、わが道をゆく型の四女とは異なり、幼い頃からクロス姉には負けないと公言している。まだ修行時代、姉妹でパーティーを組んだ時だが、この頃まだ蛇との戦いが苦手だったクロス姉の目の前で、いつもサクツと蛇

を倒して得意そうにしているのが印象的だった。「クロス姉ひとりじゃ危ないから、蛇が多いところはあたしが護衛についてあげてあげるわね」と傲慢にも言い放って家族から浮いた事も一度ならずあった。

…もつとも時々見え隠れする本心は「少しでもクロス姉の役に立ちたい」というものらしい。実際にレイヤーは幼い頃からクロス姉に一番なついていたし、今でも好きで仕方がないらしいのだ…それがわかっていいるからこそ、クロス姉もレイヤーを一番頻繁に仕事に同行させるのだろう。また、なんだかんだ言いながらもきちんと結果を出してくるところはさすがだと思っている。

四女の名前はタルカス。職はソルジャー。先にも書いたが、彼女とはとにかく質実剛健、猪突猛進、我が道をゆく、細かい話が嫌い…そういう性格の持ち主だ。戦い方も同じで、とにかく相手と真正面からぶつかり、力尽きるまで叩きのめすというもの。まあ、生まれ付いてのソルジャー気質なのだろう。それゆえ、レイヤーとはしょっちゅう意見が対立している。レイヤーはタルカスを「頭の中まで筋肉」と揶揄し、一方タルカスはレイヤーを「気取り屋」と笑っている。クロス姉がレイヤーの挑発を意に介さないのに対して、タルカスはいつも真正面から反論する。もつともこの二人、戦法が違うだけあって組むと実に効率がいい。タルカスが相手をひきつけている際に、レイヤーが横から出血や毒のデバフをぶちこむという見事なコンビネーションをみせるのだ。そういう意味では異なる意見の持ち主というのは大切なのかも知れない…

わたし達姉妹はそれぞれこのような人格で、かつ、こういった関係にある。緊張を伴う要素はあるにせよ、基本的には仲が良いし、それぞれ別個の生産技能を持っていて作ったものを相互に交換する事もある。これからわたし達にどういった事がおこるのだろうか…

## 第二話・休日

一月八日。

一昨日、昨日と二日続けて行政機関から外出禁止令が出たため、仕事も訓練も滞ってしまった。まったく困ったものだが、もっと困った事は、二日もかけておきながら問題がまるで解決していないという事だ。

ちなみに問題というのは、例の幽霊騒動である。かの英雄として有名な（笑）ラジャフ村の宿屋の主人が、一昨日どこかに出かけてしまい、そのまま今日になっても戻っていないというのである。まあそれだけなら、主人に関わるクエストが滞るだけだが、実は地図を見ると、主人が元いた場所にクエスト発生を示す光点が表れていて、それなのにそこには何ら変わった状況がある訳ではない…という奇妙な現象が起こっている。これは行政機関のミスなのだろうか、さもなければどこかで行き倒れになった主人の魂だけが戻って黄泉の国からの救出を求めているのか…おそらくは前者だろう。だが出来れば後者の様なクエストであって欲しいと思うのは不謹慎だろうか。

この事件も含め、わたしたちが生きているこの世界は日々変化している。ある日突然仕事や探索に行ける場所が出現したり、「塔」や職業レベルに、より多くの段階がもたらされたりする事がある。進歩も拡張も無い社会が衰退し滅びる事は世の常だから、精度と拡張のバランスさえきちんとしていれば、その傾向はおおいに結構な事だ。しかしそれにしても塔一階の死屍累々現場のすぐ奥に新たに出現した「まもの」とやらは何か深い意味があるのだろうか、それとも単なるジョークなのだろうか…

今日、クロス姉が朝に、わたしが昼前に聖域に訓練に行った。丁度似たような段階の知人がパーティーのメンバーとしてドルイドを探していたので加えて貰ったのだが、相変わらず聖域にいるローパーという悪趣味な姿の怪物は脅威で、ドルイドやメイジの様な防御

の薄い職種がこいつの触手攻撃をくらうとたまったものではない。特にクリティカル攻撃を受けたら、下手すると瞬殺される危険もある。ソルジャー職やスカウト職の方々には申し訳ないが、先ず、彼らの様な前衛に先手をとってもらい、ローパーの攻撃を受ける状態にならなければ、攻撃の矛先がこつちに向かいかねない回復スキルも魔法攻撃もおそろしく出来たものではないわけだが、しかし、だからと言って前衛の体力減衰を放置する事は出来ない。この辺のバランスを瞬時に把握し、効果的なヒーリングを行える者を優れたドルイドというのだろう。という訳で、なんとかローパーの攻撃をまともに受ける事なく、そして前衛にひとりの死者も出さずことなく訓練を終了した。ただし何度か危ない場面もあつた事は覚えておくべきだろう。

家に戻ると、一足先に聖域での訓練を終えて帰宅していたクロス姉が紅茶をいれてくれた。久しぶりに二人きりで話す機会だったが、話題はやはり後衛としての役割と巧妙な戦法といった、よく言えば研究熱心、悪く言えば色気もへったくれも無い会話だった。ふと思いついて、わたしはクロス姉にこんな質問をぶつけてみた。

「ねえ、クロス姉はいま好きな人はいないの？」

その質問より少し長い時間、収まりの悪い沈黙が部屋を支配したあと、クロス姉はおもむろに口を開いた。

「人にそういう質問をするのなら、まず自分がどうなのか言いなさいよ」

九十パーセント以上は冗談の成分で出来ていると分かる返答に、わたしは苦笑しつつもこう返答した。

「残念ながら今のところ…ドルイドとしての腕を磨くのに精一杯よ」

「なんだ、あたしと同じじゃない。そんな事だろうとは思ってたけど…」

ひとしきり笑った後、クロス姉は残った紅茶を飲み干した。何年前か前、内心好きだった相手が訪ねてきて、自分の友達がクロス姉を好きなのでつきあってやって欲しいと言われた時、クロス姉は表向



き冷静さを保ちつつ、いまは誰ともつきあう気は無いときっぱり断った事がある。相手が帰ったあと、クロス姉は放心した様子で何時間も座ったままだった…その時の席に、いままたクロス姉が座っている。あれからクロス姉は、心の一部分をずっとこの席に座らせたままなのかも知れない…

### 第三話・アサ魔でのトラブル

一月九日。

昨日、また行政機関から外出禁止令が出た。もつとも今回は時間も短かったし、明確に問題が解決したから、とりあえずよしとしておこう。ちなみに問題が解決したというのは、行方不明だった宿屋の主人が無事に（と言ってよいのかどうか分からないけど）戻ってきた事だ。また、それに関連して例の塔1階に出現した「まもの」とやらが何なのか判明した。詳細は書かないでおくが…ところで今日は、この情報の提供元である人物が、同時にもたらした話である。「冗談じゃないわ。あいつ、絶対許さないから！」

任務から帰宅するなり、ただいまの一言も無しに居間でくつろいでいるわたしに感情の飛沫を浴びせるのは誰なのか説明するまでも無いと思うが、まあ書いておく。リレイヤー（以下リレ）が塔パーティーを終わって帰宅し、その顛末に激怒しているのだ。

「落ち着きなさいよ。どんな事があったっていうの？」

「どんなもこんなも無いわ。あの持ち逃げメイジ」

「持ち逃げとはおだやかじゃないわね。詳しく話してみて」

この日、リレは塔7階にある謎の解明を含めた周回探査を依頼されていた。ただし今回は友人たちがみんな都合で集まらなかったため、塔周辺にいた見知らぬ冒険者たちに呼びかけて編成した、いうところの「野良パーティー」だったそうだ。見知らぬ…とは言ってもみんなそれなりのレベルと知識を持っている者達で、打ち合わせも比較的スムーズに進んでいたらしい。

そのメンバーの中に、一人のメイジがいたそうだ。初心者とは言い難いレベルの持ち主で、特に変わった様子もなく、また人あたりも良い感じだった。ただひとつ気になったのは、割と頻繁に『動く事が出来ない』状態になるらしい事。本人もそれは明言していたし、いざという時になって動けないという事態になったらまずいかな、

とは一瞬思っただけ。しかしそういう時は他のメンバーがフオロ  
ーすればよいと結論した事もあってメンバーとして決まり、塔に入  
ったそうだ。

ただ、ここでひとつ問題が生じた事が後で判明した。塔の探索が  
目的とはいえ、モンスター達を倒しながら進むのだから、当然なが  
らその段階で様々なアイテムが手に入る。通常はパーティーを終え  
た段階で、素材と回復薬を除くアイテムを一旦リーダーに集め、ダ  
イスで順番を決めて欲しいものから貰っていく、というのが通例な  
のだが、この時はそれを確認しなかったらしい。うかつだったが、  
あまりにも当たり前の話なのでみんな口にする事も無かったようだ。  
そして、えてしてそういう時ほどレアなアイテムが出るもので、

案の定、5階でスライムを倒して出現した宝箱の中にアサシンスダ  
ーク(魔+)、いわゆる「アサ魔」があったらしい。メイジ職の垂  
涎的であり、街で露店を開いて出品すれば四十銀位の値段は楽に  
つくという代物だ。このアサ魔が、よりによってそのメイジの荷物  
入れに入った。もちろんパーティーが終わった時点で、そういった  
レアなアイテムはダイスの対象となるはずだったが、このパ  
ーティーの最終目的地である7階に進み入ったとき、このメイジの  
姿が塔内になかったという。パーティーから抜け出た様子は無いの  
でリレともうひとりが一旦塔の外に出て探してみると、塔で死んだ  
者が復活する付近で座り込んでいたらしい。二人が呼びかけてみて  
も応答はまったく無く、どうする事も出来なかったという。まあそ  
うだろうとは思いますが、そうしている内にこのメイジは二人の前から  
忽然と姿を消して、同時にパーティーからも離脱した。状態からし  
て「おちた」という感じだったそうだ。もちろんメイジの荷物入れ  
に入っていたアサ魔もろともである。

塔に戻った二人は他のメンバーに事態を伝えた。理由が不明であ  
るため軽々に判断は出来ないだろうが、リレに言わせれば「あまり  
にもタイミングが良すぎる」そうだ。しかしそこまで他人を疑うの  
はどうだろうね、という年長のメンバーの反論に、リレも意見を押し

し通す事は出来なかつたらしい。

塔の探索を終えた後、すこし時間もあつたため、どうにもまだ腑に落ちない気分のリレは近くの森でモンスター相手に剣を振るいまくつたそうだ。八つ当たりの標的にされたモンスターこそいい迷惑だが、それでどうやら少し気分が晴れたリレは、フレンド登録した何人かに、今日はもう帰ると挨拶しようとした。その時リレは、パーティーの時に臨時登録していた例のメイジが、再びログインしている事を知つたのだ。慎重に言葉を選んで挨拶し、今日の塔パーティーで「分配もまだなのに」おちたから心配した…と、後ろめたさがあれば気が付くであろう物言いで相手に暗に問いかけたが、返答は「申し訳ないです（笑）」…

「（笑）付きで返事したのよ、あのメイジ！」

説明しているうちにまた怒りがぶり返したらしいリレは、罪も無いテールを叩きながらそう言った。

「少なくとも今手元にあるアサ魔が自分のものじゃないと認識していれば、それなりの返答になるでしょう。ようするに、やりい、と思つてるのよ。全然悪いなんて思つてないって事。」

「…そう決め付けていいものかな。第一相手が本当はどこまでこの問題を把握しているのかわからないし、もっと明確に問題を提起して話し合った方が…」

「もうあんなヤツと口を利くのはイヤ。言わなきゃ分からないようなバカと口利くのはもつとイヤ！」

…やれやれ、こうなつたらリレはもう引き下がる事はないだろうな。こんな具合に周囲にトゲをふりまいてたら、結局自分が損なの…まあ、姉妹とはいえ結局は他人だし、リレ自身が責任を取るしかないのだが…そんな事を考えていたわたしに、リレのこんなつぶやきが耳に届いた。

「あんなにアサ魔を欲しがってるのよ、クロス姉…」

…リレは、やっぱり可愛い（笑）…

#### 第四話・メイジに課せられた永遠の命題

一月十日。

久々にクロス姉が憂鬱そうな顔で帰宅した。どうしたのかと尋ねると、四段階もレベルが下のババに完敗したそうだと。

クロス姉は午後から森に訓練に行ったのだが、うまく同レベルのパートナーが見つからず、しかたなくソロでレベル上げをする事にした。だがこの職の人ならわかるとおり、レベル二十六ぐらいのメイジというのはソロでは実にレベル上げが難しい。攻撃力は四種類の中でもぬきんでているが、逆に防御力は情けないぐらい低い。だからなるべく肉弾戦がさけられる相手を選んで狩る訳だが、そうになると相手のレベルはどうしても下げざるを得ないから、経験値も上がりにくい。

今日のクロス姉も、上がりにくい事を承知で聖域への入口付近を徘徊するババ二十二を相手に選んだそうである。最初は順調に続けていたものの、何匹目かの相手であるスカウトがジャンピングパンチを繰り出し、それがクリティカルとなって百六十八というダメージがクロス姉を襲った。すでに一回分のダメージを貰っていたクロス姉はそれで瞬殺され、次の瞬間にはラジャフに戻っていたそうだと。しばらくあつげにとられ、復活場所を動く事も出来なかったらしい。「まいつちゃうわよねえ。たった一撃で、何時間もかけて積み上げた経験値が水の泡なんだもの…これからどれほどレベルを上げているとも、メイジは常にああいう危険がつきまとうわけか…」

「え、姉さん、メイジ職がいやになったの？」

「…ううん、だからこそ面白いという事もあるわよ。タルカスみたいな頑丈な身体はうらやましいけど、いまの火力でタルカスの身体を手に入れたら、そもそもパーティーを組む意味が無いものね。お互いがお互いの弱点を如何にうまくカバー出来るかが、パーティープレイの良さなんだから。ただ…」

「ただ？」

「…なんでもない」

手をひらひらと振りながら、クロス姉は自室に戻っていった。普段通り平然としてはいるが、やはりシヨックはかくしきれない様子だ。…もつともこれは、ドルイドであるわたしにも関係ある話であり、防御力の無い職は、やはりそういう点で知恵をしばらなければならぬ。永遠の命題と言えるだろう。

## 第五話・大漁の日

一月十一日。

昨日の今日で面白い偶然なのだが、タルカスが二十三になった。彼女はとにかくガーディアンを目指しているだけあって防御力を上げる事に主眼を置いている。そのため、得たステータスは必ず体力と敏捷性にふっており、腕力は情けないほどひくいのに防御力がかなり高いソルジャーに育っている。レベル二十三で、攻撃力が三百二十も無いのに防御力が三百五十近くある。これがどの程度のものかというと、レベル二十四のメイズローパーとどうにか一対一で戦えるらしい。クロス姉が聞いたら複雑な心境に陥るだろう。わたしも同じだが…

ところで今日は、タルカスの事とは別にかなり嬉しいことがあった。午前中、未解決だったクエストを進める為にあちこち走り回っていたのだが、その途中で塔五階〜十階にいくパーティーを編成したいというシャウトが聞こえた。わたし自身は十階までのクエはほぼ解決していたが、まあ多少時間もあることだし、お手伝いに加えてレアでも出たら有難いという程度のもりで参加した。すると五階でエモ五、七階で帰還の書+ギャンブルナイト、九階では学術技能書という大漁パーティーとなった。四人パーティーのせいもあって十階のエニグマ解読こそ失敗したが、それでもリーダーはクエストをクリアしたため、結果的には成功といえるだろう。

残念ながらダイスでは負けたが、学術を手に入れた人に申し入れたところ、かなり安く譲って貰うことが出来た。以前から学術技能は欲しかったので、最高の気分である。

ただし、そうはいつても、わたしたち四人ともすでに技能は持っている。では誰が学術を担当するのか…近いうちにここで発表するかも知れない。

## 第六話・札付きプレイヤーの噂

一月十二日。

今日、すこし気になる事があった。

訓練をしようと思えば森に出かけ、スカウト職の人とペアを組むことになったのだが、出来れば四、五人のパーティーにできないものかとスカウトの人がシャウトで呼びかけてみたところ、別のペアが合流しないかと申し入れてきたのだ。丁度四職揃う編成になるのでわたしは歓迎だったのだが、スカウトの人がどうも気乗りしない様子だった。

「どうかしたんですか？」

「いや、ちよつと聞きたいんですけど、  
っていう人知ってますか？」

「ああ、知ってますよ。申し入れてきたのはその人ですか」  
スカウトが出した名前は、わたし自身がフレンド登録していて、人間的にも技量の面でも信頼してよいと考えている人だったから、わたしはなおさらスカウトの人の様子に疑問を感じた。しかし、次のひと言がその疑問を氷解させた。

「それじゃ、  
っていう人は？」

スカウトの人が二番目に出したのは、最初に出した人と前半が同じで後半が違うという、一見よく似た名前だった。だが、似てるのは名前だけである。

とは、一度だけ塔パーティーで一緒になった事がある。九階にドツペルゲンガーのクエストがあるとシャウトしていたので、同じく九階に用事があるわたしは組む事にした。他のメンバーも初めて組む人たちだったが、その人たちが特に何も問題を感じないのに対して、  
は最初から少し違和感のある物言いをする人だな、と思っていた。とは言っても他にあてもなかつたの



で、さしあたり性格と能力は別モノと考える事にしたのだ。

しかし、六階に上がった頃から、言動がさらにおかしくなり、七階になると「あたし眠い（日本時間で午前一時ごろだった）」と言いだめた。わたしを含めて他のメンバー全員がひいたが、それでもなんとか九階まではぶつくさ言いながら任務をこなしていた。

しかし、九階で　　が大ミスを犯した事から事態は急速に悪化した。ご存知の通りドッペルゲンガーのクエストは階上と同時に地図右方向にダッシュし、巡回のモンスターを避けるため対象だけを釣って袋小路の一番奥の壁際に陣取るとというのが定石だが、あるうことかこの　　が巡回のモンスターに手を出し、しかも攻撃をうけて我々が陣取った方に逃げ込んできたのである。その結果がどうなったかは言うまでもないだろう。

ドッペルゲンガーのクエストは失敗したものの、九階の入り口で態勢を立て直した我々は、もう一人のメンバーが希望したラジオのクエストのクリアのため、地図右上に向かう事にしたが、その時　　が、「え、もうドッペルはやらないの。じゃ帰る」と言い出した。怒鳴りつけてやりたい気持ちを抑えて唯一のチャンスがもう無くなった事とパーティーの相互協力の必要性を説くと、なんとかついてくる事に同意したものの、チームワークも何もあったものではなく、結局はこちらのクエストも成功しなかった。

仕方なく塔一階に戻って手に入れたアイテムの分配を始めたが、　　がダイスで一番になって露店に出したアイテムを全部とってしまった。慌てて返せと言ったが、返答は「何故？　だつて一番がとれるんでしょ。言ってる事よく分からない」。最終的には返却してもらって分配を終えたが、さつさと撤収するをみながら全員がしばらくそのまま啞然としていた。

…とまあ、こういう事があったのだ。だからパートナーのスカさんが何を言いたいのか、わたしにも理解できた。　　さん

と　　は全くの別人ですよと説明して納得してもらい、そ

の後のパーティーももちろんうまくいったが：それにしても、気の毒なのは　　さんである。まるで某カルト教団と名前が似ていて云われ無き誹謗を受けた某電器メーカーの様なものだが、今さら改名も出来ないだろうし、どうにかならないものなのだろうか？

## 第七話・家族会議

一月十三日。

クロス姉が二十七になったと報告してきた。東岸に行ける推奨レベルだが、メイジ職の防御力を考えるとソロ狩りをするにはやや足りないらしい。実際にクロス姉も試してみたが、豹二十七と戦っていきなりクリティカル攻撃を受け、ざっと百ダメージ強をくらって青ざめたそう。なんとか勝てたものの、少なくともレベル三十以上の装備が身に付けられるまでは無理ね、と言いつつ再び運命の樹に訓練に行った。最近、クロス姉とわたしたち三人が別の場所での訓練する事が多いので、会う機会が減っている。職種と戦闘レベルが違う為だから気のせいには違いないが、もしかしたらクロス姉はあたし達と一緒にいたくないのか、なんていう考えがふとよぎってしまう。こんな事、誰にも云えないけど…

一方、わたし達は、森の花畑でマントラップ二十を相手に訓練を続けている。レベルアップもさる事ながら、パワード・モンスターのマンイーターが持っているレアアイテムの指輪が欲しいのだ。もつとも確率は五十分の一だそうで、なかなか落としてはくれない。強化訓練が終わるまでに出てくれるのだろうか。

一月十四日。

今日は週に一度の外出が出来なくなる日で、家でおとなしくしているしかない。任務も訓練も出来ないのも、常に身体を動かしていないと気がすまないタルカスや、責任感が少し強すぎるきらいのあるリレは、部屋の中でなんと身置き所がなさそうにしている。クロス姉は運命の樹の宿泊施設に寝泊りしてるから、今日も家がない。二人が（特にリレが）やや落ち着かない様子で室内をケイブベアみたいにくろついているのは、そのせいもあるのかも知れない。「ねえ、たまには反省会でも開いてみる？」というわたしの提案に、

二人はほとんど同時にこう返答した。

「いやだ、面倒くさい」

普段は気が合わないくせに、こういう時だけ意見が一致するのはどういふ事なのだろう。わたしが自己を客観視する事の必然性と経験を反芻する事の重要性を数分に渡ってきちんと説明すると、二人も納得して参加を承諾してくれた。と言いたいところだが、実際には、わたしがうるさいから形だけでもつきあつてやろう、という考えが見え見えである。その証拠に反省会どころか、その場はただの雑談の場と化してしまった。

「ところでさ、最近ラジャフ村や塔の周辺に、いままで見かけなかった人がたくさんいると思わない？」

タルカスの発言に、わたしもリレもうなずいた。実際、先週末あたりから新人らしい人が、この世界にかなり入ってきている様子だ。おそらくアニメの第二シーズンの放送が始まったのが理由だろう。

この世界の宣伝もやったらしいから、それを観て初めてこの世界の事を知った人間がはいつて来たのだろう。入ってくる人が多くなればこの世界もさらに活気づくから、その事自体はとても嬉しい。

「でもさ、こういう時には必ず妙なやつも入ってくるわよ。わたしが遭遇したのは、なんか訳の分からない事をシャウトしまくってるやつ。聞いた人たちは笑ってたけど、ハラスメントだと感じられる部分もあったし、あまり感心しないわね。度が過ぎると行政機関がうごくかもしれないわ。出来ればそうなってほしいけど」

いかにもリレらしい辛辣な意見だが、そう言いたい気持ちはよくわかる。故意にせよ未熟ゆえの所業にせよ、多くの者たちが同じ空間にいたのであり、その点に於いてリアル世界と変わるところは無いのだから、やはり気をつけてほしいものだ。

わたしは会話による承諾も何もなく、いきなりパーティーに誘ってきたプレイヤーに遭遇した。何度断つてもしつこく誘ってくるので、かなりきつい言い方で警告してやったら、何も言わずに去っていった。どうやら相手が同じ人間だという事が認識できないのかも

しれない…

「そういえば、わたしの知り合いが、その新人さんたち相手に商売しようとしてしくじったらしいわよ」

愉快そうに笑いながらそう切り出したりレの話によると、つい最近レベル二十になった人が、不要になったレベル十装備を譲ってやろうと露店を出したそうだ。だが、かなり格安の価格で並べたのにも関わらず、半日経つても売れなかったらしい。

「でね、後で考えてみたら、要領の分からない新人さんが、いきなり露店で買物する訳ないという事に気が付いたって。」

「あ、そりゃそうよね。わたし達だって、露店で買物が出来るようになったのは、この世界に来てしばらく経ってからだし」

実際、露店ごとのバラバラな価格と品揃えは、いきなり来て何もわからない状態で利用出来るものには無い。この世界の成り立ちをある程度把握しなければ、おそらくは怖くて手出しできないだろう。初めて観光旅行に行った先で、一人で裏道の屋台にはいつて食べたものを注文しろと言っても無理なのと同じである。

結局は反省会にならず、この世界の今後という、ある意味ではもっと大切な点に話題が移行した。この世界が今後どうなるかはわからないが、わたしとしては、もうしばらくは続いてほしいと思う。

## 第八話・リレイヤーと花PD

一月十五日。

四人の中では一番レベルアップが遅れていたリレイヤーが、今日、森の花畑での訓練によって二十二になった。

レベル一つの違いだが、彼女にとっては大きな意味がある様子だ。というのも、花畑に出現するパワードモンスターであるマンイーターはレベル二十二で、それまでのリレでは倒すのが難しかった。その為、訓練の最中にマンイーターが出現した場合は、待機していたレベル二十三のタルカスに交代し、倒してもらってからまた交代して訓練を再開していたのだ。この状況に、プライドの高いリレはかなり不愉快そうだった。だから二十二になった途端、自分がマンイーターを倒すと宣言し、見事にやってのけたのだ（もちろん、まだわたしが回復サポートしなければ無理で、しかもかなり危なかったが）。初めて自分の手で倒したりレの嬉しそうな様子に、わたしやタルカスも素直に拍手を贈った。笑いかみ殺しながらではあったが。

なお、本日クロス姉も二十八に、そしてわたし自身も二十三にレベルアップした。特にクロス姉はレベルアップにつれてファイヤーボール2をランク4にする事が出来たため、より強力な火炎攻撃が可能となり、運命の樹から荷物整理のためラジャフに一時帰還する途中、聖域の石碑でローパー二十四をソロ狩りする事が出来たと嬉しそうに報告して来た。それは結構な話だが、あまり無茶な事はないでほしいものだ。クロス姉が無事でいて欲しいというのはもちろんだが、それと同時に、ライバル視しているリレがそれを聞いたら、今度はサポートなしでマンイーターを倒すなんて言い出しかねないし。

## 第九話・無縁に生きるべき者

一月十六日。

先日もう少し書いたが、見知らぬ冒険者、或いはそれほど深いつなかりの無い冒険者どうしがその場で集まって組むパーティーを「野良パーティー」という。パートナーの性格も能力もよく分からない段階で組むから、ギルドのメンバーやフレンドで組むパーティーと比較すると、どうしても満足な結果が得られる可能性は低くなる。それでもそれなりのレベルの者たちであればクエストや塔のエンゲマの解き方もわかっていいるだろうし、わからなければ事前に情報を集めるか経験者の指示にしたがうと思うのだが、ときおり例外も存在する。今回はそういう者がリーダーとなった塔パーティーの話である。

そのプレイヤーは、少なくとももう初心者とは呼べないレベルだったが、塔についての知識は皆無に等しかった。そういう者がリーダーをとめる塔パーティーにわたしが参加してしまった事がそもそもの間違いだったのだが、問題はもつと深刻だった。塔一階に入るなり、そのリーダーが「鍵の場所はどこだ」と知識の欠如を暴露し、さらにほかのメンバーも似たような状況だったため、階が上がるとつれてわたしが指示を出すはめになった。マトックで壁を壊すにはどうすれば良いのかまで教えなければならぬ状況というのは、はつきり言っただけでかなりしんどい。しかも知識皆無でありながら意欲だけは満々なので、5階でスライムを釣る時、スカウトの人がせつかく右から入ったのに通路の真ん中から進んで左側のメイジを呼び込んだり、7階でギャンブルナイトを倒してもダイスをふる前に勝手に印章を拾ったり、何の準備も出来てない状態で9階に上がってダッシュがバラバラになったり……しかもクレームをつけると直前に指示を出せと逆ギレしてくるし、見当違いな質問をたしなめると不貞腐れた様な返答を返してくる。

それでもメンバーが希望していた9階のクエストも達成し、あとは十階のブロックキャプテンを倒して十一階の謎解きをするだけという段階になった。だが未経験の者たちが殆どであった事もあって、倒す寸前までいきながら敗退。しかもこの時点でスカウトの人は奥義（攻撃力が数段高くなる能力。ただし一度使ったらその後はまるまる一日使えない）を使っていたため、もう勝つ見込みは無くなっていた。これは諦めた方がよさそうだな、とわたしは思ったが、そのリーダーは断固として続行を主張した。もう勝つ見込みは無いといくら言っても「やってみなければわからない」の一点張りで、しかも自分が課金アイテムを使っているのだから途中で投げ出すわけには行かないと、手前勝手な理屈で強弁をはじめた。こちらでもキレる寸前だったが、それでも2度目あたりは他のメンバーが「まあやるだけやってみればいい」という意見に落ち着き、いつのまにか案内役みたいな立場になっていたわたしも、投げ出す状況ではなくなっていた。

しかし当然ながら2度目も失敗。さすがに諦め感が強くなってきたが、リーダーだけは頑として続行を主張した。だが3度目にウィスプが現れて時間切れとなり、このパーティーは物理的に続行が不可能となった。が、ここでまたひとつ問題が生じた。ウィスプを知らなかった（少なくとも本人はそう言った）が、何故あいうものが出るかと教えなかったかと文句を言い始めたのである。そんな事、このゲームの常識だと思っただが、「知っていたらもつと早くすませようとした。言わない人間の責任だ」という論理で責任転嫁を始めたのである。

時刻は午前3時ちかくなっていったが、リーダーはやめようとせず、メンバーに金を出させあって侵攻十階を購入し、あらたにパーティーを開始した。だが結果は同じ。しかも急いでいる事もあってメンバーのHPとMPが整っていないにも関わらず攻撃を開始するなど、もうどうにもならない状態である。「やってもみないであきらめるから日本人はダメなんだ」という一言に、とうとうキレたわ



たしがリーダーとロゲンカを始め、しまいには塔十階でパーティーから追放である。

わたしも何度か塔パーティーに参加したが、ここまで「面白いパーティー」は初めてだった。もちろん二度とはしたくない。まあ向こうもそう思ってるだろうが…

一月十七日。

昨日の事もあってしばらくパーティーを組むつもりになれないわたしに代わり、クロス姉が日曜日に登る事になった。運命の樹で訓練を続けていたクロス姉に、ギルドのメンバーのひとりから、手伝うからエピッククエストを進めないかと申し出があったそうだ。エピッククエストはやはりこの世界の根幹に関わる問題であり、クロス姉は大喜びで運命の樹から出て、岩穴の古代の碑まで護衛して貰ってたどり着き、それ以後のいくつかの手続きもこなして、あとは塔の十三階に登るだけというところまでクエストを進めた。メンバーはギルドでよく知っている人たちが中心であり、技術的にも人間的にも信頼がおけるそうである…なんともうらやましい話だが、逆に十一階までしか経験の無いクロス姉がメンバーの足を引っ張らないかといささか心配である。まあ、クロス姉なら昨日のパーティーのリーダーとは違うはずだが…まあいずれにせよ、日曜日の結果を待つしかない。

## 第十話・ギルド考

一月十七日・その2。

タルカスがようやく二十四になり、その後野良パーティーで塔に登った。「侵攻」を使って、十階と十一階を五回ほど周回するパーティーだったが、例のブラックキャプテンがいる十階はほとんど問題無く突破出来たそうだ。戦力的には十六日に書いたパーティーとそれほど変わらないのに、こういう違いがあるというのは…

とにかくそのパーティーでレベル二十四以上のソルジャー職のスキルであるスレイムスラッシュが出て、タルカスがダイスで貰えたそうである。解散後に早速読んでスキルを獲得し、森で試してみたらしい。威力は相当なもので、しかも火のデバフが伴う攻撃が可能。それまで技らしい技が無かったタルカスはかなり新鮮な気分を味わっているらしい。

一月十八日。

十六日に書いたクロス姉の所属するギルドによる塔パーティーが実施され、見事に達成したそうだ。ブラックキャプテンは当然突破さらにクロス姉にとって初めての十二階と十三階も、ギルドの諸先輩方のサポートによって難なく攻略でき、エピックエスト九はあつという間にクリア。さらにそのまま運命の樹まで行ってエピッククエスト十までクリアできた様だ。もつともレベル二十八のクロス姉では、後者は高みの見物しか出来なかつたらしいが…

ところでそれに先立つ数時間前、タルカスが城門において、わたしの所属するギルドのリーダーとひよんな場所で遭遇したらしい。フラジャイルの妹ですと初めて挨拶したら苦笑していたそうである。偶然ながら、何故か妙にギルドとの関わりが深い一日となってしまう。いい機会なので、ギルドについて少し書いてみようと思う。

わたし達四姉妹のうち、ギルドに所属しているのは、クロス姉と

わたしの二人である。下の二人は今のところギルドに参加するつもりはないらしい。姉の所属するギルドの所属人数は現在約五十人前後。わたしの所属する方は約三十人ぐらい。ただし、アクティブに参加しているメンバーはどちらもその何分の一程度である。

さて、一口にギルドといっても、その傾向はかなり異なる。クロス姉の所属するギルドは、どちらかというとメンバーの相互協力が主な活動であるのに対し、わたしが所属するギルドは出来る限り外部の冒険者をサポートする、という事を目的としている。具体的には森や平原で戦闘訓練等をして疲れきっている冒険者にヒールやバフをかけるというものだが、もちろんメンバーにも都合があるから、実施するかどうかはその場における当事者の判断に委ねられている。

ただし、完全に個人の意思が優先するかというと、そうとも言えない場合がある。以前、全く面識の無いメンバーが突然、自分が現在組んでいるパーティーの回復役を頼みたいと連絡してきた事があった。そのパーティーのメンバーのレベルを聞くと、わたしよりかなり上のレベルのメンバーばかりで、参加しても経験値が入りにくい事が分かった。だがそれを指摘すると「そうじゃなくて回復をしてほしいだけだった。いやなら別にいい」と逆ギレ気味に返答され、一方的に連絡を絶った。この時ばかりはわたしもこのギルドをやめようかと思っただが、それ以降、そういう事は起こっていない。いずれにせよ、ギルドという人間どうしの集まりに所属すれば、それなりのしがらみも生じる事は覚悟しなければならぬ。所属せず完全にフリーで動くか、ある程度の「しほり」を承知で所属するかは各人が判断すべき事だと思う。

## 第十一話・訓練の日々

一月十九日。

クロス姉から、訓練が順調に成果をあげていると報告が届いた。本日の段階でレベル二十八、経験値のゲージが十時位の位置にきているようで、一両日中には二十九になる予定だという。待望のレベル三十を射程に捉えたと言えるだろう。そうなければいよいよ三十装備を身に着けて東岸に乗り込むそうだ。

ただ、運命の樹の入り口付近は相変わらず混雑しているようだ。特に夕刻は獲物の取り合いになる事が多いため、狩りとは別の意味で神経を遣うらしい。クロス姉は、なるべく混雑している時間帯をさけて訓練しているそうだが、それでもたまに別の人が入ってくるので、自分の狩場に来るんじゃないかと内心警戒するとの事だ。リレにそれを話すと、「そんなの文句言っちゃればいいじゃない。後から来て失礼よって」。そりゃ、貴女は言えるでしょうけどね。

わたしは現在、そのリレと一緒に森の花畑で強化訓練を続けている。タルカスが一足先に二十四になり、フレイムスラッシュも獲得した為、パーティーさえ組めれば聖域での訓練に切り替えたい様子だ。その点はわたし達も同じだが、回復担当のわたしはともかく、前衛のリレは少なくともローパーにスキル攻撃が命中しやすくなるレベルまで進まなければ聖域はつらいだろう。まあ、レア指輪も未だに出ていないし、別にあせる事もないと考えている。

ただ、リレはやはり、より高いレベルの訓練にいきたくてうずうずしている様子が伺える。だがソルが前衛にいるパーティーに参加でもしない限り、いまババ二十二あたりと戦うのはあまりにもリスクが大きすぎる事は本人も承知しているから、彼女にしては珍しく自重しているようだ。お互い、そのジレンマが解決できるレベルまで早く進みたい。そのためにも、より一層訓練に励まなければ。

一月二十日。

クロス姉から、二十九になったと報告が届いた。その後も運命の樹で訓練が続けているが、現在の経験値の獲得具合からして、遅くとも今週中には三十になる可能性が高いそうだ。

それと、タルカスが初めて運命の樹まで足を伸ばし、久しぶりにクロス姉と会ったと報告してきた。パーティーを組んだからとはいえ、二十四で運命まで行けるといのはやはりソルジャーならではの頑健さゆえだろう。もちろんうらやむ気はないが、わたしも早く運命まで行けるだけの能力を身に付けたいと思っている。

## 第十二話・続訓練の日々

一月二十一日。

四人ともレベルに変動は無し。週に一度の外出禁止日で訓練時間が多少制限された事と、全員の経験値のゲージが五時から九時の方向にあって、ここ二、三日はレベルアップの予定がなさそうだ。一番進みが速いクロス姉も、今日は夕刻の混雑が災いしてほとんど成果が上がらなかったとぼやいていた。

わたしとリレイヤーの合同訓練もやや中だるみの様相を呈している。この日、リレは武器の修理のため一旦ラジャフ村に戻ったが、塔パーティーのメンバー募集のシャウトを聞いて心がざわついたそのうである。残念ながらソルジャー職募集だったため諦めて森に戻ったそうだが、あれがスカウト職募集なら行ったかもしれないと言っていた。別に行っても構わないと思うのだが、わたしを置いていく形になるのが気になったらしい。こういうところが律儀というか何と言っか…

塔パーティーといえば、わたしが所属するギルドで計画が進んでいる。メンバーに貸し出せるスキル書を増やしたいという主旨だそのうで、この週末に催行が予定されている。わたしも参加する予定だが、編成の問題が優先するから、わたしのかわりに三人のうち誰かが登る事になるかも知れない。また、本当は十四階まで行きたいそうだが、レベル二十八以上限定となると参加者が集まりにくいという事情もあるので、十一階攻略に切り替える可能性もあるそうだ。結局どうなるかは現場に行かないと判断出来ないが、十四階はわたし達の誰も経験が無い（というより、そこまで登れるのはクロス姉だけである）ので、出来れば何度か攻略に参加した十一階が有難いと考えている。

### 第十三話・クロス姉三十になる

一月二十二日。

本日も四人ともレベルに変動はなかったが、クロス姉の経験値のゲージがもうすぐEにとどくところまで伸びてきているようだ。多分明日の朝にはレベルがあがると考えられる。

一月二十三日。

本日早朝、クロス姉から三十になったと報告が入った。

石碑の入り口付近で、ユグドラスパイダーにファイアーボール2をぶち込んで倒し、自分の周囲に光の渦巻きが起こってレベル三十になったのは、何物にも代えがたい至福の瞬間だったらしい。うらやましい話である。わたしもいずれは迎えてみたいものだ。

クロス姉は早速三十装備に着替え、かねてから計画していた通りユーフレイト東岸でのソロ狩りが可能かどうか確かめに向かった。相手はレベル二十七の蛇と豹。どちらもファイアーボール2を数回繰り出せば倒せる事が判明しているが、逆に相手の反撃の度合いはどの程度かが問題になってくる。そこで試した結果、メイジ職の三十装備（盾も含む）に対して蛇からのダメージは三十八前後、豹は四十五前後と判明した。うまく後退しながら攻撃すれば相手からの攻撃は二回程度で済むから、ソロ狩りでも十分対処出来るそうである。この能力値を踏まえて、自分が東岸でどの程度の事が出来るかを把握し、今後のレベル上げの計画を組むという。もちろんパーティーへの参加も積極的に行いたいそうだ。

ところで、三十に上がる寸前、アクシデントがひとつあったらしい。もうそろそろレベルアップするかな、という時に、すぐ近くにレベル二十七の前衛職プレイヤーが突如現れ、クロス姉がモンスターに攻撃をしているその時、その狩場とは逆方向の場所にいるリーフスピリットに向かっていったのがチラッと見えたそうだ。その時

は気にも留めなかったとうだが、クロス姉が獲物の蜘蛛にとどめをさそうとしたまさにその瞬間、背後からリーフスピリットの飛び道具がクロス姉を襲った。すでに獲物との交戦でかなり体力を消耗していたクロス姉は、緊急の赤タブも帰還の書も発動することが出来ず、そのまま死んでしまったそうである。復活する前にその方向をみると、先ほどの前衛職プレイヤーも死んでいるのが見えた。頃合を見計らって、すぐ近くにある運命の樹の石碑で復活したが、Pの後半まで来ていた経験値のゲージがXの真ん中まで戻ってしまったというそうである。

「まったく最低よね。自分の力を認識していないのか、それとも別の理由があるのかは知らないけど」

普段は温厚なクロス姉が、かなり感情的な口調でそうまくしたてた。まあ詳しい話を聞いて分析した限りでは、やはり技量と知識が不足していた故の事故だった、というのがわたしと姉の一致した意見だ。いずれにせよ、そういう場合は逃れようがない事の方が多いし、気をつけると言っても限界はある。周囲に別のプレイヤーがいる場合は、その干渉によってモンスターも予測出来ない動きをするかもしれない、という認識をするしか無いだろう。…もつとも、今回の様に突如として現れたのであればどうしようも無いが。



## 第十四話・見慣れぬ二人組

一月二十四日。

東岸に行っているクロス姉から、レベル上げが順調に進んでいると報告が入った。ただ、土曜日の夕刻は港付近も流石に混んでいたため、あきらめて深夜に再開、豹と蛇の動きや沸くタイミングを覚えながら、順次狩りを続けたそう。夜明け前には知り合いのドルイドとペアを組み、かなり早いペースでの狩りに移行、さらにそのドルイドの知人であるソルジャーも加わって東岸の奥に進み入り、以前から行こうと思っていた地区中央部にいる神官と会い、エピッククエスト十一他幾つかのクエストを受ける事が出来た様である。

ところで、荷物整理とクエスト報告の為一旦バビリム西に戻ったクロス姉が、西側の出入り口付近で見慣れない人物に出会ったそう。なんでもどこかの名家の一人とその従者で、従者は新しいアイテムを販売するショップでもある。もっとも本人たちは、アイテムは販売ではなく施しで、代金は寄付だとか何とか言い切っているらしいが、とにかく従者から手に入るのは、ちよつと痛い内容の称号が一種類と、変に気取った体裁の回復アイテムが二種類。気取っているとは言っても、回復アイテムとしてはちゃんとした内容で、片方がHPを五十、もう片方がMPを五十、それぞれ瞬時に回復してくれるそう。回復量は赤タブや青タブには及ばないが、非課金の回復アイテムとしてはそこそこ使えるだろう。もっとも一個五百銅という金額は微妙だが、なお、彼らの話によると、いつまでもいる訳では無いらしいので、興味がある方は早めに行ってみる事をお薦めする。

## 第十五話・ギルドの塔パーティー

一月二十五日。

わたしが所属するギルドで、メンバーに貸し出せるスキル書などを増やす為の塔パーティーが開催された。集まった人数から十一階及び十四階をそれぞれ目標として、プレイヤーのレベルによって振り分ける事になったのだが、ギルドの性格上どうしても前衛職が少ない。フレンド登録したプレイヤーにも当たってみたが、いずれも連絡がつかなかった。で、色々と相談した結果、わたしの代わりにソルジャー職のタルカスが十一階行きパーティーに参加する事になった。わたし自身が参加出来ないのは残念だが、まあタルカスの頑丈な身体なら壁としても十分だろうし、任せても安心と判断して任務を託す事にした。

結果、めばしいスキル書があまり手に入らなかったため、成功とは言いがたかったが、十階と十一階のエンigma攻略もかなりスムーズに進み、塔攻略の訓練としては良い結果と思われた。ただ、後でタルカスも指摘していた事だが、課金アイテム無しで十階を攻略するのは非常に難しい。今回、タルカスも結局課金の赤タブを使ってようやく攻略できたそうだ。

それらも踏まえて、コストを考えるなら、むしろ五階から九階までを周回した方が有利では無いかと考えている。五階の相手も手ごわいが無課金でも倒す事は十分出来るし、七階から九階にかけてのエンigmaは馴れば比較的容易に攻略でき、宝もそこそこ良いものが出る。特に九階に出る技能書は、ものによってはかなり高値で取引されており、金策としても非常に魅力的だ。あと個人的に隻眼の竜事件クエストを進めるため九階に登りたいという事もあるが、この辺は出来れば近日中にフレに相談してみようかと思っている。

## 第十六話・気分を変えて

一月二十六日。

四人ともレベルに変動は無し。全員の経験値がレベルアップまでかなり遠い位置にあるため、しばらくはこのままになりそうだ。

一月二十七日。

昨日にひきつづき、本日もレベルに変動は無し。全員、地道なレベルアップ訓練にもいささか飽き始めている。たまには気分転換も必要だと意見が一致し、まずタルカスが塔一階から六階までのクエスト消化パーティーにお手伝いとして参加した。最終目的はパーティーのリーダーが請け負っていた六階のソーサラーの持つ辞書クエストだが、全員レベルが十四以上であったため、タルカスの発案で七階まで登る事になったそうだ。

五階の相手との戦闘はもうタルカスは慣れたもので、囃役のプレイヤーもお手伝いとして参加したため何度も経験があるらしく、特に問題なく勝利。さらに六階のソーサラーも二体目で辞書が出た。こういうクエスト消化パーティーはむしろパーティーを組んだリーダーの方が経験が浅い場合がおおいので：なんかちよつと嫌な記憶が頭をよぎったが（笑）：タルカスともう一人のお手伝いの人以案内役となり、七階に階上して順調にエニグマを解読、宝箱には銀製マトックまで入っていたそうだ。

ちなみにタルカスはダイスの目は良くなかったが、それでも四階の宝箱で出た「製作図・侵攻5F」がもらえた：はつきり言って価値としてはかなり微妙といわざるを得ない。これがあれば侵攻5Fの自作が可能だが、侵攻5Fはアンシャアの魔具が十個あれば交換も出来るし、譲渡が可能になってからは塔周辺の露店で一銀程度で売っている。

まあ、この世界の生産はどれでもそういう傾向があるが、製作コ

ストを考えるとあまり効率がよくない。何千もの骨やレザーを使ってまでレベルを上げる必要があるかどうか、生産を目指す人はその辺を考えて始めた方がよいかもわからない。

## 第十七話・レベルアップと装備の関係

一月二十八日。

タルカスが二十五に上がった。これで二十五装備の武器と盾を使えるようになったため、早速以前から用意していた装備を手にした様だ。

武器は登頂者の剣（防＋）。如何にもガーディアンを目指すタルカスらしい選択かもしれない。盾はデルケトシールド。友人の露店を覗いていて、たまたま格安で売っていたものだそうだ。付加された効果もさる事ながら、今まで丸型の盾しか持った事がなかったタルカスは、ちょっと嬉しそうである。他の姉妹と同様おしゃれには疎いが、リレ程では無いにせよ基本的には美人だし（一部で熱狂的な人気を持つ某アイドルに似ていると言われたらしい）、まして年頃なのだから見栄えが良くなって嬉しくない筈はないだろうと思う。もっとも、予備用の武器がまだ揃っていないので、レベル上げが少し不自由そうだが、タルカス自身が鑄造のスキルを持っていて、しかも近々レベル5に昇格するらしい。タルカスはそれに備えて以前からハードアックスの素材を集めているので、生産が可能になり次第それを製作してレベル上げを進めていく予定との事だ。

一月二十九日。

四人ともレベルに変動は無し。地道にレベル上げが続いているが、特に東岸にいるクロス姉が心境著しい。また、繰り返して行える、いわゆる「金策クエ」も充実していて、パーティーを組んでクエストを消化する形で周回すると、かなりの金額になるらしい。わたし達も早く参加できるようにになりたいと思う。

一月三十日。

クロス姉が三十一に上がった。しかもギルドの先輩のパーティー

に参加してエピックエの十二までクリア出来たそうだ。メイジ職の場合、エピソード十二達成の報酬はアイスブレス3の書で、レベル三十三になり次第使えるそうだ。これでレベル上げにも張り合いが出る、とクロス姉が珍しく弾んだ声で報告してきた。相当嬉しかったのだろうと察しがつく。

もっともその気持ちも分からないでも無い。なにしろ東岸は、奥に進めば進むほど火耐性のモンスターが増えてくるのだから。さしあたっては例のサソリに対抗出来る能力が必要になるだろう。その点でも早くレベルを上げる必要があるそうだ。

## 第十八話・タルカスの生産技能が五になる

一月三十一日。

タルカスが持っている鑄造技能がレベル5に上がった。鑄造レベル5は基本的に戦闘レベル二十五以上の斧や杖を作る事が出来る。先ごろ戦闘レベル二十五になったばかりのタルカスも、早速、自分で使うハードアックスを作成した。四回作って運良く四回とも成功したので、訓練に使うための武器はそれで揃ったそうだ。なお、わたしが後に使うであろう杖なども作ると張り切っている。

姉妹が全員それぞれ違う技能を持っていると、こういった利便性が得られて実に便利なのだが、タルカスの鑄造レベル5とリレイヤの刀工レベル4に較べて、わたしの服飾やクロス姉の装飾はレベル2のままである。装飾はオーブの製作が出来るので便利だが、オーブの原型は東岸の蛇などが持っていたため、なかなか入手出来ないという問題がある。それに較べて刀工用の刀身や鑄造用の原型は戦闘レベルに近い城門や森で入手出来る。

そういった理由があるため、これまではタルカスとリレイヤの生産レベルを優先的に上げてきたが、クロス姉が東岸でレベル上げを始めた事により、オーブや服飾の原型が手に入る様になったため、これからはわたしやクロス姉の生産レベルも上げていきたいと思っている。

二月一日。

今日は久しぶりにわたし自身が塔パーティーに参加した。先月の十六日の一件以来、塔パーティーに参加するのを少しためらっていたのだが、隻眼の竜事件の最終段階である九階のクエストが残っていたため、どうしても早めに登っておきたいと思ったのだ。丁度十一階の周回で最初だけ五階から登るパーティーのメンバー募集があったので参加し、うまくクエストをクリアする事が出来た。これで

姉妹の中で唯一カルセドニーという羽をつけていなかったわたしも、晴れて他の三人の仲間入りである。ただ、わたしにはどうも似合うとは思えないのだが：

さて、この日の夜は、わたしが所属しているギルドのリーダーが懇意にしている幾つかのギルドの合同開催による格安即売会が、バビラムの東西連絡通路付近で開催された。飛び入りも歓迎だということで主催の方に許可を頂いてから、貯め込んでいた赤土や研磨剤などをかなり格安。店舗に売却するより僅かに高い程度。で露店に並べたところ、あっという間に完売となった。

ただ、素材はかなり売れ行きがよいが、ついでに並べた生産武器などは非常に売れ行きが悪い。この辺は今後考えるべき点かもしれない。

二月二日。

クロス姉が三十二になった。かなり早いペースで進めている様だ。というのもその直前、友人と一緒にエピッククエスト十三を受けにナラクの採掘場に行ったそうなのだが、うるついているモンスターが多くが火耐性であり、現在のクロス姉の主力武器であるファイヤーボール2が全く役に立たないという状態になる。口にくそ出さないが、クロス姉はかなりショックだったようだ。とにかく早くアイスブレス3を使えるレベル三十三になりたいとの事で、これからさらに訓練に精進するらしい。我々三人、追うのが大変である。



## 第十九話・リレイヤー二十三になる

二月三日。

私達の中で一番レベルアップが遅れていたリレイヤーが、ようやく二十三に上がった。わたしと同じレベルになったので、このあとでも引き続き二人で花畑に於ける合同訓練を続ける事になっている。二十三になって初めてマンイーターと戦ったりレは、二十二より確実に実力を付けたと感ぜられる。ただし攻撃力は増えたものの防御力が相変わらず弱く、マンイーターに攻撃されるとたちどころに体力が減っていき、わたしが常に回復をしないとすぐに危険な状態に陥ってしまう。タルカスとは全く異なる道を歩んでいるリレだが、もちろんそれはそれでよいのかもしれない。オールマイティーな者などいないし、だからこそパーティーでお互いをフォロー出来るのだから。

一方、東岸で訓練を続けていたクロス姉が一時的に戻って塔に登った。知人が九階のドツペルゲンガーと三角形の鏡のクエストを両方消化したいという事なので、そのお手伝いだそうだ。同行したメンバーの懸案も含め、クエストは完全にクリア、九階のE2では装飾の技能書まで出たそうだ。意思の疎通も完璧に近かったそうで、進む途中も不安らしい不安は無かったらしい。

「毎回こうなら楽なのに」とクロス姉がこぼしていたので、やっぱりクロス姉も塔パーティーでは痛い目に遭っているのかな…と考えていたら、それを察したように教えてくれた。なんでも、所属するギルドのメンバーが、先月十二日にわたしが組んだ例の

と一緒に、またまた騒動になったそうだ。そのギルドメンによると「わたしが悪者にならないと攻略が進まないのよ」だそうである。やれやれ。いずれにせよ、わたしからの証言もあって、姉のギルドのメンバーは今後　と組む事は無いだろう。

二月四日。

タルカスがソロによる訓練場所の選定で迷っているらしい。レベル二十五になったので、さすがに森では経験値を獲得しにくくなったのだが、聖域に行くには例のババ二十二が立ち塞がる通路を突破しなければならぬ。頑健なソルジャーとはいえ、二十五ではこれが意外に難しいそう。試行錯誤の結果、もしパーティーが組めなければ帰還の書を使って聖域の石碑まで飛ぶ方法を使うとの事である。無論聖域行きのパーティーがあればそれにこした事はないのだが、そういつもうまく見つかるとは限らない。その場合多少コストがかかるが、レベル上げを優先する立場としては仕方ないのかもしれない。

## 第二十話・クロス姉IB3を習得する

二月五日。

クロス姉が知人に誘われて初めて審判の荒野に行った。採掘場はまだ火が通用する相手がいたが、こちらは敵がほぼ全部火耐性だったそうである。いまだにレベル三十二でアイスブレス3が使えないクロス姉はかなり苦戦したらしい。パーティーでは後ろに位置し、すでに通用しにくい威力しかないアイスブレス2で補助的な攻撃を行ったそうだが、相手の下限がレベル三十三或いは三十四で、跳ね返される事が度々あったので、レベルアップの必要性を改めて感じているようだ。わたし達もいつかは行く場所だし、先行してくれるクロス姉の情報はとてもありがたい。ただ、職や装備或いは得意な戦法によつては別のノウハウも必要になるだろうから、そういう事はやはり自分でひとつひとつ確かめなければならぬだろう。

二月六日。

タルカスが二十六に上がった。

「かなり頑張っているわね」と声をかけると、タルカスは笑みを浮かべて無言で頷いただけだったが、あとでタルカスの友人から聞いたところによると、実はひとつ思うところがあるようだ。

現在レベル三十二のクロス姉が、三十三になってアイスブレス3が使える様になった時点で、狩場をナラクの南にある採掘場に変更するつもりだ。という事はわたし達も聞いているが、そうするとわたし達四人の中にユーフレイト東岸で狩りをするものがいなくなる。東岸の狩りはかなり有益で、例えばダチュラという蛇がいて風のオーブの原型やレザー、赤土など使えそうな素材を沢山おとしてくれる。しかし推奨レベルが二十七以上であるため、わたし達の中で現在該当するのはクロス姉だけだ。そこで一番レベルアップが早いタルカスが、クロス姉が三十三になると同時に二十七になり、東

岸に狩場を移そう、という思惑をもっているらしいのだ。メイジのクロス姉は三十になるまで東岸にはいけなかったが、ソルジャー職でしかも防御を重点的に鍛えているタルカスなら、おそらく二十七でいけるだろう。だが、危険である事には変わりはない。くれくれも無理はしないで欲しいものだ。

二月七日。

森でわたしと訓練を続けているレイヤーが一旦ラジャフに戻った時、前日から新しいクエストが始まっている事を知り、気分転換でやってみたそうだ。

「どうだった？」と尋ねると、肩をすくめて、

「正直言って微妙ね。時間がかかるわりには報酬は称号一個だし……でもまあ、もし次があるとすればクエ消化が条件になるでしょうから、暇ならクリアしておいていいんじゃない？」相変わらず遠慮の無い物言いだ、まあ言いたい事はよく分かった。わたしも何かのついでに消化しておくでしょう。

クロス姉とタルカスとの訓練も順調に進んでいるらしい。クロス姉は経験値のゲージがかなり高いところまで積みあがっており、うまくすれば明日の日曜日には三十三になるかもしれないという事である。

二月八日。

クロス姉がとうとう三十三に上がり、アイスブレス3が使えるようになった。早速ナラクに移動して、習得したばかりのアイスブレス3の試射をやってみたようだ。あらかじめスキル強化ポイントを2個貯めておいたそうなのでランク3での値だが、氷耐性の無い相手にコンスタントに四百ダメージ前後与えられるとの事である。クリティカルでは八百六という数値が出たそう。確かに凄腕の威力だが、それだけに、下手に使うとタゲられる（相手の怒りの矛先が自分に向く）可能性があるから、以前のスキルにもまして使う時は慎

重になる必要があるとのことだ。

それにしても最近のクロス姉のレベルアップの速度はすごい。転職可能なレベルまであと七まで来ているし、これからナラクを拠点とするなら、さらに早いレベルアップが見込まれる。十もレベルをあげられてしまったわたしとリレイヤーは、少しあせり気味である。

## 第二十一話・レベルアップ記録

二月九日。

わたしが二十四になった。あたらしいクエストも発生している。先行している二人にはまだ差をつけられているが、少しずつでも上げていかなければ。

ところで、二十四になって早々に、タルカスから訓練を手伝って欲しいという要請があった。なんでも聖域での訓練が少し不調であるらしい。二十六になったタルカスは、相手がローパー二十四やプール二十三では獲得出来る経験値が少なく、時間がかかりすぎるというのだ。そこで運命の樹での訓練に切り替えようと考えたそうだが、ユグドラスパイダーだけならともかく、あの場所にはリーフスピリットという厄介な相手もいる。リーフスピリットは直接攻撃の威力だけなら蜘蛛と似た様なものだが、その倍近いダメージを奪われる飛び道具があり、もしこれがクリティカルになった場合、かなり危険な状態におちいることになる。現在のタルカスだけではとても無理なので、二十七になるまでドルイドであるわたしに回復サポートをしてほしいとの事だ。早速出向いてみたが、確かにハイリスク・ハイリターンの場所だと感じられる。ただソルであるタルカスの体力なら、よほど無理をしない限り二十六でも大丈夫だろう。

二月十日。

タルカスが二十七になった。かねてからの計画通り早速東岸に行ってみたそうだが、厳しいもののなんとか蛇二十七や豹二十七に勝てるそうで、これからは東岸がタルカスの主戦場になるだろう。

サポートを引き受けたわたしも、ついでにかなり経験値を獲得できた。運命は訓練場としてかなりよさそうなので、わたしとリレイヤーも二十六ぐらいになったらここにこようと思っっている。

ところでタルカスの能力は予想以上に上がっているらしい。東岸

に赴く前にエピックククエスト9をクリアしておこうと、岩穴の奥にある古代の碑にひとりで行き、かなり難関だったもののクリア出来たそう。

「問題なかったわよ」とタルカスは平然として言ったが、例の「ウニ」だけはさすがに怖かった事が、その話題に触れたがらない事から想像がつく。

二月十一日。

昨日古代の碑をクリアしたタルカスが、知人と一緒に塔十三階に登ったそう。ソルソルスカドルドルというやや変則的な構成だったそうだが、メンバーが優秀だった事もあって十階は一発クリアどころか課金アイテムも必要なかったらしい。残念ながら二分以上かかったそうだが、メイがないのでは仕方ないだろう。続く十一階もメイがないので片方のエニグマのみクリアして階上。見事十三階でエピック9の手順をクリアしたとの事である。

続いてはエピック十だそうだが、しかしこれは二十七のタルカスでは当然無理だろう。それにしてもエピック十の難関がレベル三十五で十一の難関が三十というのはどう考えてもおかしい。この辺はなんとかならないのだろうか？

夜遅くなって、ナラクの採掘場で訓練を続けているクロス姉から三十四になったと報告が届いた。あと六で転職が可能になる。こうなったらもう一刻も早くそこまでいってもらいたいものだ。

## 第二十二話・補給と情報の重要性

二月十二日。

タルカスが訓練場所を運命から東岸に移したのを機に、わたしとレイヤーも訓練場所を森の花畑から聖域に変更した。現在のレベルはわたしが二十四、リレが二十三。さすが花畑では経験値の獲得がしにくくなったためだが、やはり問題となるのは森から聖域に至る過程で通らなければならぬ例のババ二十二がいる通路である。わたしたちのレベルでスカとドルのペアだけで突破しようとするのはさすがにきびしい。この場合各自がパーティーに参加するか跳躍の書或いは帰還の書を使って通路をパスという方法がある。また、課金のマエストロ研磨剤を使えば武器の消耗は防げるので村との往復は大幅に減らす事が出来る。ただ、前者は行きたい時に必ず行ける訳ではなく、後二者はコストの面で問題がある。この辺はなかなか判断に迷うところだが、臨機応変に行くしかないだろう。

二月十三日。

いつの時代、いかなる状況においても、戦いに勝つ手段はそれほど大差は無い。敵より大きな戦力、その戦力を維持するための補給態勢、そしてそれらを効率的に運用するための情報、この三者である。この世界においてもそれは変わらない。どれをおろそかにしても勝つ可能性は格段に下がってしまう。

なぜこんな大上段に構えた話をするかというと、今日、この事をあらためて考えさせられるふたつの出来事が起こったからだ。

タルカスが東岸で訓練を開始した事は過日も述べたが、今日、同様のレベルどうしでパーティーを組む事になった。ところがあつまつた陣容はタルカスを含めてソルソルソルスカスカ。どうしてもドリルドが見つからないというのだ。ひとつの提案として、戦闘力で



相手を圧倒し、回復は自己で行うというものがあつたが、提案した人物以外は賛成しなかつたらしい。クエストの消化ならともかく、金策とレベル上げでその方法を使うならむしろソロで十分だし、おそらくグレートベアには通用しないというのが提案を受けた側の意見であつた。却下された人物はやや不貞腐れた様子で、じゃあどうする？と逆に問い返して来た。考えた末に出た結論は、タルカスがたまたますぐ近くにいたわたしと交代するというものだった。わたしはまだ二十四なので東岸の金策クエストは受けてはいないが、それでもレベル上げにはなる。背に腹は変えられないという事で、一周だけという約束でタルカスが抜けてわたしがパーティーに参加した。

実はわたし自身にとって初めての東岸周回だった。クロス姉やタルカスから話は聞いていたので特に問題はなかつたが、やはりファングやベアに何度か攻撃された時は怖かつた。それでも戦いぶりをみて、やはりこういうパーティーに回復（補給）役は必要なのだと感じさせられた。最初にドル無しパーティーを提案したプレイヤーも、最後には納得したらしい。

一周したところでドルイド二十八がみつかったので、わたしもタルカスと交代した。それにしても東岸は慢性的にパーティーに参加するドルが少ないらしい。わたしも早く二十七になってここにこれたら良いと思つている。

もうひとつは、クロス姉が目撃した話だ。

クロス姉は現在ナラクの採掘場の橋の付近でロッキーターというレベル三十三の亀を狩っているのだが、その最中、レベル三十八のスカウトが通りかかり、行く手を遮るロッキーターを倒そうとした。三十八対三十三ならそれほど心配は無いだらうと高見の見物を決めたクロス姉だったが、そのスカウトはあつという間に倒されてしまった。回転して気絶させる攻撃、いわゆる「カメラ攻撃」をロッキーターが放ち、気絶から立ち直つたスカウトはそれに対し

て何も対応する事なくがむしやらに戦い続け、あえなく死んでしまつたというのだ。この攻撃はどんな職でも脅威であり、一度受けたら致命傷になりかねない。だからロックイーターと戦うならこの攻撃に対する備えを考える必要がある。このスカウトはその情報無しで戦つたらしい、というのがクロス姉の見解だ。

「相手の特性を知るといのはまず戦闘の基本だと思つのよね。わたしがメイジで、相手の耐性によって使う魔法を変更しなければならぬから、余計にそう感じるのかも知れないけど」

それもあるだろうが、相手の攻撃力や戦い方、スキルを繰り出すタイミングなどは職種を問わず把握すべき情報だとわたしは思う。

この辺はわたし自身も気をつけなければならぬ事だろう。

## 第二十三話・「適性」について思う事

二月十四日。

リレイヤーが二十四に上がった。聖域の南側でわたしと二人、ローパー二十四やスピリット、或いはプール二十三を相手に訓練を続けているが、やはり同格や格上を相手に戦うと獲得出来る経験値がまるで違う。出来れば今度はローパー二十五がいる北側に行きたいところだが、例によってそこにいくまでが大変だ。とりあえずしばらくはローパー二十四を相手に戦うことになるだろう。

一方、クロス姉の装飾レベルが三に上がった。四になれば風のオーブが作れるようになる。原型は以前から東岸のダチュラがおとすのを溜めていたし、現在はタルカスが集めているから、それを使ってオーブを自家生産出来るようになれば、今まで素のまま使っていた各人の武器に装着する事が出来る。わたし自身の鉄槌やメイスなどにも使えるので、今から楽しみにしている。

二月十五日。

今日、クロス姉から三十五になったと報告が入った。夢だった転職もいよいよ具体的な目標としてとらえられる様になったと嬉しそうである。

ところで、この報告に続いて、クロス姉から少し考えさせられる話を聞いた。

この日の朝、知人からエピックククエストをクリアしたので手伝ってもらえないかと連絡が届いたそうだ。エピ十といえば、例の運命の樹の奥にいるババ三十五との戦いがメインである。自分がクリアした時は見ていただけだったので、次の機会は是非参戦したいと思っていたクロス姉は、喜んで参加する事にした。ただ、やはり知人の集めたメンバーでは如何にも戦力不足だったと感じ、ギルドに相談して四十ローグの人に助っ人を頼んだ。

だが、いざ現地に赴くと、転職済のプレイヤーがひとりババを相手に戦っていた。もし我々と同じくババ三十五狙いなら、その時だけパーティーを組んでもらおうと思ったのだが、どうやらそうではなく、単なる素材集めにきているらしい。そこで雑魚はその人に譲り、我々はババ三十五が出現するまでおとなしく待とう、という結論になりかけたのだが、ここでメンバーの一人が異義を唱え始めた。適正レベルが来たのだから上のレベルの人は場所を明け渡すべきだという主張である。ところがこれに助っ人のローグ四十が噛み付いた。そんなルールは存在しないし、それならこのクエストの適正ではない自分が参加するのはおかしいという意見だ。かなり険悪な空気が流れたそうだが、クロス姉が「これはこのパーティーのリーダーのクエだから」と言ったら二人も引き下がり、そのリーダーが「まあ自分も適性でない場所で素材あつめやった事あるし、ここは譲りましょう」と結論付けて収まったそうである。

その後十分ほどでババ三十五が出現し、無事クエストを達成したので、とりあえず目出たし。意見が対立した二人も最後には（少なくとも表面上は）気持ちよく挨拶して散開：となったそうだが、対立した意見に対して結論は出ないままだったそうだ。

「貴女はどう思う？」というクロス姉からの問いかけに、わたしは即答が出来なかった。以前にも似たような話は聞いた事があるし、良い狩場に限られる以上、獲物の取り合いは頻繁に起こるだろう。万人が納得出来るルール作りなど可能なのだろうか？

「そうね。確かにルールや強制力のあるマナーを設定するという方法もあるでしょうけど、わたしはあまり賛成出来ないのよ」というクロス姉の返答に、わたしはやや意外さを感じた。

「よほど目に余る行為ならともかく、ルールですべてを決めるのはどうか、と思うわけ。まずその場で当人どうしがきちんとコンセンサスを得れば、大概の問題は解決するのよ。今回にしたって、異論を唱えたメンバーは相手とは一言も話さず、ただ自分の考えだけを仲間内に繰り返し述べて顰蹙を買った。どうやら以前何かあった

事は想像がつくけど…」

「…確かに、何か嫌な目にあっただんでしょね。」

「このパーティーはリーダーのクエストをクリアする事が第一で、リーダーがそう判断したのだから、それを尊重すべきなのよ。もしそれが納得出来ないというのなら、自分が同様のパーティーを結成して似たような状況になったときに、自分で相手に『どけ』と言えばいいわけ。まあ現場ではそこまでは言わなかったけど、一人の意思や判断が全てにあてはまるほど単純な世界ではないと思うのよ」

確かにこの世界は、数多くの意思がうごめいている。閉じたパソコンの中で繰り広げられるオフラインゲームと決定的に違うのはそこだろう。結局自分で工夫して解決するしかないのかもしれない。

## 第二十四話・戦闘能力について

二月十六日。

四人ともレベルに変動は無し。そろって上げにくい段階に来ていて、やや中だるみの状況になっている。そんな中、わたしの経験値が十時の方向まで来ていて、一番レベルアップに近くなっている。二十五になればかねてから用意していた二十五武器である杖を使うるので、それが楽しみである。

二月十七日。

昨日に続いて四人ともレベルに変動は無し。地道なレベル上げが続いているため、取り立てて書くほどの出来事も無い…と思っていたら、クロス姉から報告があった。所用でしばらくこの世界に来なかつたフレの一人が、ひさしぶりにログインしてきたそうである。まだその所用が行程半ばであるため、本格的な復帰は春以降だという事だが、それでも久しぶりに連絡がとれた事は嬉しかったらしい。

以前にも似た主旨を書いた事があるが、オンラインゲームのキャラクターの性能は中の人までひっくりくるめて考えなければならぬ。判断力や技術もさる事ながら、相性というものは確かに重要である。以前、まだ城門で牛狩りをやっていた頃のわたしが、あるソルジャ―とペアを組んだ事があった。これがまるで息の合わない相手で、こちらがこう動くと予測していると、ことごとくその反対の動き方をするので。モンスターとの距離のとり方も回復のタイミングも合わない上に、まるで周囲を見ていない様にアクティブモンスターの真っ只中に突っ込んでいく。わたしがその事を指摘すると、「見たつもりだ」と反論してきた。つもりでは困るんだけど、と言うと次は気を付けるといふ返答だった。だが実際の動きはそれとは裏腹。これ以上一緒にいたらストレスがたまりそうだと感じたわたしは、戦いのスタイルが合わないから解消しようとして申し出た。相手もそ

う思ったのかどうかはわからないが「わかりました」の一言を残して分かれた。それ以来そのプレイヤーとは組んでいない。

数値に表せない個々の感性や性格が、実はオンラインゲームにおいて数値以上に重要である事は、長くやっているプレイヤーならわかっていただけだと思う。

二月十八日。

バビリム平原の北に新しく行ける場所が出来た。どうやら湖水地帯らしいが、推奨レベル五十以上の為我々四人のいずれも見て回る事は出来ない。それでもとりあえず入り口付近の様子だけでも見ておこうと、ちょうど近くにいたわたしが近づいてみた。

塔周辺から平原に入って東に進むと、いつもは鼠や蛇を狩ってレベル上げをするレベル十前後のプレイヤーがいる程度なのに、今日は転職組がちらほら見られる。レベル五十一という人がいて、どうやらカンストだったのがひと戦闘終えてレベルを上げたのだと推察される。彼らをみやりながら橋を渡って新開地に入ってみると、やはりレベル五十や五十一の人たちが人待ちしている様子で入り口付近にたむろしている。クロス姉のギルドのリーダーなど、見知った顔も見受けられた。おそらくみんなこの日を心待ちにしていたのだろう。わたしたちがここに足を踏み入れるのはいつの事やら…

二月十九日。

塔周辺を通りかかったら、五階の周回パーティー募集のシャウトが反乱していた。なんだろうと思ったら、昨日の新開地の公開と同時に、ヒートボディスという新しいスキルが塔の五階に実装されていたのである。わたしが所属するギルドのメンバーが早速手に入れて試していたので話を聞いてみると、十三秒間だけ攻撃がクリティカルの連続になるとの事だ。クールタイムは実時間で一時間。聞いた限りでは、スカウト職の奥義の簡易版、という感じがするが、どの職でも使えるそうだ。

考えるに、ソルジャー職のプレイヤーは是非とも手に入れたいだろう。対PD戦で、最初にこれを使って相手をクリティカル攻めにすれば、そうそうヘイトが他のプレイヤーに移る心配が無くなる。パーティー戦闘の切り札になる可能性があるのだ。案の定タルカスはわたしの説明を聞いて目を輝かせていた。無論奥義の有難さを痛感しているレリイヤーも同様である。これに対して、わたしやクロス姉の様な後衛職は、まあ無いよりは有る方が便利かな、といったところだ。パーティーにおいては、わたしは回復に専念する事が多いし、クロス姉は下手に使用して自分にモンスターのヘイトがきたらたまらない、と言っている。

夜、バビリムを通りかかったら、さっそく売る露店が出ていた。価格はまちまちだが、安くても百銀は下回らないようだ。

二月二十日。

私がつうやく二十五にあがった。これでかねてから用意していた登頂者の杖（魔+）がパーティー戦闘で使える。MP切れになりにくいのでヒールもしやすくなるだろう。

ところで（魔+）といえば、今日になってアサ魔が値崩れし始めているらしい。どうやら、ヒートボデイス目当てのパーティーが数多く五階を周回しており、その結果同じ五階にあるアサ魔がダブついて安くうらわれているようだ。わたしがみた限りでは二十八銀というのがあったが、それでも売れていないところを見ると、さらに大量の数がでまわるであろう今週末には、より安い価格で売られるかも知れない。予備のアサ魔をほしがっていたクロス姉は大喜びである。

それにしても、この世界もまたリアル世界と同じく需要と供給のバランスが価格を決定するのだ、という事をあらためて思い知らされた一件だった。



## 第二十五話・HBS騒動

二月二十一日。

タルカスがヒートボデイスを手に入れた。わたしが考える限り、このスキルがもつとも必要なのはソル職だったので、実にうまい具合に取得できたと思う。まあレイヤーは、口にはしないものになり羨ましがっている様子だったが…

早速使用テストを行うというので、わたし達も見学させてもらったが、確かに戦闘開始時からこれだけダメージを与えられれば、滅多にタゲが移る事が無さそうである。そういう意味ではやはり、わたしゃクロス姉は自分が取得するよりメンバーのソルに取得してもらおう方がありがたい。

二月二十二日。

夜遅くになって、クロス姉から三十七になったと報告が届いた。とはいうものの、まだエピックククエスト十三をクリア出来ていないので、転職が具体化するレベル四十までにはなんとかしたいと考えているようだ。

二月二十三日。

エピックククエスト十三についてクロス姉が少し困っているらしい。例のヒートボデイス獲得に絡んだ塔五階周回パーティーが盛況で、任意の階に行く『侵攻』というアイテムが入手困難になっているというのだ。実際に登る五階用の侵攻の価格がそれまでの二倍以上になっているのも困りものだが、それに連れて十階や十五階に行く侵攻がなかなか見つからないらしい。どうも侵攻を生産する人が現在儲けの良い五階用を優先して作っているせいなのではないかというのがわたしとクロス姉の一致した意見だが、理由はどうあれ非常に困ったものである。ただ、幸いにも魔具や魔符はある程度持ち合わ

せがあるそうなので、場合によってはそれを交換するそうだ。

二月二十四日。

タルカスが二十八に上がった。これでいままでクロス姉しか行けなかった十四階にもいけるようになったそうだ。十四階は十一階と同様レアアイテムの宝庫であり、ここにいけるのに行けないのは塔の攻略に大きな差がでてしまう。わたしもリレイヤーもそのことは十分承知しているので、なるべく早く上がりたいと思っている。

## 第二十六話・クロス姉、転職準備開始

二月二十五日。

ラビリンスで訓練を続けているクロス姉が、三十七から中々進まないところぼしていた。ダンジョンの構造から、ひとつ上のレベルがいるモンスターの場所までソロ狩りに行くのが大変なのだそうだ。この点はこの世界のひとつのくせのようなもので、迷いの森や聖域、或いは東岸などでもおなじ問題が立ちはだかる。進みなければパーティーを組む必要がある…というのはオンラインゲームではまっとうな構造なのだろうけど、なんとなく釈然としない。

二月二十六日。

クロス姉がひさしぶりにデスペナを貰ったそうだ。なんでも、レベル上げパーティーでアイオブガールの部屋に行ったら、PDのゲイズが出てしまったという。相手のレベルは四十。それに対してクロス姉とソルが三十七。ドルともうひとりのメイが三十五。明らかに戦力不足だが、冷静なクロス姉らからぬ『その場のノリ』で挑んでしまったとの事。しかもよりによって、中盤でクロス姉のアイブレス3がクリティカルになってしまい、タゲがはねて瞬殺されたそうだ。

「ただ、そのおかげで残りの三人で倒せたという、皮肉な結果になったのよね…」と、苦笑とも何ともいえない表情で語るクロス姉は、肩をすくめてデスペナを消すべく再びラビリンスに向かった。

二月二十七日。

クロス姉が三十八に上がった。いよいよ転職クエストの最初に関われる段階である。週末には知人とエピッククエスト十三をクリアする為に塔十八階に登る事を予定していて、かなり順調のようだ。

二月二十八日。

クロス姉が知人と塔十八階に登り、エピッククエスト十三をクリアする為の鍵の製作図を手に入れたと報告があった。

この製作図とそこから作り出した鍵は、ローパーの触手などと同じく他者に委譲出来ない為、クエストをクリアする者一人につき一度ずつ十八階まで登る必要がある。今回はクロス姉とその知人がクエストの対象者だったが、二回登って二回とも成功した。手助けをしてくれた人の経験によると、製作図の出現率は五十パーセントといったところなので、今回はかなり強運だったとの事だ。まあ、クロス姉はファイヤーボール2の魔導書も塔十一階で自ら出したくらいなので、そういう運は持っているのだろう。

そのまま鍵を作ってエピッククエスト十三をクリアし、さらに十も最後の報告を除いて終えたので、あとエピッククエストひとつをクリアし、レベルを二つあげれば転職クエストを本格的に進める事が出来る。いよいよといった感じだ。

三月一日。

四人ともレベルに変動は無し。

クロス姉は引き続きラビリンスにこもってレベル上げを続けている。三十九になった時点で、リリースのクエを手がけたいそうだ。このクエストの報酬はメイジがプロテクション2。ドルイドであるわたくしがクリアした場合はヒール4。どちらも転職クエストが始まる前にぜひとも手に入れておきたいスキルである。

「そのためにも、対象モンスターであるリリース三十九に魔法があたる様にレベルを上げないとね」

攻撃職で、しかもスキル主体のメイジとしては、この辺は重要だろう。いずれにせよクロス姉は着々と転職に向けて準備しているようだ。

## 第二十七話・クロス姉、転職準備開始二

三月二日。

リレイヤーが二十五に上がった。ようやく二十五武器と盾を使えるリレはうれしそうである。

「ただ、どうも店売り武器って壊れ易いのよね。今まではわたしが持っている刀工レベル4で自作出来たけど、早く5になって戦闘レベル二十五以上の刀剣を作れるようにならないと。」

今のところ、クロス姉の装飾技能をレベルアップしてオーブを自作出来るようにするのが優先課題で、わたしたちはそれに全面的に協力している。リレの技能向上はそれからになるだろう。

三月三日。

まだクロス姉のレベルは三十八のままだが、知人からリリス討伐のクエスト参加を打診されたそうだ。レベル三十七と三十八によるフルパーティーであり、格上とはいえ五人で戦えば勝つ事は可能である、とクロス姉は結論して参加した。ただ実際にやってみると、クエストの対象であるリリス三十九はそこそ楽に勝てるのだが、同じ場所にいるリリス四十は流石につらいらしい。しかも三十九を倒しても、クエストをクリアするために手に入れなければならない『魅惑の涙』が出るとは限らない…むしろ、出ない方が多いというのだ。

「そんな条件で五十個集めなければならぬのよ。さすがに一晩では無理だし、前衛職の人たちの武器も限界だったから、三十個集めた時点でパーティーを解散したわ。まあレベル上げにもなって、もうすこしで三十九になれるところまで来る事が出来たからいいけどね」

実際、もう少しで上がる事が出来るそうなので、おそらく明日にはレベルアップの報告が出来るだろうと話していた。明日は週に一度の

外出禁止日だが、どうなるだろうか。

三月四日。

クロス姉が三十九に上がったと報告が届いた。転職可能なレベル四十に、遂にあと一步というところまで来た訳である。

「そろそろ四十装備を手に入れる用意も始めないとね。ある程度は準備してるけど、全部揃えたら結構な金額だし、これからはアイテムの購入も少し考えてからでないか」

それと、エピッククエストも十五を進めているそうで、十九階に登ってレリーフが描かれた石碑に行く、という段階にきている。これに先立ち、クロス姉はクエストを受ける前、偵察のために十九階に登ったそうだが、その石碑の手前には巨大な竜がいて、まずこれを倒さなければならぬそうだ。偵察の時は倒す事ができたそうだが、はたして本番はどうだろうか…

## 第二十八話・クロス姉の転職

三月五日。

クロス姉がひさしぶりにデスペナ（デス・ペナルティー。キャラクターの死亡により経験値が減る事）をくらったそうだ。ただし不注意といったものではなく、転職クエストに同行して相手の力を見極めた上での事で、あらかじめデスペナ覚悟で臨んだものらしい。ラビリンズでレベル上げを行っている時に転職クエストのお手伝いを募集するシャウトを聞いたクロス姉は、一度体験しておきたいと思っていたところだったので募集に応じた。戦力はドルメイ四十、ソル三十八、それにメイ三十九のクロス姉の四人。対するはラビリンズB1奥にいるソウルオブラビリンズという転職PD。結果は：ほぼ瞬殺に近い形で惨敗したとの事だ。

たまたま通りかかったカンスト組（今日の時点ではレベル五十三）三人が助っ人として加わって貰える事になったため、クロス姉は後を任せて復活し、元のレベル上げの場所に戻ったそうだが、その途中で討伐が成功したという報告を貰ったらしい。

今回の事で、転職にはどの程度の戦力が必要なのかという事が判明した。少なくとも今回の様にカンスト組が半数以上を占めてでもない限り、一つのフルパーティーでまかなえるものではなさそうである。実際、知人の転職の際のメンバーは七人だったと聞いた。この事を踏まえて、戦力の整備は慎重に行う必要があるだろう。

一方、リレイヤーがようやくエピッククエスト八をクリアし、その過程で運命の樹の入り口にある石碑にたどり着いた。これでわたしに続いてリレも運命の石碑に跳躍出来るようになった為、明日からはわたしと二人で運命での訓練を始める予定である。

三月六日。

予定通り、わたしとリレイヤーが訓練場所を聖域から運命に移行させた。かつてクロス姉やタルカスがレベル上げを行った場所であり、わたしもパーティーで何度か来ていたから、こういったものは把握していたつもりだったが、こうして洞窟の入り口付近で内部の巨大な空洞を眺めてみると、あらためてその不気味さに戦慄を覚える…

ただ、その不気味さとは異なり、この付近のモンスターはレベル二十六や二十七でありながら、二十五ぐらいのプレイヤーでもそれほど難もなく勝てる相手が多い。東岸に較べて来るのが大変だが、一旦来てしまえば帰還の書や跳躍の書で比較的簡単に来る事が出来る。また、東岸のモンスターが強敵ぞろいであるのに対して、このモンスターは二十五クラスのプレイヤーのレベル上げには最適である。実際にリレとペアを組んで二十六と二十七の蜘蛛、そして二十七のスピリットと相対してみたが、よほどの失態か事故などが無い限り十分戦える事が分かった。しかも二十五のペアで二十七を倒した時の経験値の入り方は相当なものであり、予想よりもかなり早くレベルアップが期待できそうである。そういうわけでわたし達はしばらくここにこもってレベル上げに専念する事になるだろう。

三月七日。

運命入り口のモンスターを少しなめていたようだ。リーフスピリットの飛び道具が連続し、しかもそれがクリティカルになった場合、リレの体力ではひとまりもない。また蜘蛛二十七の攻撃力もあなどれないことがわかった。ヒールのタイミングを間違えると、これまたあつという間に危険な状態になる。リレもわたしもその二つの情報を得るかわりに二回デスペナをくらった。まあ仕方がないところだが、同じ失態を繰り返す愚は犯してはならないだろう。

三月八日。

今日になったのとはほぼ同じころ、クロス姉からエピッククエスト



十五をクリアしたと報告が入った。いよいよ転職クエスト開始だそうである。

夜明けごろ、クエストのパーティー参加を打診した知人のひとりがたまたま同じラビリンズにいたので、空中神殿に連れて行ってもらい転職クエストを受領。そのまま塔周辺にいつてアーキルという人物に会い、転職PDを倒すクエストを受領したとの事。今夜、その戦いが始まるそうだ。頑張れ！

三月九日。

ついにやった。クロス姉が転職クエストをクリアし、念願だったソーサラーに転職を果たしたのだ。おめでとう、クロス姉。

報告によれば、経緯はこうである。

まず転職クエストをするにあたって知人やギルドに打診し、クロス姉を含めてソルスカスカドルメイ、しかもメイのクロス姉以外は全員転職組という磐石の布陣を敷く事が出来た。

クエスト開始に先立ち、そのメンバーの一人のサポートを得て仕上げの訓練でレベル四十への到達とリリース討伐クエストをクリアし、その後空中神殿に到達。そこでクエストを受け、同時に神殿にある石碑を復活ポイントに指定した。これは転職クエストの段階で何度も報告にくる必要があるので、帰還の書で飛ぶ事が出来るようになるためである。

このあとリリースクエを報告してプロテクション2の魔法を得る。さらにその後、塔周辺にいるアーキルという人物に会いに行き、転職したい旨をアーキルに伝えると、まず審判の荒野にいるスタッフ・オブ・オーディアルというメイジ用職種別PDを倒せという指示が与えられた。

午後十時、メンバー全員が集まったところで審判の荒野に赴く。全員メイジ用の職種別PDとは初めて対決するという事だが、それでもさすがにクロス姉が頼んだ実力者揃いだけあって難なくスタッフ・オブ・オーディアルを討伐。その時点で討伐を証明するアイテ

ムを得たので、クロス姉だけアーキルに報告に向かい、他のメンバーは次のPDがいるエルブルズの岩穴に向かった。アーキルに報告し、そのまま帰還の書で空中神殿に飛び、岩穴にいるカース・オブ・エルブルズを倒せという指示を得る。神殿から五百銅でナラクに跳躍し、さらに千ギルダでバビリム東に跳躍。そのまま徒歩で岩穴に向かい、入り口付近で待機してくれていたメンバーと合流、討伐にむかった。

しかしここで困った事態が生じた。先客の転職パーティーがいたのである。PDは一度倒すと再出現に時間がかかる。クロス姉はここで決断をする必要に迫られたようだ。出来る事ならせつかく結成したパーティーでクエストをクリアしたかったが、当事者の姉はともかく、忙しい中助っ人として来てくれているメンバーに時間待ちを強いるのは本意では無い。そこで先客のパーティーに、そちらのメンバーに助っ人がいるなら交代してもらえないかと交渉した。幸いにも快諾してくれたので交代してカース・オブ・エルブルズを討伐した。クエストがクリアできるまでは、このパーティーで動く事になる。

ここで元のパーティーのメンバーはサポートをしてくれるため最終決戦の地であるラビリンズに向かい、クロス姉は帰還の書を使って空中神殿に向った。ここで報告を済ませて次の指示を得てから、祝福された跳躍の書を使って次の転職PDがいる運命の樹に向かった。この場所の相手はパワー・オブ・デイスティニーというババであり、実はこのあとに控える最後の相手と同等、あるいはそれ以上に強いとさえ言われているPDだが、幸いにも別のサポートがいてくれて召還モンスターを引き受けてくれるなど、様々な支援を受けて討伐に成功。

クロス姉はまた神殿に飛び、最後の相手であるソウル・オブ・ラビリンズを倒せという指示を得た。神殿とラビリンズは隣同士なのでそのまま移動すると、元のメンバーが待機してくれていた。その人たちも含めて、ざっとみて二十人ほどのプレイヤーが転職PDの

周辺に集っている。その人たちのサポートを得ていよいよ最終決戦である。

ソウル・オブ・ラビリンスはさすがに強かったが、サポート部隊が召還モンスターを引き受けてくれたこともあって討伐に成功。歓声が巻き起こり花火が打ち上げられる中、クロス姉は空中神殿に向かい、最終報告をして転職の許可を得た。この時メイジはソーサラーとエンチャンターという二つの職種を選ぶ事が出来るが、常々公言していた通り、クロス姉は迷わずソーサラーの道を選んだ。なにしろ神殿に赴く前にソーサラーのスキルであるファイヤーボール3の魔導書を用意していたのだから、迷う事など有り得ないだろう。

お世話になった人たちに挨拶を済ませたあと、姉は四十装備に着替えてファイヤーボール3を習得し、当初のメンバーだった二人とウルク街道に行って試し撃ちを敢行した。結果は上々で、牛や鳥、亀などといったレベル四十以上のモンスターとも十分戦える事が判明した。以前から放置していた三番目のハンカチの書き込みクエストもクリアし、さらに新しいクエストも得て、クロス姉は新しい段階に進んだ様である。

## 第二十九話・リレイヤーの意地

三月十日。

クロス姉の転職成功の余韻が残る中、他の三人も負けていられないという気持ちでレベル上げに励んでいる。タルカスは東岸で訓練を続行。わたしとリレイヤーはペアを組んで運命での訓練を行っている。苦手だったリーフスピリットとの戦いも、相手の飛び道具を交えた攻撃パターンを把握し、それに合わせて回復魔法を使う様に工夫してから死ぬ事は無くなり、経験値も順調に獲得している。さしあたってリレイヤーは、エピックククエスト9のクリアに必要な十三階に登る為に、レベル二十六になる事が必要だ。わたしもほぼ同じペースでレベルが推移しているが、まだエピックククエスト七のオルクウナ討伐をクリアしていない。この辺は早急になんとかしたいと思っている。

三月十一日。

クロス姉が、知人のローグの案内で、ウルク街道を初め転職組の為の狩場を案内してもらったという。モンスターは同じレベルであっても、職種によって狩り易いものとそうでないものがあり、その点中々選択が難しい。また、ウルク街道はまだしも、その先はかなり火耐性を持つモンスターが多いため、せつかく覚えたファイヤーボール3が使えない事態が遠からず生じるらしい。ソーサラーになって最初の試練という訳だ。案内してくれた知人は、すくなくとも四十二までは火耐性のないモンスターが多いウルク街道でレベル上げをするべきだとアドバイスをくれたそうで、クロス姉はしばらくウルクが主戦場になりそうである。

三月十二日。

四人ともレベルに変動は無し。

クロス姉の知人のドルイドがドツペルゲンガーと隻眼の竜事件のクエストをクリアしたいというので助っ人として塔に登る予定だったが、どうしても抜けられない用が出来たとの事で途中で断念したそうだ。まあ用自体は本当らしいのだが、実のところパーティーに応募してきたソルジャーの人が、二十回以上登ったと言っている割に攻略方法をまるつきりしらない人で、二人ともいい加減嫌になつたという側面がある。五階のスライムと戦うのに十五装備のままというのでは、タゲ取り役として役にたたない。お陰でスライムのヘイトがすぐ別に移ってしまうので、役割分担も何もあつたものではなかつたそうだ。五階のスライムはソルスカドルの三人で十分攻略可能であり、クロス姉の代りにタルカスが登つてもよかつたかもしれないので、もし次回そういう状況にあつた場合は交代する、というのもひとつの選択肢だろう。

三月十三日。

わたしとリレイヤーがほぼ同時に二十六に上がった。かなり長く停滞していたが、運命での訓練は事他効率的で有難い。

また、途中で戻つたりリレイヤーが、エピッククエストを九まで進めたそうだ。前衛職だけあつて岩穴にある古代の碑にも一人で行けたという。うらやましい限りだが少し無茶だな、という気がしないでもない。と思つたら案の定、同じく二十六の時一人で古代の碑にいったタルカスへの対抗意識らしい。

「あの娘に出来てあたしに出来ない訳ないでしょ。」とリレはいうが、職も防御力も違うんだから較べる事自体がおかしい。まったくこまつたものである。

### 第三十話・タルカス十四階に登る

三月十四日。

東岸で訓練を続けていたタルカスが二十九に上がった。三十装備を着られるまであと一レベル。そうなれば古戦場などでも楽に戦えると張り切っている。ただ、現在のタルカスはフレイムスラッシュを軸に戦法を組み立てている。かつてクロス姉が散々くるしんだように古戦場の後半から登場する火耐性のモンスターたちにどう対抗するか：正念場なのかもしれない。

三月十五日。

タルカスが知人の要請に応じて塔十四階の周回パーティーに参加した。

驚いた事に、これまでわたし達の誰ひとりとして十四階に行った事がなかったのである。いまだ二十六のわたしとリレイヤーは当然として、既に転職したクロス姉まで未経験というのは不思議だが、事情をきいてみるとなんとなく理解できた。十三階はエピッククエスト九があるためそれで登ったが、エピッククエスト十三のため十階に登るときは、侵攻十五を使って十五階から始めたという。したがって特にクエストとは関係が無い十四階はパスしていたというのだ。当然ながらタルカスは、エニグマの関係上重要な役割を任されるソル職でありながら、わたし達からの情報無しで登らなければならぬ。

ここで確認しておく、十四階のエニグマはフロアに分散している赤いスライムを特定のエリアにおびきよせる、というものだ。四匹おびき寄せられれば一つ目の箱、フロアにいる八匹全部おびきよせられれば二つ目の箱が出現する。レアのアイテムは大概二つ目にはいつているので、今回も当然ながら八匹を狙う訳である。

しかしながら、スライムは当然パーティーのメンバーを攻撃する。

それも八匹をおびき寄せる段階で複数のスライムからつつかれる事になるが、その攻撃をまともに受けてなんとか耐えられるのはソルジャーだけと言っていいだろう。したがって十四階に登る時ソルは二人というのが好ましい。ところが今回、編成はソルスカスカドルメイ。ソルは十四階初体験のタルカスだけという状況である。

それでも登った経験のある他のメンバーから色々と聞いたうえで最初の周回を開始した。やり方は色々あるそうだが、今回教わった方法は、まずメンバー各員が分散してスライムの存在を確認する。ギャンブルナイトがいればそれを倒してスライムが沸くのを待つ必要があるからだ。次にキャンドルを使って中央を左右に周回するドリドゴーストを倒し、しかるのちにスライムをおびき寄せる段階に進む。通常はスライムが三匹いる場所をソルが担当する訳で、タルカスも右側の三匹をおびき寄せる役になった。ただ左側の三匹はスカウトが担当したため耐える事が出来ず、結局一回目は失敗に至った。立て直して二回目を行い、なんとかギリギリで持ちこたえたが、はつきり言ってかなり危なかったらしい。

二週目に登る段階で要領が理解できたタルカスは、右と上合わせて五匹をおびきよせると提案した。まずドルにボディー・アクティベーションをかけてもらって右の三匹をつり、上の方向に進んだ時点で二人のスカが共同で左の三匹をおびき寄せる。この方法は思いの他うまくいき、後の二周とも一回でクリアできたそうだ。

「ただ、これはソルが一人だけで、しかも回復がうまくいった場合の話だから、あまり一般的ではないでしょうね」というタルカスの自己分析は、多分にけんさんも入っていると思う。いずれにせよ今回はレアは出なかったそうだが、十四階をクリアするのはソルにとつてかなり楽しいらしい。機会があればまた是非登りたいそうだ。

### 第三十一話・クロス姉、フレの転職を手伝う

三月十六日。

四人ともレベルに変動は無し。

十二日に中断したクロス姉の知人の塔クエストが完了した。

三月十七日。

クロス姉の装備で武器を除いて唯一三十装備のままだった盾が四十装備になった。実はブルーマースシールドという青色の盾を狙っていたそうだが、当分は手に入りそうもないという事で、やむなく店舗で買えるターゲットシールドを購入したそうだ。欲しい装備はなかなか上手く手に入らないものである。そういう意味では、過日クロス姉が助っ人を引き受けた知人のソルのエピッククエスト十五はとてつもなく幸運だったのだろう。ガーディアンを目指してクエストを完遂し、そのついでにクリアした十九階のエニグマでガーディアン垂涎の黒盾を出してダイスで手に入れたのだから。まあそういう人もいるという事だ。

三月十八日。

ギルドに入る予定の無かったタルカスが、知人の要請でギルドに加入した。まだ発足したてで人数も十名足らずという小規模なギルドだが、メンバーのレベルもほぼ拮抗していてやりやすい様子ではあるので加入したそうである。

三月十九日。

四人ともレベルに変動は無し。訓練に終始した日だった。

三月二十日。

私が所属するギルドのメンバーがエピッククエスト十三から十五



までをクリアしたいという事で、私達姉妹の中では唯一塔十八階と十九階に登れるクロス姉が助っ人として参加した。ところが集まったメンバーはスカスカドルメイ。特に十九階はソルがいなければ不可能とは言わないまでも極めて困難である。これは無理かな、と半ば諦めていたところに、ようやくフレ繋がりでソルが見つかった。時間制限つきながら参加してもらえるとということで一安心である…とりあえず…

手順としては、まず侵攻を使って十五階に飛び、そこから十八階まで登って、エピッククエスト十三に組み入れられている鍵の製作図を得る。その後、クエストの人が一旦塔から出てクエストを進行させ、また戻ってきて、そこから十九階に登ってエピック十五のための石碑に行くというものだ。十三から十五に進める段階で、助っ人である我々は塔に残る事になる。当然ながら時間が経つとウィスプが沸いてしまうが、実は扉の奥にいればウィスプに攻撃される事は無い。それでこういう作戦が使える訳である。

十八階まで順調に進み、運良く一度で製作図が出たので、クエストの人は塔を出てエピック十三から十五に進めていった。鍵の製作に失敗して素材が無くなったという様な幾つかのトラブルはあったものの、二時間ほどで戻ってくる事ができたそうで、いよいよ十九階に登って竜と対決する段になった。

ところが、さあいよいよ階上しますよ、という呼びかけに、ソルの方が反応しないのである。そのまま十九階にいても動く気配がなかった。その状況からして明らかに…

「寝オチ？」という他メンバーの疑問に、そのソルジャーを助っ人に頼んだスカの人がこう答えた。

「多分ね。今日はずっとゲームやってて疲れてるから、時間制限付きで参加してもらったけど、ちょっと長びいたから…」

「なるほど…しかしどうしましょうか？ ソル無しで竜と戦うのは危険過ぎますし…」

「自分がソルの代役をやります。どっちにしても強化武器でタゲは

とってしまつたろうから…ドルさんは全力でわたしを回復して下さい」

こうして、スカスカドルメイという布陣で竜のいる場所まで移動した。途中でのモンスターとの交戦はかなりきつく、復活アイテムであるエリクサーも使用せざるをえなかったが、それでもなんとかたどり着いた。決死の覚悟で望んだ竜との戦いは…結論を言えば成功した。ただし十五分以上かかったのでエニグマを解くまではいかなかったが、中の人の性能次第で十九階はソル無しでもクリア可能という事が実証出来たのは収穫だったと思う。

こうして、ギルメンのエピクエ十五は最大の難関を突破した。翌土曜日の午後三時から転職クエストを開始するという事で、その時のメンバーにも志願して分かれたそうである。なお、塔に登る途中でやったエニグマの宝箱から高級系の製作図というレアが出たそうだが、ソルの人が寝てしまつてダイスが出来なかったため、話し合いの末、メンバーのひとりが露店で売却して売り上げを分配するという結論になった。翌日の話になるが、結局二百銀で売れたそうである一人あたり四十銀の分配金がもらえた。クロス姉のフェザー2購入の資金の一部として使えるので非常に有難い。

ところで、このメンバーであるローグさんのフレのフレがやはりドルで転職クエストをやりたいがっているので、同行する事になったという。実はこのことが後で問題になってくる。

三月二十一日。

昨日、エピクエをクリアしたギルドのメンバーが転職クエストを実行する日である。

当初は午後三時からスタートの筈だったが、そのギルメンが朝口グインした時に、その人のフレが転職クエストを始めるので手伝いをたのまれたらしい。当初は自分の予行演習のつもりだったそうだが、話の成り行きで、ついでにそのギルメンの転職も開始してしまったという…まあ、よくある話だとは思いますが、いずれにせよクロス

姉がロゲインした時は、既に岩穴の転職PDを倒して、これから運命の樹にいる三番目の転職PDを倒しに行こうとしているところだという。

ただ、さすがにフレどろしのパーティーであり、転職組の助っ人が少ないので、クロス姉が外部からサポートで参加する事になった。特に運命とラビリンスのPDは召還モンスターが沸くため外部からの援護射撃は有効であり、クロス姉はこれを担当する事となった。さらに途中から昨夜ソル役を引き受けた凄腕のスカウトの人も加わり、メンバー5人プラスサポート2人という編成となった。流石にこの編成なのでほぼ問題なく倒す事が出来、ギルメンの転職クエストは見事に成功した。さらにラビリンスに来たついでに、クロス姉とメンバーのひとりが受けていたインテリPDを倒すクエストまでクリア出来た。

そこまでは良かったのだが、問題は午後三時からの約束である。ついでに同行するはずの人が結局メインという事になり、誘ったログの人は助っ人を引き受けるそう。二連戦はさすがにきついが責任上投げ出すわけにもいかないという。もともとギルメンの助っ人をやると言い出したクロス姉も、同じ理由で参加を決めた。

「ただ、わたしの場合は単に責任というだけで参加するわけじゃないの。午前中の転職クエストが途中参加だったから、ドルさんの職種別転職PDとは戦った経験が得られなかったのよ。だからそれもやる必要があったし、いずれはソルさんやスカさんの転職クエストにも参加したいわね。」というクロス姉の言葉が果たして本気なのかどうかはわからないが…

午後三時、集合場所である古戦場の石碑に集まったのは、転職クエスト該当のドルさん、ベルセルクとガーディアンソル職二人、ログ一人、そしてソーサラーのクロス姉という理想的な布陣だそうである。しっかりとドルの転職クエストに最後まで参加した事で、わたしの転職の時の情報が格段にしっかりしたものとなった。

三月二十二日。

昨日に続いて今日は色々な出来事があった。

まず三人がレベルアップした。朝早くにリレイヤーが、少し遅れてわたしが二十七に上がり、夕方にはクロス姉が四十一に上がった。わたしとリレは、これで東岸に訓練場所を移す事が出来た。タルカスとの連携もやりやすくなったので、しばらくはこの東岸で三人の訓練が続くだろう。

そのタルカスだが、ギルドのメンバーと朝早く登った塔十四階の宝箱からクイツクが出て、ダイスで手に入れたそうだ。クイツクはスカウトのスキルだが、リレイヤーはすでに持っているので、これを露店で約百五十銀で売り、今まで貯めていた貯金とあわせて、クロス姉の念願だったフェザームーブ2を約二百銀で手に入れた。丁度街に戻ってきたクロス姉が早速取得したが、確かに速くなる。フェザー1しか持っていないプレイヤーとの差がどの程度かというところ、クロス姉によればフェザー1有り無しとの差に相当するという。それならモンスターから逃げるのも楽だろう。

## 第三十二話・負の話

三月二十三日。

今日は少し深刻な出来事があった。二月十七日に登場し、三月十八日にはタルカスをギルドに誘ったPCの一人が、私的な事情のため、これからまた一ヶ月ほどログイン出来なくなるというのである。それだけなら後日の再会を楽しみにしていればよい事なのだが、その人によれば、一ヶ月空くともうレベルに差が付いてしまうため、同じ道は歩めないから、次回戻ってきた時は新しいキャラクターを作ってまたやり直す。その際、仲間も全く新しい人を探す。今現在のキャラクターはもう使用しない。当然ながらギルドにも戻らない…

ギルドの創設者でその人をリーダーに推薦した程懇意にしていた人は、当然ながら必死に慰留に努めた。だが、結局のところ決意を覆す事は出来なかった。もしその人がいなくなるならギルドも解散したいという申し出には、絶対に解散はしないで欲しいと強く返答されたそうである。こうしてその「キャラクター」は「この世界」から去っていった…

ここまでの事情を、創設者の人がタルカスを含むメンバーに説明し、かなり意気消沈した様子でログアウトした後、残されたタルカスたちはメンバーだけで色々と話し合ったそうだ。まず、知人の決意は悲しくつらいものだが、それがその人の出した結論なら尊重しよう…という意見が大勢をしめた。また、今後そのギルドがどうなるかは分からないが、今は創設者の人も混乱している様子であり、しばらくはクールダウンの時間が必要だろうという結論になったそうだ。

それにしても、わたしもその去っていった人の「人となり」を知っているが、経緯を聞いて如何にもその人らしいと感じた。とりわけ、「新しい旅の仲間を新しく探す」というその人がいったセリフは印象深い。おそらくこれほどこの世界を楽しんでいる人もいない

のだろう。だったらそれはそれでよいのではないだろうか？

その人が新しいキャラクターで、新しい仲間とともに、ギルドのメンバーやわたしたち姉妹が直接関わることのない新しい冒険譚を始め、おおいに楽しむ事を祈っている。

三月二十四日。

今日は厄日というべきなのかもしれない。出会う相手が揃って「痛い」プレイヤーばかりなのである。

まず最初からとんでもない相手と遭遇した。何かの出来事や行き違いといった次元ではなく、本質的に合わない者はやはり存在する。どう話し合いをしようが節度を持って対応しようが、存在そのものが気に触る人格とは相容れない。そしてそれが別のPCとして登場しようが、誰かはすぐに分かってしまう。わたしたちにとっては、その典型例が一月十六日に登場したソルジャーの中の人物である。二度と会うまいと気をつけていたのだが、本日別のキャラで登場し、タルカスといささか不運な経緯で関わり、そこでトラブルが発生した。すると見事なほど「あの性格」が表出したのである。他人をまず誹謗し自分の責任には一切触れず、その相手のギルドのマスターとはフレだと、まるで後でいつつけてやると言わんばかりの挑発的発言まで繰り返し出し、その場の空気を凍りつかせて去っていったという。

名前がそもそも似ていて、しかも使用している文字が同じだからもしやと思っただけだ。もちろん相手は名乗ったわけではないから確証は無いが、わたしも人を見る目はあるつもりだから、話を聞いてそれが例のソルジャー職の別キャラだという事はすぐにわかった。いくら素性を隠そうが性格というものは出てしまうという見本のよきな話である。

嫌な話を聞いていささかうんざりしたので、以前から止っていたクエストをクリアしようとして塔に向かったのだが、野良パーティーが鬼門である事を改めて思い知るだけの結果となった。まあクエスト

自体は成功したが、組んだドルイドがこれまた問題である。なにしろわたし達が今まで使っていた攻略方法とはまるで違う方法を展開し、しかもそれが当然であると言わんばかりの口調である。確かに相当の知識は持っているが、そのひけらかし方がいちいちカンに触るのだ。こうして二度と組みたくないプレイヤーのリストに、また新たな名前が加わる事となった。自分がナーヴァスすぎるのだろうか。だがやはり嫌なものは嫌である。

### 第三十三回・フラジャイルのおしゃれ装備

三月二十五日。

四人ともレベルに変動無し。引き続きレベル上げ訓練が続けている。

三月二十六日。

わたしとリレイヤーが、ダチュラ二十八の肝を二十五個手に入れるクエストを達成した。報酬は任意のオーブの原石二種類各十個。二人だから同じものを選べば各二十個となってオーブ生成に必要な数がそろう。わたしたちは風と炎のオーブの原石を手に入れ、装飾四の技能を持つクロス姉にわたしで生成を依頼した。結果は両方も成功。炎の方は東岸で使うのが最も良いので早速リレの武器に装着するが、風は火耐性のモンスターが多い場所、例えば聖域やナラク近郊で使う武器に装着する方が有利なので、しばらくは留め置きしておく事にする。

それにしても、風のオーブは人気がある。効果がわかりやすいという事もあるだろうが、強化無しで武器が光るというのが良いのかもしれない。バビラム西の露店でも他の同級オーブと較べて価格設定が割高だ。そういう意味では、その原石を出すダチュラ二十七はもっと奪い合いになるものかと思うのだが、不思議にも東岸でそういう感じはしない。装飾の技能を修得する者が少ないのだろうか。

三月二十七日。

クロス姉が知人の依頼でエピック十五から始まる転職クエストを手伝った。ところが時間の関係で最後までは同行出来ず、無念の思いで途中離脱したそうだ。あらかじめ「何時までしか出来ません」と了解をとっているとはいえ、クロス姉はかなり悔しかったらしい。



ただひとつありがたかったのは、その転職するプレイヤーがスカウトだったという事。職別PDが迷いの森にいるダガーオブオーダーだったのは、わたしたちには初めての体験である…もっとも助っ人の一人にカンスト（この時点ではレベル五十三）のローグさんがいて、ほとんどあつという間に倒してしまっただけで、それほど参考にはならなかったようだが…（笑）

三月二十八日。

突然、タルカスが訓練先からわたしのところにやって来た。

「はい、これ上げる」

だしぬけに荷物を差し出され、わたしは一瞬何の事か分からなかった。

「何これ？」

「クーパの秘書セットストライプ柄。インテリメガネ付きよ。」

あけてみると、その通りのものが入っていた。

「ある人から安く売ってもらったの。」

「買ったの？ これおしゃれアイテムじゃない。あんた…」

「まあまあ。フラ姉がそういうのにお金使うの嫌がるの分かってるけど、いつも世話になってるしさ。たまにはいいじゃない。」

「……」

「いえね、前々からフラ姉ってメガネが似合うだろうなって思ってたんだ。で、最近ちょうどそれに合いそうな服が出たんで、思い切つてそろえたわけ。あ、クロス姉もリレも異義なしっていったから心配しないで。」

「…でも貴女、もうすぐ三十でしょ。三十装備まだ揃ってないんじゃないかったの？ こんなものにお金使うのなら自分の盾や鎧を…」  
「なんとかするって。それより早くつけてみせて。みんな居間でまってるから。じゃあ、後でね」

二の句が継げない思いのわたしを置いて、タルカスは笑って手を振りながらわたしの部屋を出て行った。まったく、みんな何を考え

てるんだらう。今は少しでも役に立つアイテムを買うべきなのに。  
大体メガネや秘書の衣装がわたしに似合うつて、そりゃ日記なんか  
書いてるくらいだからデスクワークは得意だけど、そんな風に見ら  
れてるのはちょっと心外だわね。わたしも戦士のひとりなのに。

……大体、このメガネ、合わないじゃない。なんか視界がぼやけ  
るのよね……

### 第三十四話・ヒールでのアイテムの耐久値の検証

三月二十九日。

ウルク街道で訓練を続けているクロス姉から、気になる報告が入った。

「実は訓練の時、レベル十八のドルイドにヒールを頼んでいるんだけど、どうも変なのよ。」

「変というと？」

「ヒールをする場合、ドルイドは手に武器か或いはアイテムを持つでしょ？」

「ええ、そうよ。何も持たないとヒールの量が半分になってしまうからね。だからレベル上げの訓練では、壊れても修理が安価なもの…例えばカッパーマトックなんかを持つ事が多いの。」

「そのカッパーマトックだけど、普通は何回ヒールしたら壊れる？」「何回って…さあ、数えた事なかったわね。おそらく何百回と使えるところと思うけど。」

「ところが、わたしをヒールしてくれるドル十八のマトックは、大体モンスター四、五匹で壊れるの。ヒールの回数にしておそらく何十回程度だと思つたのよ。」

「そんなに早く？それはちょっと考えられないわね。」

「だから変だと思つたのよ。もしかしたら、ウルク街道でのヒールに問題があるとか、あるいは転職したキャラクターに転職前のキャラクターがヒールしたら壊れ易いとか？」

「…さあ、何ともいえないけど…」

クロス姉とわたしは協議の上、これは検証する必要があるという結論にたっし、わたしと合同で訓練を続けているスカ二十七のリレイヤー、クロス姉のアシストをしているドル十八、そしてクロス姉の知人であるハイプリースト四十一の協力を得て、以下の実験を開始した。

課題…

レベルの異なるドルイドがレベルの異なる相手にヒールを三十回か  
けたら持っているカツパーマトックはどうなるか？

条件…

ヒールする方〓ドル十八・ドル二十七・プリ四十一

ヒールを受ける方〓ドル十八・スカ二十七・サラ四十一

ヒールは1を使用。ランク5に強化済み

ヒールの場所は三か所〓

バビリム城門・ユーフレイト東岸・ウルク街道

手にするアイテムはカツパーマトック

結果…

十八 二十七

〓ヒール三十回で耐久値が二十五〓八十九低下

十八 四十一

〓ヒール二十〓二十九回で壊れた

二十七 十八

〓ヒール三十回で耐久値が五〓十一低下

二十七 二十七

〓ヒール三十回で耐久値が九〓十二低下

二十七 四十一

〓ヒール二十四〓三十回で壊れた

四十一 四十一

〓ヒール三十回で耐久値が七低下

プリ四十一の結果はウルク街道で一度だけ協力してもらったもの。

…この実験結果を見る限り、かなり明確な回答が出たようだ。場所やヒールを受ける相手の違いよりも、ヒールをかける側と受ける側のレベル差が、持っているアイテムの耐久値の下がり方を大きく左右するという事である。ちなみに、協力してくれたプリ四十一の証言によると、レベル五十三の仲間のヒールを担当したら、やはりマトック五本があつという間に壊れたという。この事からも、やはり回復役やアイテムのレベルではなく、レベル差が作用していると考えられる。

それにしても、あまり良い設定とは思えない。ただでさえレベルの違うプレイヤーとは組みにくいのに、これでは知人のお手伝いもしにくいのではないだろうか？

三月三十日。

ウルク街道もそうだが、東岸では相変わらずドルイドが人手不足である。特に深夜から夜明けのパーティーメンバー募集シャウトでは、かなりの割合でドルイドを希望する項目が入る。実際、タルカスやリレイヤーとのペア訓練の時でも、知人から合流要請が多い。また、たまに見知らぬ前衛さんがいきなりやってきて仲間に入れてくれと話しかけてきたりする。時間がゆるす限りは対応しているが、やはりこの状況はなんとかしなければならぬのではないだろうか？

とにかく、プレイヤー間の時差付き連絡がとりにくいのは困りものである。この世界の中に伝言板を作つてほしい、というのは以前から知人たちとの会話で頻繁に出てくる項目である。世界の外に掲示板を作るとするのはギルド単位でもやっているのを見かけるが、そういう掲示板は概して目を通す人は少ない。一プレイヤーにつき一行あるいはシャウトで有効な文字数、有効時間八時間ないし十二時間ぐらいで構わないので、とにかくログインに時差のあるプレイヤーが連絡を取りやすい手段を何とか考えてもらいたいものだ。

…われながら、どうも最近、運営に対する不満が多いと感じる。

こんな事だからタルカスに秘書の服やメガネを贈られてしまうのか  
もしれない…まあ、今のところ気に入って着ているのだが…

### 第三十五話・レベルアップ報告その他

三月三十一日。

わたしが明け方に、そしてリレイヤーが午後には二十八にあがった。これで二人とも塔の十四階に登る事が出来る。十四階はかなりレアなアイテムが出るそうなので今から楽しみである。

その分エニグマの解読はきついよ、とタルカスから聞かされているが、それを聞いたリレがかなり闘志を燃やしている。やる気になるのは結構だが、あまり頭に血が上るような事にはならないでほしいものだ。

四月一日。

朝、クロス姉が四十二に上がった。これで塔の二十一階、つまりエニグマでフェザームーブ2が出る階まで登る事が出来る、と張り切っている。なかなか出ないそうだが、クロス姉はファイヤーボール2もアサ魔も自力で出したという強運の持ち主なので、もしかしたら出せるかもしれない…。まあ、あまりそんな噂が立つと逆にプレッシャーになるし、出なかつたらパーティーのメンバーにも申し訳ないから、最近クロス姉はその話はしないようにしているらしいが…

四月二日。

クロス姉が、知人のハイプリスト四十四に頼んで仲間を集めてもらい、初めて二十階と二十一階に登ったと報告してきた。ひとことと言って「大変だった」そうである。十五階や十九階も難しかったそうだが、二十階以上の困難さはその比ではないという。

「特に大変なのは二十階にいる転職PDの強化版みたいなモンスターね。本体も強いけど、召還するゴーストがハンパ無く強いだよ。」  
「ゴーストが召還されるの？」

「そう。当然ながらキャンドルがなければ反撃できない。しかもも

たもたしているとキャンデルの効果が消されてしまうから、何本も持っていく必要があるの。」

「そりゃ厄介ね。」

「ただ、魔法攻撃にはあきれる程弱いから、ソーサラーは基本的に召還退治を優先する様になるわね。大変は大変だけど、コツさえつかめばいけると思う。十階のブラックキャプテンだって、最初はどつ戦ってよいのかわからなかったけど、今では倒して当たり前になったし。」

「まあ、確かにそうね。特にタルカスは、ホロウを自分で釣る戦法を使うようになってから得意分野にしてるもの。十四階のエニグマもソルが活躍しやすいから、十、十四階の周回パーティーと聞くと目を輝かせてるし、あげくに自分で侵攻十階を作れるようにしちゃった位だもの。」

「ただ、そうは言っても大変なのは同じ。二十一階で出るフェザームーブ2が露店で高額取引されてるのも、まあ仕方無いのかな、と今回思うようになったわね。」

苦笑した面持ちで呟くクロス姉の顔をみたわたしは、これは確かに大変なことなのだと改めておもった。わたしや他の姉妹たちも、いずれは出会う状況である。心しておくべきだろう。

四月三日。

タルカスが三十に上がり、いよいよ三十装備をつけられるようになった。

ソルの三十装備は大きな肩パッドや腰周りの厚い装甲などが目立つもので、かなりいかつい印象を受ける。一方、武器は基本戦闘用として攻撃力が高いスクラマサクス、また訓練用として耐久値が高い生産型ヘビーアックス、予備としてソードオブファントムを選んだという事だ。結局全て片手武器という訳だが、今後登場する火耐性のモンスターにどう対応するか、まだ解決していない。

「正面から正攻法で戦うしかないわね。プロボを強化すればタゲと



りもいけるでしょうし」

とタルカスは言うが、はたしてどうなるだろうか。

四月四日。

一昨日に続いて、クロス姉が二十階と二十一階に登った。今回のパーティーリーダーはどちらの階もかなり熟知していて、攻略方法なども色々と教わったという。効果的だが手順が難しいもので、特にドルイドにかなり複雑かつ重要な役が割り振られるものもある。また覚えなければならぬ事が増えたようだ。

四月五日。

クロス姉がレベル上げでゴーストが沸く場所に行くようになった。ゴースト四十一や四十二はそのレベルに比してかなり楽に戦える相手だそうだが、それだけに相変わらず人気が高いという。獲物の取り合いはしょっちゅうだそうで、険悪な雰囲気になるのも珍しくないらしい。

「ラジャフ街道やバビリム平原みたいに、ウルク街道も多層化して貰えないかしらね。まあそれでもおっつかないかもしれないけど。」

というクロス姉の発言からも、問題が深刻化していると感じられる。わたしたちもいずれそこで狩りをする機会があるだろうが、その時もやはり同じ問題に直面するのだろうか。

それにしても最近、先々の不安ばかり気になる。「この世界を司る力」が交代した事が、その不安を助長しているのかもしれない。まあ、それは考えても仕方ない事なのだが。

四月六日。

クロス姉が久しぶりに知人の転職クエストを手伝ったそうだ。その知人のスカウトが岩穴の転職PDを倒すメンバーを探しているというシャウトを聞いて事情を尋ね、クロス姉自身の参加に加えてメンバー探しも協力してパーティーを結成、岩穴でのクエを成功させ

た。

だが、メンバーのひとりが時間切れで欠員が生じた為、クロス姉のギルドで誰かいないかと尋ねたところ、ギルドマスターのソルジャーキヤラクターが丁度同じところから転職クエストを行いたいと打診してきたそう。こうして再びメンバーもそろい、運命の樹とラビリンスでのPD退治もクリア。一石二鳥となった転職クエストは大成功だったという。

四月七日。

昨日のクロス姉に続いて、こんどはタルカスがギルドメンバーの転職クエストを依頼された。もちろんタルカスはまだレベル三十なので転職クエストに直接は関われない。しかも、結果的に手伝ったのはわたしである。

事情はこうだ。タルカスが所属するギルドのメンバーであるソルジャーがレベル四十になり、なんとか転職したいとギルドのメンバーに相談した。だがその人は実は外国からアクセスしている人で、転職クエストどころかエピッククエストもまだ9の途中までしか消化していない段階だったのだ。特に塔に登るのが苦手であり、エピック9のクリア過程である十三階は勿論、十階でブラックキャプテンと戦った経験も無いという。

という訳でギルドのメンバーが協力して、まず十三階にのぼってエピッククエストを進める事になった。ただ、タルカスの所属するギルドには、現在、十三階まで登れるドルイドがいない。クエをクリアするソルジャーに加えて、スカウトとメイジはメンバーにいないので、タルカスからわたしに、協力してほしいと打診があったわけだ。こうしてタルカスに代ってわたしが参加した。運命のババ三十五PDと古戦場の蠍姫は流石に待たされたが、それでもその日の内にエピック十二までクリア。あとは十八階に登る必要があるエピック十三になるので、レベルの高いメンバーをそろえるしかないだろう。

### 第三十六話・運営に関する話

四月八日。

もはや毎週恒例となつてしまつた『水曜日の混乱』が、夜遅くになつて発生した。東岸にいたタルカスが丁度遭遇したが、いきなり「座れない」「ログアウト出来ない」といったシャウトが飛び交い始めたそうである。タルカスもためしてみたが、どうやら個人差、あるいは時間差があるらしく、シャウトで言っている状態になつたものもあればなつていないものもあり、しかも何分か経つと解消されたりする不具合もあつたらしい。

混乱が幾分か収束の兆しを見せ始めた午後十一時少し前になつて、運営から臨時メンテナンスを行うと通達があり、タルカスは仕方なくログアウトした。臨時メンテナンスは結局一時間ほどで終わつたそうだが、この混乱で、約束していたタルカスの知人の転職クエストの手伝いが出来ずじまいになり、タルカスはむろん、後を引き受ける約束をしていたクロス姉も慥然としていた。

…まつたく、こんな事がいつまでも続くようなら、この世界から誰もいなくなつてしまふと思ふのだが…

四月九日。

タルカスがシールド2を手に入れた。未強化の段階では、シールド1を使った時に較べて防御力が二十高くなる。かなり使えそうだと喜んでいた。

それと昨日の混乱に関して、運営から補障として経験値チートポーションが次のメンテナンス時に贈呈されると告知があつた。使つた事はないのだが、どんなものだろうか…それと贈呈されるのは、それまでガインポイント（課金アイテムを手に入れる為のポイント）アカウントを購入した人だけだそうで、これも後で問題になりそうだ。

四月十日。

わたしが二十九に上がった。リレイヤーに較べてわたしの方がやや先行する形になっているが、これは東岸のドルイド不足で、リレとのペア以外の参加も頼まれるからだ。

夜になって、塔周辺でこの世界の誕生一周年を祝う花火大会が催されたので、わたしとタルカスが参加した。予想はしていたが、ひとつの場所に多大な人数が集結したため、動くだけでも大変である。しかも、いざ時間になって花火に引火しても、打ちあがるのは約2分後という状態である。あげくの果てにフレンドリストとギルドリストが飛んでしまい、殆ど水曜日の異常状態に近い。不平と不満のシャウトが飛び交う中、それでもなんとかイベントは終了した。

混乱の極みのような塔周辺だったが、嬉しい事もあった。開催時刻まで少しあったのでタルカスが退屈しのぎに塔周回パーティーに参加したところ、十一階でファイヤーボール2の魔道書がでて、ダイスで手に入れたそうだ。かつて自力でフレイムスラッシュを手に入れて以来、タルカスは十一階にツキがあるらしい。

### 第三十七話・戦闘レベルと地域を選択

四月十一日。

クロス姉が四十三に上がった。四十になつて転職したのが三月九日だったから、一ヶ月強で三レベル上げた事になる。この世界の上限の上昇（キャップ解放）は現在のところ約2ヶ月で三だから、このペースを保てばコストは可能となる、とクロス姉は考えている様だ。

ところでソーサラーにとって四十三に上がるというのはかなり重要な事らしい。というのは、ラルサ大地溝帯のモンスターが、入り口の四十二を除いて四十三から四十四がほとんどだからだ。

「パーティーに参加する度に、そういうモンスターに魔法が当りにくいのが申し訳無くて。だからしばらくはソロに専念して経験値を上げてただけで、これからはなるべくパーティーにも参加したいわね。」

それにしても、このレベルで命中率が大幅に左右されるというのは本当に困った設定だ。ダメージが変化するならまだ納得も出来るのだが…

四月十二日。

今日はひさしぶりにわたしが塔にのぼった。知人がエピック9をクリアするため十三階に登りたいというので手伝いで参加し、ついでに五十一階の周回を二回行ったのだが、信じられないくらいレアが手に入ったパーティーだった。まず五階ではアサ魔とヒートボデイス、八階では服飾、九階では学術と鑄造の技能書、十階ではシヤドウシーカーの現物と製作図、十一階に至ってはフレームスラッシュが出た。他にもキャンドルやシルバーマトックといった便利なアイテムが出て、最後のダイスは大盛況だった。

そんな中、特にわたしの運が良かったらしく、ダイスで一位を獲

得、フレイムスラッシュの書とシャドウシーカーの製作図、キャン  
ドル十五本という分け前が入った。毎回こんな状態なら本当に  
嬉しいのだが、なお、過日の花火大会で告知された『ギャンブルナ  
イトの手下』は、四人とも未だに出会えていない。

### 第三十八話・誤解？それとも別のもの？

四月十三日。

四人ともレベルに変動無し。訓練は続けている。

四月十四日。

今日は個人的な理由でほとんどレベル上げの訓練が出来なかった。ただ、リレイヤーがそろそろ上がりそうなので、他の三人も協力してリレの経験値稼ぎを優先させる様にしている。

四月十五日。

朝早く、リレイヤーが二十九に上がった。わたしもリレも、そろそろ三十装備の用意をしなければならないだろう。

逆に言うと、二十九まであげながら鎧は基本的に二十装備のままなので今は苦しい時期だ。特に前衛であるリレはなおさらだろう。タルカスの時も二十九ぐらいの時は苦労していたが、ソルジャー職より防御力の劣るスカウト職のリレはかなり大変そうだ。

もつとも、これは今回に限った事ではない。まず近い将来、二人とも三十装備で転職クエストに挑まなければならない（四十装備は転職しなければ着る事が出来ない）のだ。後衛のクロス姉でさえ装備の脆弱さには悩まされていたのだから、これが相手と直接あたるタルカスやリレイヤーはどうなるのだろうか。

四月十六日。

これは知人のソルジャーの身に起こった出来事である。

そのソルはレベル十八で、ラジク工等の用を済ませる為に塔周辺からバビリムまで徒歩で向かっていたのだが、城門に入っすぐ、十一モンスターと戦っているレベル二十五のメイジを見かけたとい

う。二十五なのに十一を相手にしているというのがひっかかったが、通過の途中で絡まれたか、或いは素材集めかもしれないと思い、知人のソルはその場を立ち去ろうとした。だが丁度戦い終わったそのメイジは、そのソルにピツタリとつく様に併走し始めた。なんとなく薄気味の悪さを感じたソルだったが、丁度橋を越えたところにいる農夫にクエの報告があつたので、ちょうどいいからここで時間差をつけてやりすごそうと考えた。

だが、用を終えて道に戻ろうとしたとき、そのメイジが道ばたで止っている事に気が付いた。もはや薄気味悪さを通り越して恐怖さえ感じた知人は、しかし別に実害を受けた訳でもないと思いなおし、再びバビリムに向かって進み始めた。そしてアーチをくぐって牛牧場に差し掛かったとき、そのメイジからささやきが来た。

「フェザー持って無いなら九百銅で売ってあげますよ」

知人は一瞬虚を突かれた様な気分になりながらも、既に装備していたので「もってます」と返答した。その返答はこうだった。

「そうですか。足が遅いようなので持ってないのかと思いました。」

この話は色々な事が考えられる。相手が如何なる意を以って接してきたのかも判然としていないし、立場によって解釈も変わってくるだろう。

だが、わたし自身が気になったのは、善意にせよ悪意にせよ一面識も無い相手にいきなりささを入れて何かを売りつけようという無神経さである。相手の事情もプレイ環境も把握せず、結果として相手の速度を嘲笑するかのような態度もどうかと思う。こういう態度で相手に接すると、仮に善意であってもそうは受け取られない。実際そのソルは「観光地の土産店をうるちよろする押し売りみたいなもの」と解釈したそうだが、確かにフェザーが九百銅というのは、わたしに言わせてもおおのぼりさん相手のポツタクリ価格ではない。2ならともかく1は原則として自力で出すか、買うにしてもせいぜい二百から三百銅だろう、というのが私の見解である。



### 第三十九話・世界が凍りついた日

四月十七日。

夕刻に世界が凍りついた。

丁度クロス姉がウルク街道でワンダリングシャドウと戦闘状態にあったのだが、突如として移動が出来なくなった。自分だけでなく相手も、そして周囲にいるモンスターも、それぞれの場所で釘付けになったように動かなくなったという。視点の移動は可能で、チャットに入力も出来るが、それはどうやら他のプレイヤーには届いていないらしく、返信は一切無かった。さらに四月八日と同じくギルドウインドウやフレンドリストも消失している。さらにはログアウトも出来ないから、残る手段は強制終了だけだと思っていたら、システム側の方から回線異常で終了となった。

しばらくしたら再ログイン可能となったので、デスペナ覚悟で入ってみると、奇跡的にもクロス姉はその場に留まっていた。不幸中の幸いと言えるが、この不安定さではいつまた起こるかわからないというわけで今日は訓練もそこそこに撤収することとなった。

四月十八日。

昨日の一件に関連した臨時のメンテナンスが夜中にあつたそう  
で、朝、もうすぐ三十一にあがりそうなタルカスが古戦場で訓練を  
開始した。ところが午前七時前、経験値がようやくXの真ん中に来  
た、と思った時、また世界が凍りついたそうである。しかも今度は  
再ログインしてみるとタルカスは復活ポイントであるバビリム東に  
飛ばされており、経験値もEの手前まで巻き戻っていたという。

「いい加減にして欲しいわよね。自分のミスや力不足で死ぬのなら  
ともかく、システム側の問題で一時間もの訓練の結果を水の泡にさ  
れるなんて、到底納得出来ないわよ。」

どちらかといえば温厚なタルカスが激怒していた。まあ当然とい

えは当然だろう。あまりにも気の毒なので、あたし達もタルカスのレベル上げを手伝い、午後には三十一に上がる事が出来た。それまでにまた起こるのではないかとひやひやしなからではあったが。

いずれにせよ、この状態でデスペナをくろう場所に行くのはリスクが大きすぎる。四人で話し合った結果、少なくともこの週末は塔パーティーを優先させようという事になった。

## 第四十話・死の恐怖からの解放は結構だが…

四月十九日。

昨日のタルカスの一件もあつて、今日は殆どフィールドのレベル上げは行わず、塔のエニグマ攻略パーティー、或いはクエストクリアパーティーのお手伝いに参加した。

午前中にタルカスが、そして午後にはわたしが参加したが、一度だけ十四階でヒール3というドルイド用のレアスキルが出ただけで、それもダイスの目が悪くて取る事が出来ず、あとは取り立てて良いものが出なかった。まあこんなものか、という感じでわたし達は塔パーティーを終了したが、夜になってクロス姉の知人から、その知人のフレのエピッククエスト十五クリアを手伝って欲しいと連絡があり、早速ウルク街道から駆けつけて塔に登った。

待ち合わせの時間に、塔の西入り口付近を邪神遠藤というキャラクターがうろついているのを発見したクロス姉は面白がつてスクリーンショットを撮ったそうだが、これがあとで起こる一件の前兆であると思わなかったらしい。

十五階と十九階は、当初はメンバーの一人が提案したスカウト職のヘイトダウンを使う方法を用いて攻略を開始したものの、タイミングが上手くいかず、メンバーもやや意気消沈した様子を示し始めた。

「ふふふふふ」という不気味な笑い声がシャウトで聞こえて来たのはその時だった。それがギャンブルナイトの手下Pである事に気が付いたクロス姉やパーティーのメンバーたちは、それまでの沈んだ雰囲気は嘘であるかの様に活気付き、登場した手下Pを囲んで撮影大会を開催。そのあと告知されていた通りダイス大会が催された。全員で振って誰か一人でも手下Pの出した数を上回れば神代のエリクサーを全員に十個ずつくれるという勝負は、クロス姉の992という目で見事に勝利したそうだ。さすがにたいしたものである。

「まあねえ…でもこういう風にパーティーの途中でダイス振って勝つと、分配の時は負けるのよ。」

というクロス姉の言葉通り、ヒーリングオーブを賭けた分配では負けたそうである。運が良いのか悪いのか…まあ悪くはないと思うのだが。

それにしても、今回初めて運営側の人間と直で話す事が出来たのは、クロス姉にとって大きな収穫だったそうだ。少なくとも彼らが生きて生活している人間だという、考えてみれば当たり前な事を、理論ではなく感覚で体感する事が出来たのだから。経験主義はリスクが伴うが、理論だけで物事が片付く訳ではないし、時としてどちらかに偏りすぎると、ものの見方や考え方も偏ってしまう。何事も程ほどに、という事だろう。

四月二十日。

四人ともレベルに変動無し。現在のところ三十一になったばかりのタルカスを除いて全員経験値のゲージが六時から八時の方向にきているので、しばらくはこのままだろう。一刻も早く三十装備を着たいリレイヤーはかなりあせっているらしいが…

四月二十一日。

昨日に続き、四人ともレベルに変動無し。

四月二十二日。

毎度恒例の、恐怖の水曜日である。今回も何か起こるかと思っただら、ある意味最悪な事態となった。再開が三時間遅れたのにも関わらず、新しい要素が一切実装されていないのである。

まず、いつもなら午後四時に再開しているものが、午後六時に延期となった。さらに午後六時直前になって、今度は再開時刻が「未定」と告知された。結局は午後七時に再開したが、メインテナンス後なら何かしら新しいファイルがダウンロードされるのにも関わら

ず、そういった事が一切無かったのである。

運営側が詳細な報告をしないので、無論この間の事情は分からないが、想像は出来る。例えば当初は何かを実装するつもりだったのだろう。時期的にキャップの解放（つまりプレイヤーキャラクターの最高レベルの引き上げと塔の階層の追加）或いはラジオクエの続編などが考えられる。しかしいざ実装してみたらうまく作動せず、再開を二時間遅らせてデバッグをやったものの問題は解決しない。二回目の延長の直前或いは直後に、今回のバージョンアップを諦めた…という感じではないだろうか。

いずれにせよ、十八日にタルカスが被ったデスペナの問題が解決しないままでどうしろというのだろう…と思っていたら、システムが安定稼動するまで当分デスペナは無くすと運営から通達があった。考えた末の決断だろうが、それではプレイの仕方自体がまるで異なってくる可能性がある。経営レベルでの問題もあるのだろうが、とにかく早く通常の運営が行われる事を切望するのみである。

再開してすぐ、知人からエピッククエスト九を手伝ってほしいという連絡があり、パーティー編成の事情でタルカスが参加した。パーティーの五人のうち三人がクエストの対象で、必然的におとり役はタルカスが引き受ける事となったが、うまく果たせたそうでは何よりである。

## 第四十一話・ムシユフシユ

四月二十三日。

今日は各人とも殆どレベル上げに終始した。

「なんだかんだ言ってもデスペナが無いのは有難いわね、特にあたしみたいなメイジ系は、飛び道具がクリティカルになったら瞬殺されるという危険と常に隣り合わせで狩りしてるから、その危険が危険でなくなった事で、かなり思い切った事が出来るもの。まあ、その分スリルが無くなったという側面もあるけど、どうせ暫定的なものでしょうし、この間にやれる事はやってしまおうと思ってる」と言い残してクロス姉はウルク街道に狩りに出かけた。今日の時点で既に経験値が九時半の方向まできているそうで、この週末には四十四になりたいと張り切っている。

無論わたし達も頑張って経験値を稼いでいるが、特にわたしとリレイヤーは少し前から古戦場で一つ格上の相手に挑んでいるから、クロス姉と同じく今回のデスペナ無し状態は有難い。

四月二十四日。

クロス姉が四十四に上がった。ウルクで経験値がEの真ん中に来るぐらいまで上げたところで知人と出会い、そのままパーティーを組んでラルサで格上を相手に狩りを続け、夜中近くになって上がったそうである。

「これでマインドコンバージョンが使えるのよ。」とクロス姉は嬉しそうである。マインドコンバージョンというのは、言ってみればわたし達ドルイド職が使うボディーアクションの裏返しのスキルで、HPを少しずつPに変換していくというものだ。Pを大量に必要とするメイジ系の職には有難いスキルであり、クロス姉に言わせれば青POTの節約になるそうである。

四月二十五日。

四人ともレベルに変動無し。クロス姉が着実にレベルアップしているのに対し、わたしたち三人が遅れ気味である。特にわたしとリレイヤーは早く三十装備が着用出来る様にならないと、攻撃を受けた時のダメージが大きすぎる。今リレイヤーは古戦場でボーンオブデインギルやパワーソースといった三十モンスターを相手にレベル上げを続けているが、意外に経験値が貯まりにくいので、三十になれるのはあなり先かもしれない。

四月二十六日。

クロス姉が、ムシユフシユの討伐に加わった。ご存知の通りムシユフシユとは、シッパル湖にいるレベル八十のヒドラである。レベル五十三がプレイヤーの最上限である今、通常ならまず手を出すことは無い。デスペナが無い状態の今だから出来るイベントといえるだろう。カンスト組を主体とした数十人ないし百人以上のプレイヤーが束になってかかり、夜中から朝までかかってようやく倒すことに成功したという。

残念ながらわたし達は直接参加する事はできなかったが、それでもクロス姉がスクリーンショットを撮ってきてくれたので様子を知る事は出来た。なんと凄惨な光景である。わたしが所属しているギルドの掲示板にはる事にしたが、それにしても、このムシユフシユをフルパーティーひとつで倒せる日はくるのだろうか？

## 第四十二話・クロス姉ヤマトを着る

四月二十七日。

ちよつと気になる事があった。考え過ぎかもしれないのだが…

古戦場でリレイヤーとレベル上げをしていた時、近くにいたソルジャーが、HP量半分以下の状態で休んでいるのでヒールし、ついでにブレッシングボディーとブレッシングシールドをかけた。しかし相手は特に何か言うでもなく、そのまま敵モンスターに向かつて行った。

別に頼まれた訳でもないし、わたしが所属しているギルドの基本姿勢にそって勝手にやった事だから、感謝の言葉を求める義理はない。だからこちらは何を言う事もなく、そのまま狩りを続けていたのだが、ふと気が付くと、そのソルジャーがまたHPが減った状態でわたしに近づき、ピタツと寄り添って座り込んだのである。何も言う様子はないから相手の真意は分からないが、さっさとヒールしろと要求している感じにも感じられる。相手が何か言ってきていないだけに気味が悪いが、こちらから真意を問いただすのもおかしい話なので、わたしの方がその場を離れることにした。

こういう事があると、見知らぬ相手にヒールやバフをかけるのも考えものかも知れないとも思う。だが、こういった行動をとる相手は今回が初めてだし、それも本当のところどうなのかはわからない。わたしの勘違いだという可能性もあるからだ。まあいずれにせよそういう事があった、とだけ覚えておけばいいのかも知れない。同じことが何度もあつたら改めて考えよう。

四月二十八日。

わたしとリレイヤーがほぼ同時に三十に上がった。ようやく冒険者としてサマになってきたかな、と自負している。

ただ、これからは古戦場からナラクの採掘場にかけてが主戦場に



なるだろう。クロス姉から色々と聞いて知識としてはわかってはいるが、いつものごとく、メイジ職では無いわたし達はまた戦い方も異なってくるだろうから、自分がどうすべきかは自分で考えなければならぬだろう。

四月二十九日。

今日はお買い物の日となった。

まずわたしとリレイヤーが三十装備を手に入れて着てみた。わたしは秘書セットをきているから見た目は変わらないが、スカウトの鎧のままのリレイヤーは全く変わってしまう感じた。いぶした金色が基調のスカー三十装備は、二十装備とはかなり印象が異なる。タルカスが着ているソルジャーの三十装備もガツシリとしていて如何にも強そうだが、スカのそれは強そうだけではなく妙に華やかさがあるのだ。

この衣装だと、それまでの短いナイフよりも細身の剣の方が合いそうだな、と想像していたらリレもそれまでの短剣ではなくニードルソードを選んだ。それも初めて武器を強化したようである。光のオーブを装着したので、発光色も金色に近い。もともと金髪だから、結果として全身を金色で固めた事になる。

「これからはリレイヤー・ザ・ゴールドと名乗ったら？」と半分冗談で言ったら、意外に気に入った様である。まあ本当に名乗るかどうかはわからないが。

夜になって、わたしが所属するギルドと懇意のギルドがバビリム東で格安の即売会を催したので行ってみたところ、クロス姉が前から欲しがっているヤマトのおしゃれセットを発見した。オシャレにはほとんど無関心のクロス姉が事ある毎に欲しい欲しいと言っていたものだ。

通常は三百五十銀ぐらいするが、この時は三百銀で出ていて、しかも売主が知人だったので二百八十までまけてもらえる事となった。

姉妹全員の持ち金をかき集めてなんとか購入する事ができたので、さっそくクロス姉に着て貰った。何かと想うところのあるクロス姉の黒い肌は、しかしこの衣装にはピッタリである。南国風味を強調するため、頭はオリジナルでは無く赤い花をあしらってみた。姉妹のわたし達から見ても完璧なコーデイネイトである。

ちなみにこの日、クロス姉はずっと大鏡の前から離れようとしなかった。ウルクの亀をソロ狩り出来る戦闘能力を持つ凄腕ソーサラーのクロス姉だが、満面の笑みを浮かべながら鏡に写った自分と向かい合っている姿は、やっぱり普通の女の子である（笑）。

## 第四十三話・クロス姉四十五に、タルカス三十二に。

四月三十日。

四人ともレベルに変動無し。訓練は続けているが、わたしとリレが現在狩場に行っている古戦場の石碑付近が、このところいつも混んでいるので、思うように狩りが出来ない。場所を変える事も考えろべきかもしれない。

五月一日。

再延長になっていたメンテナンスが実施された。何か新しい要素が実装されるのかと思ったが、特にそういう点は見当たらない。いくら何でも時期的に塔の上層階や新しい場所が出来てもよさそうなものだが…もっとも、連休で運営も手薄だろうし、ここ何日かはこの世界も安定しているのに、入る人が多いであろう連休にわざわざ不安定になる要素を持ち込む事も無いのかもしれない。ただしもちろん、経営上の問題などで開発予算が下りないという可能性も捨てきれないが…

ただ、今回のメンテナ後もデスペナ無し状態が続いているのは有難い。この間に出来る限り経験値を稼いでおこうというのが四人の一致した見解だ。特にクロス姉は、出来ればエピック十六がクリアできるレベル四十六になりたいと思っっているらしい。もちろんわたしたちも負けてはいられないが。

五月二日。

クロス姉が四十五に上がり、さっそく用意していた生産型のブルースマールシールドを装備して防御力と知能を上げ、再び狩りに出かけていった。

最近のクロス姉は、ソコ狩りの場所は反射池の沼地の南地区が気に入っている様だ。横沸きの心配が無いつり橋にモンスターをおび

き寄せ、橋の長さを利用してヒットアンドアウェイで相手の体力を序々に削ぎとっていく方法は、ナラクの採石場以来クロス姉が得意とするもので、メイジ職が同格のモンスターを相手に余裕で勝てる最も効果的な方法でもある。

そのクロス姉が、夜になってとんでもない出来事に巻き込まれた。知人のドルイドが二十八になったので、今まで登った事が無いという十四階の案内を兼ねて、十階から十四階にかけての周回パーティーを催した。そのほか知人の仲間であるスカウト、クロス姉のフレであるローグ、そしてシャウトにに応じてきたソルジャー、この態勢で三周する事になった。一周目からホーリーライト3やクイックボデイが出て幸先の良いスタートとなったが、三周目、十三階で鍵役と扉役を分担してスタートしようとした瞬間、突如として強制終了したのである。慌てて再起動したが、キャラクター選択画面から先に進もうとするとサーバが動いていないというメッセージが出て進む事が出来ない。どうやら色々な情報から、塔だけが動いていない事が判明した。そこで古戦場にいるわたしが代りにログインして各方面に連絡を取り、どうやらクロス姉のフレにだけは連絡を取った。その後メンテナを挟んでようやくクロス姉も入れるようになったのだが、メンバーの中でひとりログインしていなかったため、その場でダイスする事は出来ず、クロス姉がアイテムを保管して後日に改めてダイスという事になった。

それにしても、肝心の塔だけが消失するというのはどういうものだろう。連休初日の、それも最も混む時間だから負荷がかかるのは分かるとしても…いや、だからこそきちんとしてほしいものだ。

五月三日。

昨日クロス姉が出来なかったダイスは、午後十時過ぎにパーティーのメンバー全員がそろい、無事に執り行われた。残念ながらクロス姉はダイスの目が良くなってレアアイテムは手にいれられなかったそうだが、とにかくきっちりと終わらせた事の方が嬉しかったそ

うだ。

ところでその直前、知人のドルイドから転職クエストを手伝ってほしいと連絡があったそうで、久しぶりに岩穴や運命、ラビリンスの転職PDと戦ったそうである。三人が転職クエスト該当者で、助っ人はサラ四十五であるクロス姉と、もうひとりレンジャー五十三が参加したという。クロス姉は主に召還されるモンスターを引き受け、本体はレンジャー五十三が軸になって戦う事となったが、ソウルオブラビリンズ戦で、このレンジャーさんが奥義を使ったため、ほぼあつという間に片付いたそうだ。

「実はレンジャーの奥義が発動するのを初めて見たのよ。あれは凄いわ。この世界での飛び道具では最強という噂も納得出来るわね。わたしが五十になったら使えるブリザードでも、あそこまでは無理かもしれないもの」

このクロス姉の発言を聞いて、顔色を変えたのが誰か言うまでも無いだろう。クロス姉が退室した後、黙って話を聞いていたリレイヤーが、ふとこう呟いたのだ。

「…レンジャーなら、ソーサラーに勝てる訳か…」

どうやら、リレの転職先は決まっただけらしい。

五月四日。

レベルが停滞していたタルカスが、本腰を入れてレベルアップを開始したようだ。現在三十一であり、古戦場から先に進みにくい事で困っていたようだ。パーティーなどにも積極的に参加して訓練を充実させようと考えているらしい。今日は午後になって鎧PDのクエストをクリアするためのパーティーに参加したそうだが、PDがなかなかでないため雑魚狩りが長時間続いた。ただし雑魚と言っても三十か三十一なので、結果的には半分レベル上げパーティーにもなっただけらしい。

ところでその後、古戦場の北から南西に回りこむ外周道路を通ったそうである。途中でパーフェクトボーンという骨PDが出るので、

そこまではクロス姉が以前行った事があるそうだが、そこから先はクエスト等に関係の無い場所なので滅多に人が通らず、タルカス自身も含めてメンバーの多くが初めて通ったそうだ。

「これがとんでもない道だったのよ。レベル三十の骨や鎧や武器がビッシリと棲息していて、ちよつと進むのにも何匹も倒さなきゃならない訳。まあレベル上げにはなったけど、もうあんなうつとしいのはごめんだわね。」

普段はあっけらかんとしているタルカスをして『うつとしい』と言わせるのは一体どんな道なのだろう。一度通ってみたい気もするが…

さて、この日ひよんな事からトルクフルブレードが手に入った。ソル用二十武器で、セカンドギアという蝙蝠PDが落とすレアアイテムの一種だ。早速手にしたタルカスが風のオーブを装着していた。「これであのブラックキャプテンを倒してやるつもりよ」

なるほど、塔十階の大型モンスターに対抗する武器として使づらい。強化する予定は無い様子だが、装備するだけで腕力が増えるという武器なら、無理に強化する事もないのかもしれない。いずれにせよ、こつこつという武器はそうそう手に入る機会がないから、タルカスには心して使ってほしいものだ。

五月五日。

タルカスのレベル上げに協力する事になった。一刻も早く三十二になってナラクに訓練場所を移したいそうだ。ソルジャーなら三十二でも三十三の牛や蜘蛛と充分戦う事が出来るので、レベル上げには最適だろう。という訳でタルカスと一緒に古戦場の北部に赴き、三十一の鎧や武器、そして蠍を相手に訓練を開始する事になった。様子を伺っている限りでは、おそらく明日には三十二になれそうである。

五月六日。

朝早く、タルカスが三十二になった。これでようやくナラクに移れるね、と二人で喜んでいたところに、わたしが所属するギルドのメンバーから骨PDのパーフェクトボーンが出現したと連絡が届いた。二人ともクエストをまだクリアしていなかったので、丁度いいからクリアしておこうと早速向かった。といってもさすがにタルカスが一昨日通った順路は使わず、石碑を経由して南の通路から向かう事となった。石碑でギルドのメンバーであるカンストの人が合流してくれて、さらに現場では連絡をくれたスカウト三十七さんが合流、二人して助っ人に加わってもらい、ほぼあっという間に倒してしまった。御礼を述べてバビリムに戻ったあと、わたしは装備を整えて再び古戦場に向かい、一方タルカスは知人のドルイドと合流してナラクに向かった。早速ためしにナラクの南出入り口付近にいる牛と蜘蛛三十三を相手にしてみたそうだが、回復役とペアなら充分いけるといいう事が判明、しばらくはここを拠点にレベル上げを続けると連絡してきた。わたし達も三十二になり次第ナラクに向かうつもりだ。

## 第四十四話・タルカス三十三に上がる

五月七日。

クロス姉が過日一度だけ行ったスーマイル丘陵地に本日初めてパーティーで狩りに行った、と報告して来た。レベル四十五のフルパーティーで、対象は四十六の豹や蝙蝠。さすがに魔法が当りにくくて苦労したそうだが、ラルサ等では火耐性の関係で使えないファイヤーボール3が有効であるため、その点は有利に働いたようだ。

クロス姉は現在、ソロ狩りの場合は氷魔法であるアイスブレス3を使っている。一次職の魔法だがランクを5に強化しているので未強化のファイヤーボール3と較べても威力がそれほど変わらない上に、数発叩き込むと相手の移動速度が急激に落ちるため後半の戦闘が非常に楽になるという。だがパーティー戦闘となれば前衛職が壁役：つまり相手の移動を食い止めてくれる役になるため、消費Pと詠唱時間が有利なファイヤーボール3や、詠唱時間こそ長いが転倒のデバフが付加するフライングディスクの方が有効になるという。こういつた使い分けは、前衛職も使用するデバフなどで考慮しなければならぬ場合が多い。事実、現在ナラクの採石場にいるタルカスは火耐性のモンスターを相手にする事が多いため、フレイム・スラッシュを使えないケースが増えていて困っている様だ。

五月八日。

今日は買物で特筆すべき事があった。タルカスが訓練用に複数欲しがっていた生産型のヘビーアックスが露店で見つかったのだ。

ヘビーアックスとはソルジャー用の三十武器で、分類は片手斧である。現在のタルカスがメイン武器にしているスクラマサクスに比較すると攻撃力や敏捷性などで落ちるが耐久性で勝っている。したがってどちらかといえば実戦より訓練向きの武器と言えるだろう。二十五武器のハードアックスと同じくタルカスが持っている鑄造5



で作成が可能だが、作成に際して必要な核心の入手経路は大きく異なる。ハードアックスの核心は森の花が割と頻繁に落とすので材料集めはそれほど難しくはない。だがヘビーアックスの核心は塔のエンigma宝箱からしか出ない。タルカスもその点は非常に困っていて、いつそ店売りを買おうかと考えていたそうだ。だが今日になって、露店で生産型のヘビーアックスが二本見つかった。しかもプラス1ながら強化までされていて、未強化のスクラマサクスと同程度の攻撃力を持っている。にも関わらず価格は1本八銀。耐久度の攻撃力も下の店売り品が十五銀である事を考えると、かなりお買い得と言えるだろう。早速タルカスが購入し、ナラクでの訓練に使い始めたようである。

それにしても露店というのは当たり外れが多い。プレイヤーが各自の判断で商品を揃えて価格を設定しているのだから当然といえば当然だが、何をどのタイミングで幾らで買うかというのは、一種のギャンブルに近いものがある。勿論これは買い手に限った事では無いのだが。

五月九日。

タルカスが三十三に上がった。いままで停滞していたのが嘘であるかのよう、急激にレベルアップしている。やはりナラクでも訓練は効率が良いらしい。

ところで三十三といえば、エピッククエスト十二をクリアして新しいスキルを取得出来るレベルである。ソルジャーの場合はガッツ2という攻撃力を上げるスキルで、タルカスは体力と敏捷性を重視するステータス振りをしていて腕力が弱いため、出来れば早急に欲しいらしく、エピッククエストを進めようと計画している。

## 第四十五話・クロス姉四十六に上がる

五月十日。

わたしとタルカスがエピッククエスト十二までクリアした。

同じくエピ十二のクリアを目指していた知人のドルイド三十、そしてタルカスのギルドから助っ人として参加してくれたソルジャー三十六、あわせて四人でいわゆる『サソリ姫』の場所に行き、雑魚を掃討しつつ沸くのを待った。このPDは出にくい事で知られているが、今回は僅か十五分ほどで出現、無事にクエストが達成出来た。もっとも帰りがけに現場を見たら、倒して三分もしないうちにもう沸いていた。抽選の確率が以前より高くなっているという噂はやはり本当なのだろうか？

五月十一日。

四人ともレベルに変動なし。ただしクロス姉の経験値が九時過ぎの方向まで上がっている。現在レベル四十五であり、次に上げればエピッククエスト十六を攻略するため二十三階に登る事が出来る。そのため現在はクロス姉のレベル上げに他の姉妹も協力している最中だ。

ところで、タルカスが所属しているギルドのメンバーの一人が、レベル四十七で未だフェザームーブ2を取得していない事がわかり、リーダーの呼び掛けで早急に二十一階に獲得にいかうという話がまとまっている。二十一階のエニグマは灯籠の消火/点火であり、クロス姉の出番となる。また、メンバーのレベルによってはフェザー獲得のパーティーでそのまま二十三階に登る事を頼めるかも知れないと考えているようだ。

五月十二日。

夕方、クロス姉が四十六に上がった。知人とのパーティーで反射

池のネズミPDと戦っている最中、相手が変身した瞬間に上がったそうである。

「そのまま変身した相手と戦い始めたから、ゆっくりと感慨にひたっている暇は無かったけどね」と苦笑まじりに報告してくれたが、四十六となればエピックククエスト十六がクリア出来る。なるべく早いうちに機会を作って塔二十三階に登ろう…と考えていたクロス姉のもとに、昨日のレベル四十七の知人から連絡があり、夕食後にエピック十六をクリアする為のパーティーを結成して二十三階に行くから同行しないかと打診されたそう。渡りに舟というタイミングで、夕食後に早速塔周辺に跳躍、見事に二十三階で条件をクリアしたそう。

ただ、二十一階で知人が必要としているフェザームーブ2が手に入らなかった為、やや残念な気持ちでパーティーを解散したが、一度その時、別の知り合いが二十〜二十二階周回パーティーのメンバーを募集していたそうである。これまた丁度良いという事でクロス姉とフェザー2を欲しがっている知人が参加、三度の周回で一度だけフェザーが出て、なんとかダイスもうまくいって知人が獲得できたそうである。

「とにかくオーブの鉱脈あたりからは、もうフェザー2がないと難しいらしいのよ。わたしはまだ行った事が無いんだけど、その時は心して入らなければならぬでしょうね。」

あと2つで推奨レベルに到達するクロス姉にとっては他人事では無いだろう。もちろんわたし達もいずれは向かい合う事態であるが。

個人的な都合で、五月二十日まで

ログイン出来ませんので、本作は

一週間ほど休ませていただきます。

## 第四十六話・タルカス三十四に上る

五月二十日。

今日から再開。久しぶりの戦闘で上手く行くかどうか少し不安だったが、四人とも概ね問題はない様子だった。最初クロス姉が、魔法を撃つタイミングと相手との間合いでやや戸惑ったそうだが、それも何度か続けているうちに序々にカンが戻ってきたそうだ。

現在、わたし達はタルカスのレベル上げを最優先にしている。このレベルにきて、ソル職の需要が大幅に増えたという事もあるが、早くあげないとわたしやリレイヤーの訓練にも支障があるからだ。

五月二十一日。

四人全員レベルに変動は無し。タルカスのレベル上げを最優先課題としているので訓練時間もタルカスが最長である。クロス姉やリレイヤー、そしてもちろんわたしも訓練はしているが、今の処、やはりタルカスのレベルアップが著しい。本日の段階でレベル三十三、経験値が午後九時少し前の方向まで来ているので、おそらくそう遠くない時期には三十四に上がるだろう。

ところで、確かかどうかは未確認だが、近々デスペナが復活するという話を聞いた。もうそれが本当なら、経験値獲得は難しくなるだろう。復活前になるべく経験値を獲得しておこうというのが姉妹四人の見解である。

五月二十二日。

タルカスが三十四に上がった。どうやらナラク方面での戦闘の要領も大分掴んできたらしく、採石場での牛や蜘蛛との戦闘もかなり楽に進める事が出来る様になったらしい。ただし三十四となると、今度は審判の荒野での戦闘がメインとなるだろう。火耐性のモンスターがますます増えるので、フレイムスラッシュはほぼ用を成さな

くなる。厳しい戦いが続くだろうが頑張っ  
て欲しい。

## 第四十七話・タルカス三十五にあがる

五月二十三日。

ナラク採石場で訓練を続けていたタルカスが、ギルドのメンバーのアドバイスで、審判の荒野のレッドムームー狩りに訓練を変更した。レッドムームーは火耐性がある為ソルジャーのスキルの多くが無効となり、また腕力もかなりある。だが破壊的に強力なスキルもないので戦いが楽であり、また石碑付近を徘徊する数がかなり大量であるため、枯れる事が少ないという利点がある。石碑付近の三四を相手に訓練を続け、レベルアップしたらラビリンスの入り口付近の三十五に相手を変更すれば、かなり効率よく経験値を得る事が出来る様だ。

それにしても、かつて三十代半ばだった頃のクロス姉とはやはり適切な訓練場というものが異なっている。魔法は装甲に関係なくダメージを与えられるが、戦う場合に距離が必要であるため、クロス姉は採石場のつり橋に陣取り、亀を狩りまくって三十六までレベルアップした。だが、打撃を主攻撃とするソルジャーは装甲が強靱な相手が苦手であり、タルカスもその点は同じである。ただしその場に踏みとどまって戦うので距離は必要ないから、荒野の石碑付近とレッドムームーの間の狭いスペースでも、ソルジャーはメイジと違って移動距離の確保に困る事は無い。しばらくは荒野がタルカスの主戦場になりそうだ。

五月二十四日。

タルカスのギルメンの一人が、転職していながらまだフェザーム1ブ2、いわゆる『羽2』を手に入っていない状態だった。この度ようやく四十二になり、羽2が出る二十一階に登れる様になったため、自力で入手しようとギルドを中心にパーティーを組んで取りに行く事になったが、もちろんレベル三十四のタルカスはまだ二十一

階には登れないのと、二十一階の攻略でメイジ系列のPCが必要であるため、今回もクロス姉が代りに参加する事となった。ただ、クロス姉と同行のドルイド系列のメンバーを除く前衛職の三人は、二十階と二十一階がほぼ未経験であったため、最初の一回はかなり苦労したようだ。もつともその一回目で羽2が手に入り、さらに二回目からは要領も分かって攻略もスムーズに行き、羽2ももうひとつ手に入れる事が出来たという。

それにしてもこの2つのフロアは難しい…と思っていたら二十五階あたりはさらに難しいという情報が入った。今後が思いやられる。

五月二十五日。

タルカスが三十五に上がった。もうあと1つでエピッククエスト十三にかかれるレベル三十六になる。順調だが、そのため他の三人はほとんどレベル上げが出来ない。まあ中途半端に分散するよりはましなので仕方がないが、おいてけぼりにされているリレが大分あせっているようだ。

五月二十六日。

引き続き訓練。タルカスの経験値が八時の方向まで来ている。

## 第四十八話・タルカス三十六に上がる

五月二十七日。

タルカスが三十六に上がった。これでエピックククエスト十三を進める事が出来る。ただしタルカスの知人のドルがまだ三十五であり、一緒にクリアしようと約束しているので、実際にクリアするのはもう少し先になりそうである。

現在タルカスはラビリンスの入り口付近でコウモリ三十六とスピリット三十六を相手にしている。ここはかつてクロス姉も訓練に使っていた場所で、交通の便が良いが、それゆえ場所取りも大変だそうである。実は三十五の後半からいるのだが、三十六になるまでは格上だけあって攻撃が空振りになる場合が多かった。それでもドルイドとのペアであればなんとか戦えるらしい。という話を聞いたクロス姉が呆気にとられていた。メイジの防御力では、一度でもスピリットの飛び道具を受けたら致命傷になりかねないからだ。

「そのかわり、絶大な攻撃力で倒すのも早いけど……まあいずれにせよ、いずれタルカスはガーディアンになってますます防御力を上げる訳よね。わたしとはまったく違う道を行くわけか……」

クロス姉の思いはかなり複雑かもしれない。常に張り合ってくるリレイヤーに対する感情とはまったく異なるものだという事は分かるが。

五月二十八日。

わたしが所属しているギルドのメンバーであるハイブリースト四十四が、今日、知り合いの転職クエストの助っ人をするという事で一緒に戦ってくれるメンバーを探しているという。クロス姉が参加したが、移動が徒歩だったため、ラビリンスでかなり待たせてしまったらしい。やはり助っ人を買って出る以上『祝福された跳躍の書』は必携なのかも知れない。クエ自体は成功したようだ。



五月二十九日。

夜になって、クロス姉から報告が二つ入った。ひとつは新しく実装されたラジクエの続編の解き方である。知人がこのクエストに熟知していて、その人のパーティーに参加したそうだ。といってもその人も解答を全部知っているわけでは無く、塔の二階から十三階までの二者選択の問題をパーティー全員で色々と考え、どうしてもわからなければどちらかを任意に選択、選んだ者の結果を待つてクエストを進めるという方法を探った。結果、五人のうちクロス姉を含む二人がクエストをクリアしたが、他の三人はもう一度やりなおしという事になった。ただし現時点ではやり直しの判定フラグにバグがあるらしく、クエストのやり直しは次の水曜日以降という事になったそうである。

もうひとつは、ジル盾五十を手に入れたという事。今現在四十六のクロス姉にとって、エピックク十七で手に入るブリザードと並んでこの盾の存在も五十に上がる楽しみとなったようだ。

## 第四十九話・タルカス三十八に上がる

五月三十日。

タルカスが知人のドルイドと共にエピックククエスト十三をクリアし、さらにエピッククエスト十五の途中まで進める事が出来たと報告してきた。エピ十五では塔十九階に登る必要があるのですが、その直前である塔周辺の監視者に話しかけるところまで進め、あとは三八までレベル上げ訓練を行った後に続けるそうだ。

五月三十一日。

タルカスの経験値が十時の方向まで上がっている。明日にはレベルが上がりそうだ。

六月一日。

タルカスが三十七に上がった。いよいよあとひとつでエピッククエスト十五のクリアと転職クエストを受ける事が可能になる。

六月二日。

タルカスが訓練場所を変更することになった。これまではラビリンズの石碑の付近でコウモリ三十六とスピリット三十六を相手に狩りをしていたが、三十七になったため、もう一段階上のモンスターを相手にしなければ上がりにくくなってしまったという。どこがいかに迷っていたタルカスに、クロス姉からアドバイスがあった。「だったら、わたしが転職前にずっと訓練を続けていたコウモリ三十七の部屋はどう？」

ラビリンズの中央にあるその部屋は、コウモリ三十七とスピリット三十六がいて、しかも後方が安全地帯であるため、とても戦いやすいという。さっそくクロス姉に連れられて行ったタルカスは、かなり気に入ったらしい。二月二十五日ごろに、やはり同じ悩みで狩

り場所を探していたクロス姉の経験に基づいているだけあって、流石にそのアドバイスは適切だった。

「それにしても、懐かしかったわね。行くのもそんなに難しくないので人気スポットなんだけど、わたしはそこで四十近くになるまで上げていたの。」

わたし達もやがて行く場所だろう。その日がいつになるかは、やはりタルカスの転職クエストの進み具合如何にかかっている。

六月三日。

タルカスの経験値が九時の方向まで上がった。残念ながら、デスペナが復活するのではないかという噂のメンテナが実行される前に三十八になりたい、という希望までは届かなかったが、時間の問題となつて来た。

デスペナは復活するのは仕方無いが、こちらも相応の準備が必要になる。すくなくとも四人とも、万一の為に帰還の書はもたなければならぬだろう。

六月四日。

タルカスがついに三十八となり、転職クエを受けられる様になった。ソロではクロス姉に教わったコウモリ三十七の部屋で、そして知人のドルイドとのペアでは、いわゆる『目玉部屋』で格上相手に訓練を続けていたが、思ったよりも早く到達したようだ。

六日の土曜日にはエピ十五のクリアと転職クエを実行したいという事なので、タルカスが所属するギルドのリーダーや、わたしが所属するギルドのメンバーに事情を話して協力を得る事となった。

「でも、やっぱりちょっと不安よね。なんといっても転職クエに参加するのは初めてだし」とタルカスがいつになく慎重な様子で呟いた。

「あんたにしては珍しく弱気ね。転職クエならクロス姉から色々やり方を聞いているでしょ？」

「それはそうだけど、後衛のクロス姉と前衛のわたしとでは、やっぱり勝手が違うもの。転職モンスター本体と近距離でぶつかる感覚は、クロス姉からは情報が無いし」

確かに、まったく違う戦い方をしなければならぬ両者だけに、不安を感じるのは仕方ないかもしれない。ただし、協力してくれる人たちがかなりの練達者揃いなので、その点はかなり信頼してよいはずだ。

## 第五十話・タルカス転職クエストクリア

六月五日。

タルカスが明日の本番の前にエピ十五をクリアする事が出来たと報告してきた。ちょうど塔周辺で十九階周回パーティーのメンバー募集シャウトがあったのでそれに便乗し、一回目でクリア。さらにギルドのリーダーの協力で空中神殿まで連れていってもらったそうだ。その後、バビリム東で職別PDを倒すクエを受けたので、明日は聖域のソードオブオーディアルから始められるという。いよいよわたし達姉妹から、二人目の二次職が誕生する日も近い。

六月六日。

タルカスの転職クエストが成功した。午前十時から開始したクエストは、タルカスの他、ガデ五十一、ログ五十三と四十三、そしてプリ四十五、ラビリンスではさらに支援としてガデ四十九が参加してくれた。流石にこの布陣だとなんら問題もなく、僅か1時間と少いでクリアしてしまったという。

最後のスウルオブラビリンスを倒して報告に行ったタルカスは、予定通りガーディアンへの道を選んだ(といつてもまだ三十八なので実際に転職はしていないが)。これからタルカスの新しい人生が始まるのだろう。

六月七日。

昨日のタルカスの転職に続いて、今日は知人のドルイドの転職クエストが行われた。もうひとり、別のソルジャーの転職も同時進行していたのと、エピ十五のクリアの為十九階に登るところから始めたので、最後のスウルオブラビリンスを倒すまでに四時間近くかかってしまったが、それでもなんとか無事にクリアする事が出来た。

ところで今回の転職の手伝いは、タルカスとクロス姉の連携とい

う初めての試みが行われた。経緯はこうだ。

まずエピック十五をクリアするために十九階に登る必要があったのだが、クエスト対象のソルジャーの人がほとんど塔登りに経験が無いというのと、十五階～十八階の攻略は攻撃力より防御力が優先するので、塔だけはタルカスが先行を受け持つ事になった。

十九階はモンスターを倒す方法と倒さないでやり過ごす方法がある。エニグマ解読の為にスピード重視ならやり過ごす方が良いかもしれないが、クエストの対象者が十九階に上るのは初めてということで、ここは二つ目のエニグマを捨てて確実に全員がクオツクスと対決出来る方を重視し、一番目と三番目に遭遇するモンスターを倒す方法を採用した。結果は上々で、パーティー全員が損傷無くクオツクスの面前にたどり着き、ソルソログドルエンというほぼ理想に近い構成で全面对決が実現。それほど危なげなく勝利し、エピソードの石碑到達は無事クリア。さらには捨てて掛かっていた二つ目のエニグマ宝箱も間に合った。なお、今回は十七階で高級系の製作図、十八階でヒーリングオーブ、そして十九階でブルースーパールシールドと、レアアイテムが大漁だったという。偶然かもしれないが、タルカスのレアアイテム遭遇率は本当に高い。

塔十九階を攻略した後、エピック十五をクリアして空中宮殿で転職クエストを受けに行ってもらう間に、タルカスに代ってクロス姉がパーティーに参加した。転職クエストは塔と違ってレベルと攻撃力が大きな要素になると、召還モンスターの多くが魔法に弱いこと、そして何と言ってもソーサラーの四十二スキルであるフライングディスクが威力を発揮するのが大きな理由だ。レジストされない限り転職PDをほぼ百パーセント転倒させられるので、パーティーで使う支援魔法としては非常に有益である。こうして知人の転職クエストは成功した。

「よかったわね」とわたしはタルカスに声をかけたが、タルカスはそれに頷きつつも、やや釈然としない表情を浮かべていた。

「…本当は、最後のソウルオブラビリンスまであたしが参加したか

「ただんだけどね…」

わたしが何と云っているのか一瞬躊躇している間に、別の声が割って入って来た。

「何言ってるのよ。まだ転職自体も済んでないのに。悩んでるひまがあつたら訓練してもっと強くなりなさい。あたし達が協力して優先的にレベルアップさせてるんだから、はやいところガデになつてよね。」

このやや不器用なりレイヤーの慰めの言葉を聞いたタルカスは、一瞬頬を膨らませつつも、その真意は理解している事が分かる目つきをしていた。普段ケンカばかりしているこの二人は、やはり良いコンビなのかもしれない。

いずれにせよ、この週末でタルカスの転職も一区切りした。わたしやレイヤーも訓練を本格的に再開させる事になるだろう。

## 第五十一話・タルカス転職

六月八日。

クロス姉が四十七に上がった。

この四十七というレベルは、わたし達が初めてこの世界に入った時の最高レベルである。その後二度の改変があり、現在は五十三が最高レベルとなっているが、やはりなんとも言えない思い入れを感じる。クロス姉もその辺は同じらしい。

それはそれとして、四十七というレベルになった以上、やはり、より高いレベルの訓練場所が必要となる。反射池の北にある四十六モンスターが生息するつり橋付近も試してみたが、ローパーから与えられるダメージが強すぎてあまり良い場所とは言えないそうだった。試行錯誤の末、クロス姉が選んだのはスーマール丘陵地の石碑付近だった。周辺には同格の四十七モンスターが多く、またメイジ系が得意とするヒットアンドアウェイ戦法もやりやすい。ただ唯一、氷耐性のあるイビルローズだけは注意しなければならないそうだが。

六月九日。

訓練が続いている。四人ともレベルに変動なし。

六月十日。

タルカスのギルドのメンバーが、三十二でエピック十から十二までをクリアしたいというので、クロス姉が手伝いに行った。他にも四十ガデと四十三ログがいて、どちらかという転職クエストにも対応出来そうなメンバーが集まり、当然ながら運命のババ三十五は問題無く討伐出来たという。ただ調子に乗って、その帰りにドルイド無しで転職PDに挑むという無謀なマネを行ったという。負けたのは言うまでもない。日ごろは冷静なクロス姉にしては珍しいのかつさである。まあ、デスペナの無い今だから出来るお遊びなのだそ



うだが：

夜になって新しいクエストが発表された。塔周辺の東側にある壊れた橋の上に緑色の服を着た人物が現れ「冷たい飲み物が欲しい」という依頼がなされているのだ。思い当たる場所があるのでそこに行き、購入した飲み物を渡すと、何か訳ありの箱を代りに寄越したのである。この謎はどうやら翌日に繋がるらしいのだが：

六月十一日。

訓練が続いている。四人ともレベルに変動なし。前日の緑色の服を着た人物に代って、今日は黒い服を着た人物がラジャフに登場し、箱をネズミの尻尾に取り替えてくれた。

六月十二日。

タルカスの経験値が十時半ぐらいの方向まで進んだ。おとらく明日ぐらいには三十九になりそうである。そうすればリリスを討伐するクエストに行き、同時にレベル上げも一段上に進めようとしているそうだ。なお、昨日貰ったネズミの尻尾だが、今日、青い服を着た人物が銀の塊と取り替えてくれた。

六月十三日。

昼過ぎ、タルカスが三十九に上がった。ほぼ同時に、ペアを組んでいる知人のドルイドも三十九に上がったので、その知人と協議の上今日と明日で一気に四十に上がって転職を終えようという事に決まったそうだ。

六月十四日。

夕方、リリス部屋でクエストを兼ねたレベル上げを続けていたタルカスが四十になった。少し遅れて知人のドルイド、そして一緒にレベル上げパーティーに参加していたソルジャーも四十になったので、揃って空中神殿に行き転職を済ませたそうだ。おめでとう。

タルカスはかねてから公言していた通りガーディアンに転職した。既に入手していたホワイトソードとジル盾四十を装備し、赤を基調とした四十レベルの鎧を着た姿は、我が妹ながら精悍である。

ところで、並行して行っていたリリスクエも完了したそうだが、このクエストは、ソルジャー職の報酬はプロヴォーグ3である。ガーディアンは転職してすぐプロヴォーグ4が使えるので、あまり意味は無いそうだ。というのも4は二次スキルなので、それ以前の一次スキルの強化ランクに関係なく強化出来る。ただし4が使えないベルセルクには重要だと思われるので、ベルを目指しているソルジャーはクリアしておいた方が良さだろう。

## 第五十二話・フラとリレ三十一に上がる

六月十五日。

先週の水曜日から『冷たい飲み物』で始まっていたクエストが、今日の午後四時に最終交換者の出現を迎えた。交換してくれる人物は三人。各地に点在していて、それぞれ別のアイテムが貰える様になっている。個々の価値観にも左右されるのでどれが一番良いかは断定できないが、わたし達姉妹や知人の多くは、ラジャフ2で貰えるアイテムが最も評判が良かった。なお、告知通り次のラウンドはすでに始まっているが、思ったよりも良いアイテムだったと評判なので、第三ラウンド初日はかなり盛況になるだろうと思われる。わたし達ももちろん行くつもりだ。

六月十六日。

わたしが三十一に上がった。前回のレベルアップが四月二十八日だったので、実に四十九日ぶりという事になる。タルカスの転職が無事終了したので、よくやくわたしやリレイヤーも訓練時間が使えるようになり、一緒に訓練を積んでいるリレイヤーも経験値が十時半ぐらいまで上がる事が出来た。明日には三十一になれるだろう。

六月十七日。

予定通り、リレイヤーが三十一に上がった。わたし自身の経験値も七時半ぐらいまで上がっている。今までの停滞から一転して相当な勢いでレベルアップが進んでいるのは、過日に記述したとおりタルカスの転職が一段落したので訓練時間が豊富に取れるからだ。先週の水曜日から始まったクエストをクリアした次点で受け取れるアイテムを早速使用しており、その効用もある。この調子でいけば二人とも一両日中には三十二になれるだろう。

## 第五十三話・フラとリレ三十四に上がる

六月十八日。

朝にわたしが、昼過ぎにはリレイヤーが三十二に上がった。わたしは三十三スキルのブレッシング・ボディ2が使えるようになるまであと1レベルである。今までの停滞を取り戻すべく、かなりの時間を割いているが、タルカスやクロス姉がその分停滞するのがやや心苦しい。そのためにもとにかく早く上がらなければ。

六月十九日。

訓練が続いている。四人ともレベルに変動なし。ただしわたしとリレイヤーの経験値がともに九時の方向まで進んでいるので、明日にはレベルアップ出来ると考えている。

運営から、来週のメンテナンス以降にデスペナルティを復活させると通達があった。死に戻りという便利な方法はもう使えないが、考えてみればそれが通常の構造なのでいたし方ないだろう。とりあえずはまた姉妹全員に帰還の書を常備携帯させる必要があると思う。それと死ぬ確率の高いイベントはなるべく今のうちに済ませておくべきだろう。

六月二十日。

朝早くわたしが、そして昼休み過ぎてリレイヤーが、それぞれ三十三になった。ようやく三十三スキルのブレッシングボディ2を使えるようになったので、防御や回復もかなり楽になった。ただしリレイヤーはエピッククエストを9までしか進めていないので、まだ三十三スキルを手にしていない。時間があればそろそろ運命に行つてエピッククエストをすすめてよいと思うのだが…

六月二十一日。

今日はタルカスの訓練が主体となった。転職後、わたしやリレイヤーのレベルアップに付き合ってくれたせいで経験値の獲得がやや滞っていたので、それを取り戻すためのものだ。レベル四十に変化は無いが、経験値が五時半ぐらいの方向だったものを、八時ぐらいまで進める事が出来たと嬉しそうである。

六月二十二日。

わたしが三十四に上がった。またそれに連動してエピッククエストを進め、十三の牛PDを倒して、あとは塔に登るだけという状態である。

六月二十三日。

昨日のわたしに続いてリレイヤーが三十四に上がった。これに加えて、夜から知人のスカウトとともにエピッククエストを進め、十三の牛PDを倒す事に成功した。

六月二十四日。

レベルの上限が五十五まで上がり、塔も二十七階が出現した。またこれに連動して五十五武器も登場したらしいが、わたしたちが使うのはまだ遠い未来の話である。しかし今回はそれだけではなかった。

午後八時半ごろ、タルカスが知人の二人とウルク街道でレベル上げパーティーを組んでいる時だった。突如として運営から「バビリム平原に不穏な様子あり」という通達があった。最初は何の事か分からなかったが、たまたま塔周辺にいたクロス姉がタルカスからの要請を受けて偵察に向かったところ、例の吟遊詩人の周辺で巨大な花が出現していたのである。姿はスーマール丘陵地にいるイピルローズに似ていたが、その大きさはシッパル湖にいるムシユフシユにさえ匹敵。しかもそれは一匹ではなく、開拓地に次々と湧き出てく

る。さらに黄色いスライムまでが現れたという。既に何十人という冒険者たちがその花に挑んでいて、現地は修羅場と化しているらしい。

クロス姉からの連絡を受けたタルカス達がようやく現地にたどり着いたときは、戦場は開拓者の家の周囲に移っており、かつて黒騎士の破片を依頼してきた住人が危険にさらされているという。多くの冒険者たちによって花は撃退されたが、それが何を意味しているのか、今のところは不明である。

六月二十五日。

訓練が続いている。四人ともレベルに変動なし。最近クロス姉が少し訓練不足であったため、重点的にレベル上げをやってもらい、経験値を七時半から九時過ぎぐらいまで進めてもらう。

六月二十六日。

つい最近転職したばかりの知人からの要請で、クロス姉が塔十五〜二十階に登った。残念ながらこれといったレアアイテムは出なかったが、とにかく塔での行動になれる事が重要だという事で訓練を兼ねている。特に十五階をクリアする方法は、知識として分かっているにしても僅かなタイミングのずれが命取りとなるので、これからも頻繁に登る必要があるだろうとのことだ。

## 第五十四話・クロス姉四十八に上がる

六月二十七日。

クロス姉がレベル四十八に上がり、さらにエピックククエスト十七をクリアしたと報告がはいった。エピックク十七はかなりの難物だったそう、スーマール丘陵地でレベル五十の花PDを倒した後オーブの鉱脈という場所に行つて課題をこなさなければならぬ。実はクロス姉も鉱脈に入るのは初めてだったそう、かなり迷ったそうである。特に課題が崖の上でクリア出来るのを誤解し、わざわざ回り道をして崖下に行つてしまった為、まだまったく歯が立たない亀五十一と対峙する事になり、さらにはある地点でひっかかつて、せっかく途中までいったものをスタックしなければならぬ破目に陥つたという。

それでもなんとか課題をクリアし、ラジャフの神殿でスキル書『ブリザード』を貰えた。これでレベル五十になれば新しい攻撃魔法が使えるようになるそう。

六月二十八日。

クロス姉が塔二十階と二十一階に上つた。タルカスが未だにフェザームーブ2、いわゆる羽2を手に入れていないため、それを取りに行つたのだが、四度周回して羽2はゼロ、二十階でも金マト攻urasが一本でただけで、明らかにはずれだったそう。最近羽2が出にくいという噂があるが、なんとなく実感したというのがクロス姉の率直な見解だそう。

わたしとリレイヤーも訓練を続けている。今日はわたしの場合は経験値のゲージが六時過ぎから八時の方向まで上げる事が出来た。リレイヤーもやや遅れながら、似たような累積数値になっているようだ。

## 第五十五話・タルカス四十一ノフラとリレ三十五

六月二十九日。

日付が変わる前後にわたしが、そして少し遅れてリレイヤーが、ともに三十五になった。リレイヤーはこれで武器と盾を三十五装備に変える事が出来、攻撃ノ防御ともかなり上昇した。

六月三十日。

訓練が続いている。四人ともレベルに変動なし。クロス姉の経験値が六時を過ぎた。

七月一日。

ワラシベククエストに関して周囲で苦情の嵐が巻き起こっている。任意の世界のルールを設定する者がひとつだけ確実に守らなければならぬのは『ルールの遡及適用をしてはならない』という事だ。それまで禁止事項ではなかった行為を禁止するようにルールを変えたら、その改正ルールは改正した時点以降に行われた行為に対して適用するものであつて、それ以前の行為は適用対象外としなければならぬ。ところが今回の場合、運営サイドは改正前に取得した交換中のアイテムに対してもルールを適用してしまつた。癒しのタブレットとの交換という提示条件は全くと言ってよいほど評価されず「それならお金を返します」というやや逆ギレ気味の文章で追加条件が提示されたがこれも不評、しかも正確に履行されていないという報告まで来ている。

今回のワラシベククエストは、ことユーザへのサービスという点に於いて、完全に失敗だったと言わざるを得ない。少なくともルールの途中改正の不備がどれほどユーザの不信を買うか、運営サイドは心すべきだろう。



七月二日。

タルカスのレベルが四十一にあがった。ウルク街道の入り口付近で徘徊しているモンスターはレベル四十と四十一が混合しており、それまでタルカスは四十一を相手にすると攻撃が当りにくくて苦勞していたが、これからはレベル四十一相手でもかなりの確率で命中させる事が出来ると喜んでいいる。また、四十一はエピッククエスト十六が受けられる様になるレベルでもあり、この事についてタルカスはクロス姉から色々アドバイスを受けている様だ。さしあたってはレベル四十五のPDを相手にしなければならぬので、さらなるレベルアップが必要となるだろう。

## 第五十六話・タルカス四十二ノクロス四十九に上がる

七月三日。

訓練が続いている。四人ともレベルに変動なし。クロス姉の経験値が十時を過ぎた。タルカスも九時過ぎぐらいにきている。

七月四日。

今日はワラシベクエストで塔に登る最後の日らしい。という事でわたし達もパーティーに参加して登ったが、途中のスライムを倒す五階でクロス姉が参加したパーティーがアサ魔を、タルカスがヒートボデイスを獲得し、しかもどちらもダイスで勝って手に入れたそうである。思わぬ幸運にクロス姉は苦笑していたが、それでも予備のアサ魔が増えるのは有難いと喜んでいる。

アサ魔はヒートボデイスが実装された直後に価格が二十銀ぐらいまで急落したが、その後やや反発し、現在では三十銀以上はしているようだ。価格が需要と供給で決まるという経済の原則はこの世界でも健在らしい。ま、当たり前の話なのだが。

七月五日。

クロス姉が昼過ぎに四十九に、夜十時ごろにタルカスが四十二に上がった。

いよいよあと一レベルでクロス姉は五十装備とブリザードを使える段階に入る。またタルカスは今回のレベルアップで塔の二十一階に登れるようになった。自力でフェザームーブ2…いわゆる羽2を手に入れる可能性が出てきたという訳である。ただ六月二十八日も書いた通り、羽2は最近でにくくなったので、かなり周回しないと手に入らない様子だ。

七月六日。

タルカスが新しいクエスト依頼を受けようとしたところ、進行中のクエストが多すぎると言われてしまったそうだ。なんでも聖域や東岸の繰り返し金策クエストを受けたままにして先に進んだ事で飽和状態になったらしい。破棄しても良いのだが、クエスト連動アイテムが揃っているか、あるいはあとひとつで揃うといった状態のものが多いので、破棄するにしてもアイテムをそろえて報告を済ませてからにしたいと考え、本日後片付けに入ったらしい。

「もったいないというのもあるけど、引き受けておいて途中で投げ出すというのが気に入らないのよ」

それはごもつとも。ただ、出来ればいわゆる適正レベルの時に済ませておけばこんな苦勞はしなくて済んだという気がしないでも無いが…

## 第五十七話・フラとリレ三十六に上がる

七月七日。

四人ともレベルに変動なし。ただし一段落したクロス姉とタルカスに代って、わたしとリレイヤーが久しぶりにみっちり訓練が出来たので、経験値が三時間ほど獲得出来た。出来れば今週中には三十六になってエピック十三をクリアしたいと考えている。

七月八日。

知人のスカが三十八になり、タルカスが転職クエストの応援を頼まれた。対象は岩穴のPDで、集まったメンバーの実力も申し分なかったのであっけなくクリアした。までは良かったのだが、連絡の不備で運命のPDまで行くことが一部のメンバーに伝わっていないかった。幸いにもローグ五十五の人に手伝ってもらえる事になったので攻撃力は大丈夫だが、回復役が見つからないという。

「フラ姉、行ってもらえない？」

突然のタルカスからの打診にわたしは仰天した。今までわたしは転職クエストに関わった事がない。回復に専念したとしてもレベル三十五ではちょっと難しいのではないだろうか。そういう不安があったが、ローグ五十五の人からも問題無いと言われたので、それなら。という思いで参加した。結果は成功。メンバー三人というかなり危険な闘いだったが、流石にローグ五十五の戦闘能力は素晴らしく、それほど危なげなくクリアする事が出来た。

こうしてわたしも転職クエストの参加という初の経験を得られた。この経験は是非後々生かしたいと思う。

七月九日。

わたしとリレイヤーが一时间ほどの間隔をおいて三十六にあがった。いよいよエピック十三をクリアする資格が与えられたわけであ

る。

午後はクロス姉の訓練が主体となつて行われた。スーマールでのパーティー募集に応じてオーブの鉱脈でのレベル上げに向かい、経験値がほとんど入っていない状態から五時過ぎぐらいの方向まで進める事が出来た様である。

以前にも転職間際の事として同様の問題を扱った事があるが、四十九というレベルは正念場と言つて良い。なにしろ基本的に四十装備或いは四十五装備のままなのに、相手のモンスターがほぼレベル五十前後なのだ。しかもこの五十前後のモンスターは、今のところ鉱脈の南側かシッパル湖の入り口付近しかない。鉱脈は行くまでが大変であり、シッパル湖のモンスターはメイジ職が苦手とする水耐性のモンスターが多い。どっちにしるクロス姉は苦勞している様だ。

夜になつて、わたしが塔十八階に登る機会があり、無事に鍵の製作図を手に入れる事が出来、そのままクエストを進め、エピック十五でナラクの採掘場に行く事になった…という段階まで進んだ。

七月十日。

タルカスがわたしの所属するギルドのメンバーであるメイジ職の転職クエストを手伝った。ただし今回タルカスはメイジの職別PDのみを手伝い、後日に行われる共通クエストはケースバイケースで誰か他の者が行く可能性もある。

今まで転職クエストの手伝いと言えばクロス姉が当然の様に担当していたが、八日にもある通り、これからはタルカスや、あるいは自身が転職を近々行うわたしとリレイヤーがやるという場合も出てくるだろう。

夜、昨日のわたしに引き続いて、リレイヤーが塔十八階に上り、鍵の製作図を手に入れてエピッククエストを進める事が出来た。ただリレイヤーに言わせると、一緒に登ってくれたソルジャーの物言いにややカチンときたそうだ。さらに自分の流儀が当然ながら他人

も知っているという思い込みに基づいた行動を行うタイプでもあったらしい。クエストをクリアするという目的があるので彼女にしては珍しく我慢したそうだが、エニグマ周回クエストなら間違いなく衝突しただろう、とのこと。まあ衝突しないで済んで何よりである。：そつえば、例の人物を最近見かけなくなった。ブラックリストに登録しているその人物のキャラのレベルが一向に上昇としてないところをみても、おそらくログインしていないのだろうと思う。こういう事を言うと語弊があるとは思うが、こちらとしては心安らく事実である。

七月十一日。

わたしとリレイヤーが転職間際となった事で、いくつか片付けておかなければならないクエストがある事が判明した。神々の古戦場で古代の鎧というクエストがそれだが、同じエリアでパーフェクトボーンという大型の骨モンスターと戦うというクエストも残っている。どちらも出現させる事自体が大変だが、リレイヤーとも相談してこの際だから二つともクリアしてしまおうという結論に達した。

まずは位置的にバビリムから近いパーフェクトボーンから開始。エリア南西の入り口から東に進んで最初の枝道を左に進むのだが、これは以前タルカスをして「うつつとうしい」と言わしめたほど骨モンスターが過密に沸く道である。なんとかしのいで発生地点近くに陣取ったが、これからが大変だ。とにかく沸きにくい事で知られているパーフェクトボーンである。発生するまでどれくらいかかる事か…

パーフェクトボーンは、道の途中にある巨大な斧の前に、ボーンオブディングルとの抽選で出現する。わたし達はその少し手前、X248/Y717の付近に拠点を定めた。ここは左右及び後方のモンスターから襲われにくく、前方の発生地点だけに集中出来る場所だ。ここで斧の前に沸くボーンオブディングルを倒しつつ、パーフェクトボーンの出現を待つ事となる。長い場合は一時間経っても二

時間経つても出現しないそうだが、わたし達は幸いにも三十分ほどで出現させる事が出来た。流石にその巨体から発揮される腕力にはリレも悩まされ、かなり危ないところまで追い込まれたが、それでも倒す事が出来た。

その後、クロス姉のレベル上げパーティーがあつたのでわたし達は一旦退き、昼休みになつたら鎧PDの発生地点まで回送しておこうという計画を立てたが、いざ現地にとどり着いてみると既に鎧PDが沸いていた。クロス姉のパーティー再開まで十五分あつたので、だったらもう倒してしまえと結論。こちらもやや危ない場面はあつたものの、レイヤーの奮闘でクリア。これをバビリム東のイルミナに報告して、ようやく彼女からの他のクエストを受けられるようになった。さしあたってはナラク採掘場の亀狩りだけだが、三十七になるとラビリンスのリリスクエが受けられる様になる。ヒール四が報酬であるこのクエストは、ドルイドにとってクリア必須といえるだろう。

午後はまたクロス姉のレベル上げ。最初五時過ぎだった経験値が八時過ぎぐらいまで進んだという。いよいよ待望のレベル五十も近い様だ。

## 第五十八話・クロス姉五十にあがる

七月十二日。

朝から訓練を続けていたクロス姉が、夕方、とうとうレベル五十に到達した。スーマールの訓練場所で、よりによって苦手なイビルローズを倒した瞬間に全身が光に包まれたという。なんとも言えない感慨の中、用意していた五十装備とジル盾レベル五十を装備、そしてブリザードを習得したそうだ。なおブリザードはアイスブレスと同じ水系の魔法だが、習得してすぐランク4に強化したので六百ダメージぐらいが平均になる。ウォーミングアップをかねて、まだクエストをやりのこしていたハードシエルというウルクの亀PDをソロ狩りしたそうだが、何の問題も無く倒す事が出来たという。

「ただ、これはブリザードの威力もさる事ながら、やっぱり五十装備とジル盾五十を装備した事による防御力の向上が大きな要素となっているわね。ソロ狩りではどうしても攻撃を受ける事になるけど、転倒みたいな戦闘停止スキルやクリティカルにさえ注意すれば、このレベルの敵はもう全然怖くないわ」

と、なんと頼もしい言葉を残し、クロス姉は過日に書いたわたしのギルメンの転職クエストを手伝いに行った。

この日手伝う転職クエストは、岩穴のPD相手にタルカスが前衛としてタゲを取り、運命は他の人に任せ、ラビリンスに行ったクロス姉が召還と後半の支援を行うという手順になっている。どちらも問題無くクリアすることが出来たそうだ。特に今回はタルカスが、プロボ4とヒートボディス、そしてガーディアンの奥義であるパーティー全体に防御をかけるスキル、合わせて3つの技能を初めて全部同時使用したそうで、その能力は自分でも驚く程凄かったそうだ。プロボ4は転職PD相手でもかなり長い時間タゲ保持が出来たそうで、レベルアップに連れて強化すればもっと保持力が強まるだろうとタルカスは考えているという。



「ただ、いくら頑張ってもス力職やメイ職にタゲが移る事は有り得るし、ガデ奥義の発動のタイミングもその瞬間を狙った方がよいかもしれない。まだまだ覚えなければならぬ事が多そう。まあ、覚えた時は嬉しいから、それを楽しみにしているんだけど。とにかく転職PDとの対戦はもう少し場数を踏みたいと思ってる」

さすがに前向きな性格である。

## 第五十九話・フラとリレ三十七に上がる

七月十三日。

クロス姉が当面の目標としていたレベル五十に達したので、家族会議の結果、今後しばらくはわたしとリレイヤーのレベル上げを最優先にさせて貰う事で合意した。ただし鉷脈でのクロス姉のソロ狩りの可否の検証や、タルカスのフェザームーブ2の取得など、まだ二人にも早急に解決すべき課題が残っているので、それについては状況に応じて時間を取る事にする。

七月十四日。

わたしとリレイヤーの訓練が主体。一日みっちりやったおかげで、経験値のゲージが全く上がっていない状態から、八時の方向付近まで上げる事が出来た。

時間を見計らってクロス姉に交代。残っていた反射池の沼地のワーム四十五を狩るクエストをクリアした後、いよいよオーブの鉷脈でのソロ狩りを開始。流石に厳しいそうだが、相手が沸くタイミンがやヒットアンドアウェイのルートさえ間違えなければ十分に可能との事。

「五十二ぐらいになれば、さらに奥の石碑付近まで進んで亀狩りをしようと思ってるの。風のオーブ中級の原石を沢山出して貰ってわたしの装飾スキルで生産し、わたし達姉妹で使える様にならないからね。」

なるほどそういう意図があるわけか。大胆だとは思いますが、確かにそうなれば有難い。

七月十五日。

夜、わたしとリレイヤーが約一時間ほどの差で三十七にレベルアップした。エピック十五のクリアと転職クエストが受けられるまで

いよいよあとひとつである。ただし、その前にリリスクエをクリアする必要があるそうだが。

本日のメインテナンスで、先日五十になったクロス姉が高級オイルを三本手に入れる事が出来た。それを使って早速タルカスの白剣を+5から+7に強化したところ、攻撃力が九十から九十八に上がったという。レベル四十の片手武器としてはかなりの威力だろう。実際に試してみたところ、与えられるダメージが一撃につき十ないし十五平均上昇したそうである。

## 第六十話・フラジャイル転職クエストに挑む

七月十六日。

わたしとリレイヤーの訓練が最優先で行われ、経験値は今日の時点で十時半まで来た。出来れば週末に転職クエストが出来ないかと考えている。

七月十七日。

夜遅く、わたしの経験値がほぼ満タンになっていた時点で、所属ギルドの塔高層部パーティーが催行される事になったと連絡が来た。二十階〜二十三階を何度か周回するというので、その途中で一度だけ、わたしのエピック十五をクリアするための十五〜十九階に行つて貰えないかと打診。運良くギルドメンバー及びギルド外から参加していたメンバーからも快諾を得たので、一層のレベル上げにまい進する。

午後十時半ごろにようやく三十八に上がったので、そのままナラクに戻つて採掘場の長老からクエストを受け、そのまま塔に引き返してパーティーと合流。わたし自身としては初めて登った十九階に多少手間取りながらも、なんとかクエストを行う石碑に到着。メンバーに礼を述べた後、再びナラクに戻つてエピック十五を完全に追えた。

ちょうどナラクにいた知人の転職組と連絡が付いたのはその時点で、空中神殿まで同行してくれるという。ご好意を有難く受けラビリンズに進む。だが、クロス姉やタルカスが転職した頃とは違って、途中でレベル五十六や五十七のモンスターがいる広場などが存在する。それらはノンアクティブ、つまりこちらから手を出さない限り襲つてはこないが、その恐ろしさや威圧感が軽減される訳ではない。いつか戦う日がくる事を考えれば尚更である…

夜中すぎ、空中神殿に到着。クロス姉やタルカスから話だけは聞

いていたが、目の当たりにしたその光景は実に荘厳である。空中というより天空と言った方が合いそうな雰囲気だ。ここで転職クエストを受け、その石碑を復活ポイントにして帰還の書を使えるようにした後、同行してくれた転職組の人と別れてナラク経由でラジャフに向かい、職別PDとの対決を受け（職別クエストの依頼NPCは職によって異なるので注意）、それをギルドのメンバーに伝えてクエストのお手伝いを依頼。色々と相談した上で、翌日の午後九時に集合してクエスト開始と決まった。

ずっと続けてきた冒険や修行の成果のひとつが、いよいよ明日、形となって表れる。

七月十八日。

ついに転職クエストをクリアした。何とも言えない感慨がよぎるが、まず経緯を記述する。

午後九時、ギルド内で募集したメンバーであるログプリサラの3人に古戦場の石碑に来て貰い、出発。ガデ職の人がやや遅れて到着したので途中でいったん止まって合流。職別PDのメイスオブオーディアルの現場でさらにログ職の人と合流し、難なく倒す。さすがである。メンバーが岩穴に移動する間、わたし自身は跳躍の書でラジャフに移動して神官に報告。さらに帰還の書で空中神殿に移動して「進化の兆し」クエストをクリアしてから岩穴に向かう。ここでログ職の一人がパーティーから分かれて運命に偵察に行ったが、それでもギルドの転職組のメンバーの力量はいかなく発揮され、こちらで用意したキャンドルを使う間も無く倒してしまった。

ここでわたしが帰還を使って神殿に報告に行き、さらに跳躍で運命の石碑に向かったが、その途中で運命に先行していたログ職の人から、先客がいるので合流交渉を行い快諾してもらったと報告があった。というよりその人はメンバーがうまく集められなくてやや困っていたそうなので、それならラビリンズまで一緒に行きましよう

と申し出、合流する事となった。

運命では先行していたログ職の人が中心となってPDを倒した。合流した人とともに帰還で報告に行き、そのままラビンスに移動。いよいよソウルオブラビンスとの対決である。クロス姉やタルカスと違ってわたし自身がこのPDと戦うのは初めてであり、おそらくは回復に専念するしかないだろうと決めて戦闘開始。この判断は正しく、もうひとりの回復役であるプリ職の人の活躍もあって一人の死者も出さずに倒す事が出来た。

こうして転職クエスト最後の難関をクリア。メンバーに感謝の意を述べてから神殿に報告に行った。ここで転職先を決める訳だが、これについては後でも構わない事になっている。ましてレベル四十にならなければ実際に転職する事はできないから、その間に色々考えても良い。ただし、わたしは既にハイプリーストになる事を決めていたので、躊躇無く選択した。まあ、わたしにはシャーマンは似合わないと思う。戦闘はクロス姉やレイヤーに任せた方がはるかに適任だろう。

この直後、ギルドのメンバーの一人の別キャラであるドル職の人が、エピック十五クリアの為十九階に登りたいと連絡があった。職がかぶるので代りにタルカスに行ってもらったのだが、途中でそのクエスト該当の人がログアウトしてしまった。最初は異常終了か何か、だったら再起動すればすぐ戻るだろうと思っていたが、いつまで経っても戻ってこない。もしかしたらマシンのトラブルかもしれないと話し合い、時間を決めて待つてみて、それでなければ普通に十九階の工二を解いて終わろう、と結論したそうだが、結局はその時間に戻ってこなかったという。まあ、後で説明があるだろうから、という事で解散したそうである。

七月十九日。

昨日の塔パーティーで落ちたまま帰らなかった知人から連絡があ

った。停電だったそうである。当人は平謝りだったが、まあ不可抗力だし、もう一度のぼれば済む事なので、早速その場でギルドで呼びかけてメンバーを揃え、エピック十五をクリア…と素直にいけば良かったのだが（笑）。

今回もタルカスに頼んで塔に行ってもらった。無事に十九階にたどり着き、クオックスも倒して石碑に到着…ところが知人の口から出たのは、「あれ？」という、あきらかに想定外の出来事が発生した時の声である。どうかしたのかと尋ねると、石碑が反応しないという。粘土板を持つてるかどうか尋ねると、かなりパニック気味の様子を表した。どうやらエピ十三の終りか十四の初めあたりまでしか進めていなかったらしい。パーティーのメンバーが全員のけぞりながら、とにかく待つてるから急いでクエストを進める様に言うと、慌てて塔から出てクエストを再開した。まあよくある話ではあるが、エピ十四付近はラジャフからナラクへとせわしなく往復しなければならぬので、ウイスプが出る時間までに間に合うかどうか問題である。「うわー、焦る！」とパーティーチャットで叫びながらも着々とクエを進め、なんとか間に合って石碑にたどり着き、一件落着となったという。

七月二十日。

知人から連絡があり、タルカスが熱望していたフェザームーブ2を安く売ってもらえる事になった。これでタルカスもいよいよウルク以降を自由に走り回れると喜んでいいる。わたしもリレイヤーも四十になれば必要になるので、今から手に入れる様に頑張らなければ。この日は、この知人と塔に登る事になり、メイ職がいなかったのでクロス姉が行く事になった。残念ながらフェザームーブ2は出なかったものの、十八階でヒーリングオーブが出てダイスで手に入れる事が出来たという。早速タルカスのホワイトソードに装着してみると、ヒットポイントとマジックポイントが増加する効果が発生する様になったという。

一昨日エピック十五を手伝った知人から、共通PDを倒すので手伝って欲しいと連絡が来た。今回は前衛の助っ人が多いのでクロス姉が手伝いに行った。ところが、岩穴はそれで問題無かったものの、前衛のメンバーが運命まで徒歩という事で、先行していたクロス姉ともう一人のソーサラー、そしてクエスト対象であるドル職の人、合わせて三人だけが運命で暇をもてあます形になってしまった。とりあえず現場に行ってみようという事になったが、着いてみたら、その場の雰囲気、もう三人で倒そうという話になってしまった。結果はクリア。ただ残念ながら全員無事とは行かず、もう一人のソーサラー四十八が死んでしまった。エリクサーで復活したが、その後ラビリンスに移動し、今度は前衛のメンバーも揃った時点で戦闘開始。見事に倒したそうである。

まあ色々手違いはあったものの、転職クエストは無事終了との事。すでにレベル四十になっていたのでその場で宮殿に報告に行き、シャーマンに転職したようだ。



## 第六十一話・リレイヤー転職クエストに挑む

七月二十一日。

今日は朝から緊急の活動禁止態勢となった。なんでも世界そのものは問題なかったのだが、その世界にわたし達が入る為の門の様な場所にトラブルが発生し、結局夕方まで入れなかった。リアル世界の学生達が夏期休暇に入った為これからかなりの人手が予想されるのにも関わらず、こんな状態で大丈夫なのだろうか：

その活動禁止態勢になる直前にリレイヤーが三十八になった。夕方になってエピッククエスト十五をクリアするためにメンバーを集め始めたが、時間も早かったため中々集まらない。それでもわたし達のフレであるレン職と、クロス姉のギルマスであるベル職、そしてわたしのギルドからプリ職（とそのプリさんの知人のログ職）が来てくれる事となり、なんとかクリアする事が出来た。そのままレン職の人がプリに変わり、回復を引き受けてもらって空中神殿までたどり着き、転職クエストを受ける事が出来たと報告してきた。わたし達四姉妹全員が転職組になれる日も、どうやらそう遠くは無い様だ。

七月二十二日。

リレイヤーの転職クエスト開始は明日或いは明後日の午後九時からとなった。本来なら今日でも良いのだが、昨日の件も考慮して本日行われた外出禁止期間の直後はしばらく様子を見る方が良いと判断したためだ。

七月二十三日。

リレイヤーが転職クエストをクリアした。リレイヤーからの報告に添って転職クエストの様子を記述していこう。

午後八時半ごろ、集合場所である迷いの森の石碑にリレイヤーが

到着。すでに助っ人のプリとエンの人が到着していた。レンの知人はこの時点でまだログインしていない。とりあえずは時間まで待つ事にしたが、八時五十分ぐらいにはガデの人も到着し、戦力は整った。相談の上、レンの知人は次の岩穴あたりから参加してもらえばよいと結論。やや早めながら出発する事とした。五分ぐらいでスカの職別PDであるダガーオブオーディアルがいる場所に到着。メンバーの実力も発揮され、難なくクリアとなった。

メンバーが岩穴に移動する間にリレイヤーはナラクに行つて報告さらに空中神殿に廻つて共通PDを倒すクエストを受け、岩穴に向かう。しかしここに至るもレンの知人はログインする気配が無い。これはどうやら来ないなと判断し、待つことをやめてクエストを進める事に決定。岩穴PDを倒して報告に行つたあと、運命の石碑でメンバーと合流して運命PDがいる場所に向かつたが、その途中で明らかに転職クエストをしようとしている三人組に遭遇した。一人はベル五十七で明らかに助っ人だとわかるが、もう二人がレベル四十の一次職である。相談の上、この二人にパーティーに入つてもらふ事とし、パーティーから外れた助っ人のメンバーは召還を担当してもらふ事になった。この運命PDの召還の相手をする必要が無くなつた事で、この戦闘もかなり有利に進める事が出来、無事にクリアとなつた。合流した二人のクエスト該当の人とともに神殿に報告に行つた後、いよいよソウルオブラピンスと対決である。

この戦闘は相変わらずだが厳しいものになった。特にリレイヤーは転職クエスト自体初めて体験するものなので、その要領も頭でしか分かつていない。どこでどう力を発揮するかを見極める事も難しかったようだ。倒すには倒したが、奥義もHBSも使うタイミングがつかめず、結局は通常攻撃に終始するという結果になったので、ブライドの高いリレイヤーは内心かなり不満だったようだ。それでも応援に来てくれたメンバーにはそんなそぶりは見せず、きちんと礼を述べて報告に向かつた。

神殿で転職先を決定する段階では、リレイヤーは迷う事なくレン

ジャーを選んだ。五月三日にさりげなく口にした決意は、いささかも揺らいでいなかった様だ。

これでわたし達四人とも、二次職に進む事となった訳である。クロス姉はソーサラー、わたしはハイプリースト、リレイヤーはレンジャー、タルカスはガーディアン。もちろんわたしとリレイヤーはレベル四十にならないと実際に転職する事は出来ないが…

## 第六十二話・フラジャイルの転職

七月二十四日。

本日から、わたしとリレが四十までレベルアップする事を最優先で進める事になった。装備も揃えなければならぬが、それはとりあえず後回しにする。ただ、諸事情で今日はあまり訓練時間が取れなかった。明日からの週末において重点的に訓練をしようと思う。

ところでこの訓練も兼ねて、わたしがリリスク工を完遂。ようやくヒール4を手に入れた。ヒール3をまだ手に入れていないので強化する事は出来ないが、それでも一度に三百以上回復させられるのは有難い。クロス姉やタルカスの話では、ウルク以降は転職したソル職でも一度に百や二百ダメを普通に奪う攻撃があるというから、ヒール2あたりではとても間に合わなくなるだろう。

七月二十五日。

朝からの訓練の甲斐があつて、わたしが三十九になった。リレイヤーはまだ三十八だが経験値が十時ぐらいに来ているので、こちらも時間の問題だろう。

七月二十六日。

引き続きわたしとリレイヤーの訓練。朝早くにリレイヤーが三十九に上がった。夕方、知人のメイジ職のエピクエ15の手伝いでタルカスが十九階に登った以外はずっと訓練が続いた。わたしが経験値十時すぎ、リレイヤーが八時過ぎぐらいになったところで流石に疲れたので、今日はこれで終了。明日にはなんとかかなりそうだ。

七月二十七日。

朝早く、わたしがレベル四十に上がった。早速空中神殿に赴いて手続きを済ませ、無事にハイプリーストに転職。ここまで来るのに

かなり時間がかかったが、過ぎてみれば短かった様な気もする。

バビリム東に戻ってプリ四十スキルのボディーアクティブーション2を購入し、早速タルカスとウルクのクレイジーブル四十との対決で試してみた。1ではどうしても足りずに途中でヒール1や2を足していたのに、2になると、転倒スキル攻撃やクリティカルが入らない限り、ほとんどB A 2だけでHP補完が出来るのありがたい。

ただ、とりあえず転職はしたものの、まだわたしも、そして近々転職するであろうリレイヤーも、まだ四十装備をロクに揃えていない。特にリレイヤーは、間接攻撃が主体となるレンジャーを選んではいっても基本的には前衛だから、この辺は早急に解決しなければならぬだろう。

## 第六十三話・リレイヤーの転職

七月二十七日・その2。

夕方、リレイヤーが四十にあがり、レンジャーに転職を済ませた。早速投擲スキルと両手槍のジャベリンを装備してウルクの四十牛で試し狩りをやってみたが、まだ慣れていない事もあって要領がつかめない様だ。

「遠距離攻撃なら、当然クロス姉が得意なんだから、色々と教わったら？」

と提案してみたが、リレイヤーは眉をびくつと動かしただけで、特に何も答える様子は無かった。まあ、考えてみればそんな事リレがクロス姉に訊く訳がない。我ながら下らない提案をしたものだと反省しきりである。

七月二十八日。

わたしの装備がまだ整っていない事を聞いたギルドの人たちからなんと転職のプレゼントを頂いた。その人達が転職した時、わたしの方からは何も渡していないのに…恐縮しつつも、有難く使わせていただく事にした。いずれ何らかの形でお返しをする事にしよう。

七月二十九日。

今日はほとんど成果無し。定期メンテナンスに加え、午後八時台に臨時のメンテナンスが二時間もあると予告されたので、これはダメだと諦め、家に戻ってしまったためだ。

それにしてもこういう臨時メンテナンスが最近多すぎる。来月実装されるという新方式のダンジョンは果たして大丈夫なのだろうか？

七月三十日。

午前中にようやく金策のメドが付き、わたしの四十装備が整った。

ただし盾とフェザームーブ2はまだなのだが、それは後でゆつくり手に入れる事にしよう…と考えていたら、わたしのギルドの塔パーティーに代理参加したクロス姉が、二十一階で羽2を手に入れたという。

「貴女の代理で行ったんだから、これは貴女のものよ」

と、ありがたいお言葉とともに私に頂ける事になった。これでウルクも自由に動き回れる。なにしろ今までは入り口付近でタルカスの回復をするぐらいしか出来ず、遠出など考えられなかったからだ。これで、わたし達の中で羽2を取得していないのはレイヤーだけになった。表面は平然としているが、内心かなり焦っている事が伺える。その日、とにかく姉妹で力をあわせ、なるべく早く手に入れようと約束する。

七月三十一日。

わたしがフェザームーブ2を手に入れる事が出来たので、試しにタルカスとのペアでウルク街道のかなり奥まで進んでみた。入り口付近しか知らないわたしにとっては未知の領域だったが、かつてクロス姉が好んで狩場に使っていた東南の橋まで進む事が出来、さらにクエスト対象であるクラサクストーンパー四十二とも初めて遭遇した。いわゆるゴースト場までは行けなかったが、話しによると相変わらずの混雑ぶりなので、どうやらクロス姉と同様、このあたりが今後のわたし達も狩場として活用する事になりそうだ。

## 第六十四話・リレの羽2習得とクロス姉の二十五階

八月一日。

リレイヤーがフェザームーブ2を手に入れた。これでようやく、わたし達四人全員が羽2を使えるようになり、レベルが問題なければほぼ自由に動き回れる様になったので、さっそくリレイヤーとタルカス、そしてわたしでウルクの東南にある橋の付近に向かい、久しぶりに姉妹パーティーを組んで牛人や骨、ゴーストを試し狩りしてみる。特に問題はなさそうだ。

一通り試し狩りが済んだ頃、ギルドチャットで悲鳴に近い愚痴が書き込まれ始めた。知人であるレベル十九の人が森でかなりイタいパーティーに入ってしまったらしい。最初はプレイスタイルが合わないのかと思つたが、よくよく聞いてみるとそのリーダーが救いたい性格のプレイヤーで、いわゆる「地雷」と呼称されるに相応しいタイプと判明した。例えばそのパーティーはソルジャー職がないのでプロボを使った引き狩りが出来ない状態だったそうだが、そのプレイヤーは知人に「修理してくるからその間に同格のソル募集しておいて」と言つたそうだ。今までもさんざん募集して応募が無かつたから仕方なくソル無しで狩りをしていたのにも関わらず、まるでピザの宅配を頼んでおいてくれ、くらいの気軽な様子で言つてきたらしい。この事ひとつとってみてもオンラインゲームの構造が分かつてないな、と感じられるが、その後報告され続ける言動も、いちいち挙げていたらキリが無いアイタタの連続だった。チャットを読んでいたギルドのメンバーからの助言で、その知人は結局パーティーから離脱し、キャラクターを代えてタルカス、リレイヤーと合流、さらにその人のフレに呼びかけてフルパーティーを編成し、仕切りなおしてウルクからラルサにかけてレベル上げパーティーを行つた。なお、リレイヤーがラルサに入ったのはこれが初めてである。



夕方、この人を通じてギルドのメンバーからクロス姉に「二十五階に登らないか」と打診があった。クロス姉はこの時点で実は二十三階までしか登った事が無かったので、経験を積む意味も兼ねて是非登りたいと返答。かくしてわたし達姉妹にとって初めての二十四、二十五階への挑戦となった。

二十階から始めて二十一階でエニグマを解き、見事にフェザームーブ2を獲得。さらに二十二、二十三階もエニグマを解いたが、こちらはバスレだったそう。

この後いよいよ未知の領域に突入。二十四階はエニグマはパスして鍵と扉だけを狙ったが、それでも周囲をうろつくゴーストをやりすごしてクリアするのは大変だった。なんとか扉にすべりこんで階上し、二十五階へと上がる。ここは、名高い二十階のモンスターが可愛らしいと思えるほどの、とんでもなく巨大かつ強力なモンスターがいる。あまり詳しく書くと後に登る方々が興ざめだろうから詳細は割愛するが、ひと言でいえばローパーの化け物である。クロス姉を含めて戦闘メンバーがこれでもかというほど死に戻りを繰り返して、ようやく倒したものの、残念ながら宝箱は出現しなかったそう。最初はクロス姉も不思議がったそうだが、同行した経験者の人の話では、出る方が珍しいらしい。

午前中に森で非道い目にあつた知人は不運の連続に見舞われた訳で、さすがに落ち込んだようだったが、この後に行われたダイスでその知人が羽2を手にいれる事が出来た。わたし達が手に入れられなかった事は残念だが、その人が手に入れたのならまあ良いだろう。

なお、わたしが所属するところのギルドの転職組のメンバーが、本日を以つてこの世界からいなくなる事を宣言した。一身上の都合という事で、復活は有り得ないという事だ。今まで使っていた装備やアイテムはギルド預かりとなり、会長の判断で処置を決めるといふ事になった。それにしても、こういう事は何度遭遇しても慣れるものではないが、まあ仕方が無いといえば仕方が無い。この世界自体が永遠という訳ではないし、わたし達姉妹がこの世界からいなく

なる可能性も無いわけでは無い。知人が今日遭遇した地雷プレイヤーぐらいでも、きつかけにならないとは言えないだろう。

もっともこれは裏返しの意味も含まれる。わたし自身が善人だなんて思っていないし、誰かを傷つけている事だっでありうるからだ（リレイヤーやタルカスに言わせれば、姉妹の中でキレたら一番こわいのはわたしだそうだ。以前彼女たちと不機嫌な会話をした後の狩りで回復をミスして死なせたのを今でも根に持っているらしい。ちなみに、彼女達に言わせればわざとヒールしなかったという。反論はしないが…）。

## 第六十五話・タルカス四十五に上がる

八月二日。

タルカスが四十三に上がった。わたしとリレイヤーの転職も済み、装備も一通り整ったので、今日から少しタルカスのレベルアップを重点的に行う事にした。少なくともタルカスがスマール丘陵地まで自由に往来出来る様になるまでは続けたいと思っている。

八月三日。

引き続きタルカスのレベル上げ。ラルサで同格相手に戦いを続け、おわる頃には経験値のゲージが八時半ぐらいまで上がった。明日か明後日には四十四になるだろう。

八月四日。

夜、タルカスが四十四にレベルアップ。盾による防御が上手くなるレベル四十四のパッシブスキルを習得したタルカスは、訓練場所をラルサから反射池の沼地の南地区にある吊り橋に移し、同格のモンスターを相手に訓練を再開した。

このつり橋は、以前クロス姉がレベル四十四と四十五の時に活用していた場所で、横沸きの可能性が少ない事と同じレベルの相手しかないという利点がある。解毒しにくい毒を持っている相手がいささかやつかいだが、これは回復さえ注意すればそれほど心配は無いだろう。

八月五日。

引き続きタルカスのレベル上げ。途中でタルカスが所属するギルドから塔に登るので同行したが、それ以外は引き続き訓練を続行。レベルが上がるのに伴って経験値の上昇も鈍くなってきている。

八月六日。

昼前にタルカスが四十五にレベルアップし、昼食を挟んでエピック十六の一環であるハイウェイマスターの討伐に出かけていった。メンバーはクエスト対象のタルカスと、わたしのギルドのメンバーであるプリ四十六、そしてクロス姉である。ただしハイウェイマスター相手に前衛がタルカスひとりでは心もとないという点から、もう一人戦闘主体の前衛を探す事とし、運良くタルカスのギルメンであるベル五十三が助っ人に加わってくれた。流石にこのメンバーだと何の問題も無く討伐に成功。さらにスマールのロイクまで行ってクエストを進めたという、あとは四十六になって塔前のウルバに話しかけ、二十三階に上ってクエスト対象モンスターを倒せばよいだけという段階まで進んだそうだ。

八月七日。

朝の訓練でタルカスの経験値が五時半ぐらいの方向まで進んだ。ただし夕方から雷雨になったため、それ以上の訓練続行を断念。

## 第六十六話・タルカス四十六に上がる

八月八日。

引き続きタルカスのレベル上げ。経験値が八時過ぎぐらいまで進んだ。なんとか明日までには四十六に上げたいと思う。

八月九日。

早朝からタルカスのレベル上げ。地道な訓練の甲斐あって、昼前によくやく四十六にレベルアップ。昼食を挟んで、午後一時からエピック十六をクリアする為の塔パーティーを結成して二十三階を目指す。わたしが所属するギルドからメンバーが来てくれて、二十階から二十三階までのエニグマも難なくクリア。幸運な事に一周目でクエストがクリア出来、さらに二十三階ではレアアイテムである印章中級の製作図まで出てくれた。

クリア出来たのでもう登り直す必要は無いのだが、どうせ集まったのなら、という事でもう一周登る事にし、そのラウンドでも二十階で花火師の心得というスキル書が手に入った。残念ながらダイス運が悪くてタルカスはどちらも手に入れられなかったが、エピック十六がクリア出来た事が最大の収穫だと喜んでいる。

「もつとも、報酬のフレーム・スラッシュ2は、はつきり言って微妙なのよね。未強化の状態でランクを4まで上げた1と威力はそんなに変わらないのに、Pの使用量がかなり高いのよ。誰かが畏スキルとか言ってたけど、その発言はあながち間違っていないかもしれない。また五十スキルのバッシュ2に期待するしかなさそうね。」  
確かに、この世界におけるソルジャー職の攻撃スキルは、お世辞にも強力とは言い難い。攻撃職とは言えないのだから仕方ないのかも知れないが…

それはさておき、四十六に上がった事で、タルカスは訓練場所をスーマール丘陵に移す事を考えているらしい。ようやく火耐性のモ

ンスターが少なくなるので、タルカスはほっとしているようだ。

## 第六十七話・タルカス四十七に上がる

八月十日。

タルカスが訓練場所をスーマールに移動させた。さしあたっては、同エリアの石碑の西側にある塩田に出没する四十六ノ四十七モンスターを相手にレベル上げをする事になる。わたしが回復を引き受けて早速試してみたが、四十七相手でも回復のタイミングさえ間違えなければ充分戦える事が分かった。この日は経験値を五時過ぎぐらいの方向まで進める事が出来た。明日は一日中訓練に費やせるので、なんとか四十七に上げてしまいたいところである。

八月十一日。

タルカスが四十七に上がった。昼頃に知人とレベル上げパーティーを組んで四十八モンスターが沸く場所に行った以外はずっとスーマールの塩田でレベル上げを行い、夜になって到達した。

「これで何とか四十七相手でも空振りする回数を少なく出来そう。いよいよこれからが本番よ。」

とタルカスは喜んでだったが、流石に素材が持ちきれなくなったので一旦バビリムに戻って荷物整理をした。ついでに途中で止っていたラジクエを進めに二人で聖域の緑プールPD場まで出かける。ガデ四十七となると流石に森から聖域にかけて出没するモンスターは敵にならず、タルカスは次々に白剣でなぎ倒して進んでいき、難なく当該NPCの場所まで到達してクエを進め、バビリムに戻る。

八月十二日。

昨日の荷物整理が途中だったのでそれを終わらせ、改めてタルカスとわたしがスーマールに向かう。行った先でわたしが所属するギルドのメンバーのプリ四十七がログ四十七と組んでレベル上げをやっていたので合流したが、そこでエピックククエスト十七を進める話

が出てくる。レベル四十七ならクエストを受けられるというので早速ロイクの居場所まで足を伸ばして依頼を受け、そのまま花PDが出る場所に向かった。ただしレベル四十のわたしは危険であるのと、ギルメンが回復を担当できるので、わたしの代りにクロス姉が援護役として同行する事になった。

到着した時はいなかったが、周囲に群れる四十八花を倒していると、運良く十五分ほどで出現した。レベル五十のデモンローズという花PDであり、流石に強かったそうだが、タルカスがプロボ4で前半近くまでタゲを維持し、ログにタゲが移った事を見計らってガデ奥義のパーティー防御スキルを発動、さらにログの人も奥義を発動し、クロス姉も全力攻撃を開始した。作戦通りに運んだ事もあってデモンローズの討伐に成功し、ロイクに報告した後バビリム西のスフヤーン、アルベラのところに行つてクエストの続きの依頼を受けた。ただし本日は週に一度のお休みの日であるため、ここで時間切れ。



## 第六十八話・タルカス四十八に上がる

八月十三日。

タルカスのレベル上げ続行。経験値のゲージが六時の方向まで進んだ。なお、昨日実装される筈だった新しいダンジョンは月末に予定が順延された。夏休みが終わる頃になって新ダンジョンを実装するという、相変わらずの運営ぶりである。

八月十四日。

タルカスのレベル上げ続行。経験値のゲージが九時の方向まで進んだ。やはり一日通して出来る休日と違って朝や昼休みにしかログイン出来ないのが進みが遅いが、その辺は仕方ないだろう。

夜になってわたしが所属するギルドのメンバーがエピックク十六をクリアするため塔二十三階に登りたいといってきたので、タルカスに行ってもらおう。クエスト自体は一回目で成功し、あと二度ほど周回をする事になったが、その二度目に入る直前、東岸やラジャフ街道などで騒乱が発生した。巨大スライムが発生していて、それを倒すと力と加護の印章最下級がそれぞれ三つ手に入るらしい。パーティー全員で向かえば宝箱の権利を確保できるかもしれないという事で、急行してなんとか幾つかのスライムを倒す事に成功。タルカスも宝箱1つを取得する事ができたようだ。近々五十装備に変更するタルカスには重宝するだろう。騒乱が一段落したので再び塔に戻ってエニグマを解く周回を行うが、あまり成績はよくなかったそうだ。

八月十五日。

昼過ぎに、タルカスがレベル四十八に上がる。流石に単調な訓練が続いたので午後は少し休憩。夜になって、わたしが所属するギルドのメンバーからレベル五十二で受けられるというクエストの手伝いを頼まれたので、クロス姉に行ってもらおう。相手は二十三階にい

る四十七モンスターで、レベルの制約上四十六に限定されるこちらは魔法が当りにくい、フルパーティーでもあったので何とか倒す事が出来、クエストも一度でクリア。

なお、昨日に続いて出ると予想していた巨大スライムは、今日はお出現しなかった。

八月十六日。

レベル上げの途中、昨日のクエストに参加出来なかったメンバーが改めてログインし、二十三階に登るための手伝いを要請されたので、連日で申し訳なかったがクロス姉に行ってもらおう。

今回は二十二階のエニグマ解読でホワイトソードが出た。現在タルカスがメイン武器として使っているレベル四十剣だが、クロス姉がこれを手に入れる事が出来た。もっともタルカスは既に持っている訳だから特に必要は無い。そこでこれを売るか必要なアイテムと交換しようという事になった。出来ればもうすぐ五十になるタルカスの装備代ぐらいにはなあって欲しいものだが…

八月十七日。

今日もクロス姉が塔に登ったのだが、またホワイトソードが出てクロス姉が手に入れた。偶然には違い無いだろうが、何か妙な気分である。ちなみにどちらも風のオーブが装着でき、発動頻度3が出て発光した。白剣が元々持っている菱形のオレンジ色の中心に、ピンク色の光が確認出来るという混合発光である。

八月十八日。

タルカスのレベル上げが続いている。四十八以降は流石に上がるのが遅いが、それでもなんとか七時半の方向は過ぎた様だ。十時ごろにまた石柱とスタンスライムが出た様だが、駆けつけた時はもう終わっていた。

## 第六十九話・タルカス四十九にあがる

八月十九日。

メインテナンス後、ラジャフ街道で「サトフルの魂」というスピリット型モンスターが多数出現。反撃はしてこないのだが、一人や二人が攻撃しても全くの「焼け石に水」状態であるため、数十人が束になって攻撃する。それでも何十分もかかるという状態だった。

しかも途中、バビリム平原と城門で大型のスピリットが出現、クロス姉があわてて駆けつけたが、既に全部倒されたあとだった。そしてかなりの大人数が移動したせいも、平原から塔周辺、そしてラジャフ街道への入り口が通れないという状態になってしまった。結局十時から一時間、臨時のメインテナンスが行われたため、わたし達はこの日は終わる事に決定。

八月二十日。

タルカスのレベル上げ。途中で同じレベル四十八の知人とパーティーを組んでテンプレーションPDのいる場所に行ったが、先客がいたため花PDの場所へ移動。到着した時に既に沸いていて、それを含めて三度PDと対戦。そのおかげもあって経験値がEからXのところまで来た。おそらく明朝には上げられるだろう。

八月二十一日。

朝早く、タルカスが四十九に上がった。スーマールではもう上がりにくくなるので、夕方からオーブの鉱脈に入り、入り口付近でレベル上げを開始する。相手はインフェルノシードというスピリットとレッドガーストというバンパイア。どちらもレベル四十八と四十九が抽選で沸いてくる。レベル上げの効率に加えてクエストもあるので、出来る限り四十九を相手にしたいところだが、四十九だけを相手にしたければもう少し奥に行かなければならない。タルカスだ

けではまだ力不足なので、この辺は自重するべきだろう。

## 第七十話・タルカス五十にあがる

八月二十二日。

鉾脈でタルカスのレベル上げ。ただし諸事情であまり時間がとれず、経験値が四時の方向から六時の方向までしか上がらなかった。なお、塔二十二階で獲得した二本の白剣が露店で売れたので、タルカスの五十装備の資金が確保出来た。

八月二十三日。

鉾脈でタルカスのレベル上げ続行。途中で知人のログと逢う。奥に進むという事でついでに便乗し、まだ行っていなかったエピックククエスト十七の三色オーブの鉾脈に行きクリア。

八月二十四日。

午後になって、ついにタルカスが五十に到達した。これでクロス姉と並んだ事になる。早速バビリムに戻り、五十防具を購入して装備。さらにクロス姉が使っていたジル五十盾を譲ってもらう。さしあたりクロス姉はパーティー戦闘では四十五の青盾を使う事になるが、ソロではジル五十盾、もしくはそれに相当する防御力のある盾が必要となる。この点は何とかしなければならぬだろう。夕方にはバビリムとラジャフを往復し、エピッククエスト十七をクリアしてバッシュ2を手に入れる。これはかなり評判の良いスキルらしく、先達のガデ諸氏も強化を薦めているので、タルカスも早速強化した。夜になって、タルカスはわたしが所属するギルドのメンバーとともに塔二十五階に上った。混沌の血を集めるというのが主目的だが、初めての二十五階で流石に戸惑っていた。

「それでも何とかクリアしたけど、何度かのぼらないとタイミングをつかみにくいわね。もし予定通り今週サキュバスが実装されれば、二十五階はかなり頻繁に登る必要があるでしょうから、少し馴れて

おかないと」

とタルカスは決意を新たにしていた。もっともサキユバスが本当に今週実装されるのかどうか、まだ何とも言えないのだが…

八月二十五日。

今日からタルカスが訓練場所をシツパール湖の入り口付近に移した。「ホツとしたわよ。鉾脈は火耐性のモンスターが多いから、これだよやく抜け出してフレイムスラッシュを活用出来るもの」

とタルカスは喜んでいる。なるほどと納得。逆に氷魔法が得意なクロス姉は、シツパール湖を苦手としている。職種によってやはり色々たそいう事は異なるのだろう。

それにしても、ようやくわたし達姉妹の中からシツパール湖を主戦場とする者が現れた…というのはなんと難しい気持ちになる。

二月十八日にシツパール湖が出現した時にわたしが代表して様子を見に行き、ここで戦う様になるのはいつの事だろう、と感慨を得てからほぼ半年。ようやくこの日がやって来たのだ。

八月二十六日。

タルカスの訓練続行。とにかくレベル五十一にして、当面の相手に攻撃が当り易いようにする事を目標にしている。途中でタルカスがギルドのメンバーのクエストを手伝うためエルブルズの岩穴と黒のオベリスクに行った以外はシツパール湖での訓練が続く。

なお、予想していたサキユバスの実装は無かった。ただし臨時メインタナンスが来週の月曜日にあるそうなので、ここで実装される可能性は高い。

## 第七十一話・タルカス五十一に上がる

八月二十七日。

夜になって、シツパル湖で訓練を続けていたタルカスが五十一に上がった。

記念すべき日もかもしれない。わたし達四人がこの世界にやって来て以来、初めてタルカスが最高レベルに位置する状況になったのだ。たったひとつとはいえ、タルカスがクロス姉をレベルで上回った事に、各人は色々と思うところがあるらしい。タルカスは当然喜んでる。ああいう真つ直ぐな性格だから喜び方も遠慮が無い。それを見たクロス姉は「おめでとう」と言っただけで、内心どう思っているのかは分からなかった。逆に、あからさまに悔しがつているのがリレだ。ちなみにわたしは、戦略的にも戦術的にもガデがレベルを上げるのは都合がよいと考えているので、特に何か気にするということはない。

いずれにせよ、これでタルカスのレベルアップは一段落である。これからはわたしとリレが優先的にレベルを上げる事になっている。並行してクロス姉も鉾脈での狩りがしやすいように五十二までは上げようと考えているそうだ。

八月二十八日。

今日からわたしとリレイヤーのレベル上げを優先する事にした。全員がレベル五十を上回るのが当面の目標だ。

ところで、タルカスやクロス姉の所属するギルドに最近新人さんが増えてきてにぎやかになっている。特にタルカスの所属するギルドはギルマスが極めて社交的な人物で、そのスカウト能力は特筆すべきものがあるため、ここ最近に限っても十名近い増員があったようだ。その中の何人かはレベル上げや知識の獲得に熱心で、タルカスも教えられる事は教えたいと意欲的である。まあ、あの娘が教官

役など務まるのかどうか微妙なところだが。

八月二十九日。

わたしとリレがレベル上げを再会して二日目。今日は土曜日という事もあって狩場が混雑しており、レベル上げは思うようにできなかった。したがってレベルは依然として四十のままだが、それでも経験値はかなり伸びてきている。わたしは五時ぐらいの方向だったのが八時過ぎの方向まできたし、リレも同様の経験値を獲得した様だ。

レベル上げが出来なかった分、タルカスが塔に登る機会があった。タルカスの所属するギルドに所属するベル五十三が、塔二十五階に行った経験が無いというので、わたしが所属するギルドのメンバーに頼んでタルカスとともに登ったのである。二十五階は近日中に実装される(らしい)サキュバスの窟の探索に必要なものが手に入れやすいので、レベル五十以上のプレイヤーは今後かなり頻繁に登る機会が増えるだろう。それを踏まえてベルさんに登ってもらったのだが、結果は上々だった様である。

ついでに二十階以降からエニグマを解きながら登るようにしたら、二十一階でフェザームーブ2が出て、後にダイスでベルさんが獲得したらしい。何とも運のいい話だ。



## 第七十二話・フラとリレ四十一ノサキュバスの窟実装

八月三十日。

夜遅く、まずリレイヤーが、少し遅れてわたしが四十一に上がった。訓練に関しては、しばらくはわたし達二人のレベルアップを優先する事になっている。目標は五十だが、とりあえずエピック十六がクリア出来る四十六を目指す事にする。

八月三十一日。

午前九時から臨時メンテナンス。当初はその目的が告知されていなかったが、午後四時までには終わるといふ説明がなされていた。しかしその時刻になると延長に次ぐ延長。その途中でサキュバスの窟が実装されようとしているからという説明があつたが、結局この日は間に合わなかった。ようやく公開された時には、もう日付が変わって午前一時半を過ぎていた。

九月一日。

夜中にサキュバスの窟が出現。わたし達も早速入ろうとしたが、その過程で、溜めておいた混沌の血がリセットされていて、また集めなおさなければならぬ事が判明した。直前までの苦労を水の泡にされた事も不満だが、それ以上にサキュバスは不満だらけである。内部が不安定でクロス姉などは世界そのものから突然追い出され、あわててログインしなおしたら塔の様にパーティーに再合流する事も出来ない。さらに手に入れるアイテムの多くが、いわゆる「未鑑定」の状態なのだが、それを鑑定してもらうのに金がいる。何段階かの鑑定レベルがあるが、使い物になるのは「上位鑑定」より上のレベルで、上位なら五銀を支払わなければならない。十個鑑定を頼めば五十銀である。とてもやっではいられないというのが正直なところだ。

一通り様子が分かったわたし達は訓練場に戻ったが、夜明け前に窟に不具合が発見され、結局は入れ口にあたる人物がいなくなってしまうという状態になったそうだ。また、出たアイテムがインベントリから消えたと騒いでいる者もいた。

さて、訓練場に戻ったら戻ったで、別の問題が生じている事が分かった。モンスターが体力を自動回復する様になっていたのと、命中精度がいきなり悪くなっていたのである。

「同格のモンスターなら攻撃ミスなどそれほどなかったのに、かなりの確率で当たらない事が多いのよ。しかもわたしが与えたダメージ二回分ぐらいを簡単に回復してしまうようになった。もううんざり」  
日頃はのほほんとしているタルカスが、眉間にしわを寄せて不平を口に出している。だが、口には出さないものの、クロス姉はもっと深刻だろう。メイジ職はソロ狩りの場合、特に序盤において一度でも攻撃を外されたら致命傷になりかねない。

こんな状態では同格のソロ狩りなど到底出来るものではない。言い換えればパーティー戦闘でなければやりにくい世界になったと感じられる。だがログイン時間などによってパーティーが組みにくいものはどうすればよいのだろうか。

夜中近くなつて、今度は塔にも異常が発生したという報告が入った。もうどうにもならない状態なのかも知れない。

九月二日。

今日は定期メンテナンスの日で、塔の不具合及び武器の攻撃力が実際のダメージに反映されないという問題は治ったようだが、サキュバスは相変わらずで、二〜三時間入れるようになったかと思うと、すぐに不具合が発覚して入り口の調査隊長がいなくなってしまうという状態が繰り返し返されている。特に手に入れたアイテムが消失するという問題は深刻だろう。

誰かが言っていた通り、サキュバスは実装出来るレベルではないのかも知れない。そういう事なので、サキュバスはしばらく様子見

とし、現在はわたしとリレイヤーのレベル上げを続行している。

## 第七十三話・フラとリレ四十二にあがる

九月三日。

今日は久しぶりにクロス姉が以前からの知人とパーティーを組んでレベル上げを行った。一昨日に書いた通り、個々の攻撃は命中精度が悪くなったが、同時に格上の相手でもそれなりに攻撃が当たる様になっているので、フルパーティーを組めば相当格上の相手でも戦える。実際にクロス姉が参加したパーティーは全員五十と五十一で、それで五十五と五十六のモンスターを相手にしてもかなり戦える。調整前ならありえない状態だ。そういう訳でクロス姉の経験値は5時半ぐらいだったのが八時半ぐらいまで進む事が出来た。

九月四日。

サキュバスは相変わらず不具合が続いているので、わたしとリレイヤーのレベル上げを行う。

九月五日。

午前中、知人のエピック九と十を手伝う事になった。メイジ職である事と、途中でのクエストもクリアしたいという事なので、タカスが同行して、以前からクリアしたいと言っていたラジクエをついでにやってしまう事になった。一階から十三階まで連続で階上する経験はクロス姉が以前やった事があるだけだが、ひとつひとつの階そのものは既に攻略方法が分かっているので、知人のエピッククエストともども、特に問題なくクリア出来た。

ただ、それとは別の問題があった。その塔パーティーは知り合いが主体となって結成されたのだが、そのメンバーとの間に嫌な雰囲気生まれってしまった。クエストをやっている知人は、普段からそのメンバーにいじられやすい性格をしているのだが、今日に限って

いじりがやや執拗かつ陰険で、どちらかというといじめに近い状況になってしまった。最初は我慢していたものの、ついにキレた様子で言い返すようになりはじめ、続くエピソードも結局はタルカスと二人で行く事になった。ガデ五十一のタルカスにとつてババ三十五の相手は造作も無い事だったから別に構わないのだが…

この世界にいと、時として相手キャラの後ろに同じ人間がいると実感しにくくなる事があるのは確かだ。だがそれは場合によっては許されないこともある。色々異論もある様だが、わたしは基本的に、この世界における会話で敬語は外さないし、よほど親しい相手でない限り礼節を欠いた物言いでは話しかけられるのも好きではない。よほど目に余る場合でなければ放置しているが、相手にそういう言動が見て取れるたび、わたしの中でその相手の評点は少しずつ下がって行っている。

午後からはわたしとリレのレベル上げ。わたしの経験値は九時を過ぎていく。明日ぐらいにはレベルがあがるかも知れない。

九月六日。

午前中、わたしとリレイヤーが四十二に上がった。これで二人とも二十一階に上る事が出来るようになったので、出来れば早く登って自力でフェザームーブ2を手に入れたいと思う。

午後から、クロス姉のギルメンであるドルイドが転職クエストのメンバーを募集していた。クロス姉の所属するギルドで転職クエストに対応出来るメンバーが来ていなかったためシャウトしていたのをたまたま聞きつけたので、わたしの所属するギルドのメンバーに呼びかけてみると、パーティーのメンバーに必要な以上の人数が集まった。お陰で召還モンスターにも楽に対応出来、転職に該当するギルメンは無事にシャーマンに転職できた。何よりである。

## 第七十四話・タルカスのギルド設立奮闘記

九月七日。

「ちよつと大変な事になりそう。」

タルカスが、いつになく深刻そうな面持ちで、わたし達に相談を持ちかけてきた。

「どうかしたの？」というわたしの問いかけに、タルカスは小さく頷きながら説明し始めた。

「実はあたしが所属しているギルドだけど、リーダーがロゲインできなくなってしまったの。」

「え、また何で？」

「詳しくは言えないんだけど、その人にとってはちよつと冗談にならない理由なのよ。それでとにかくギルドは入会希望者の手続きもギルドウィンドウのメンテナンスも出来ない状態が続いているという訳。」

「それって機能停止に等しいじゃない…あなた、たしかそのギルドのリーダーとは親しいって言ってたでしょ。連絡は出来ないの？」

「あたしは出来ないんだけど、もうひとりの高レベルメンバーが連絡が取れるらしいのよ。で、その人から事情を聞いて、どうやら近日中に戻ってくる可能性は限りなくゼロに近いと思っただけ。」

「ふうん…で、どうするの？」

「その、連絡が取れるというメンバーからの提案で、新しいギルドを作ってアクティブメンバーがそこに移行するという事になったの。」

「新しいギルド？」

「うん。実はもう設立用の旗もあたしが手に入れた。あとはメンバーのコンセンサスを得て設立しようと思ってる。」

「あなたが旗を？　という事はあなたがリーダー？」

「そう。とりあえずそういう事が出来そうな者で最高レベルである

あたしが初代リーダー。あとで交代するかもしれないけどね。」  
「でもさ」今まで黙ってきいていたリレイヤーがタルカスに問いかけた。

「わざわざ新しいギルドを作る必要がある訳？ 設立メンバーにしたってそんなに数が多いわけじゃないでしょ？ だったら既に運営実績のある別のギルドに入ればいいと思うんだけど…」

「いえ、それはやめた方がいいわね」反論に応じたのはクロス姉だった。

「そういう理由で任意の集団に一斉に入団すると、必ずと言ってよほど派閥が形成されるの。政党なんかを見てると分かるでしょ？ あれ程極端ではないにしろ、元のギルドのメンバーだけで集まる傾向が出て、ギルド自体の指示・連絡系統が統一しにくくなると思う。」

その言葉にリレは完全には納得していない様だったが、言っている事は理解出来たらしい。わたしもほぼ同意見である。小規模にせよ独立したギルドを作って、あとは友好協定の様な形で付き合えば良いのだから。

「まあ、とにかく設立はするつもり。出来る限り頑張ってみるわ」  
そう言ってタルカスは何かを決意した様な笑みを浮かべた。考えてみると末っ子の彼女が、いつの間にかわたし達の中で一番レベルが上になり、最初にギルドを設立するという経験も得ている。その意欲はたいしたものだと思う。ただ、猪突猛進を信条とする彼女が、あまり張り切りすぎてつまづかないかという一抹の不安はあるが…

九月八日。

昨日のタルカスの件だが、どうやらギルドのアクティブメンバーからも同意は得たらしい。話し合いの後、タルカスは早速退団した。三日間のギルド加入制限期間が終わり次第、ギルドを設立する様だ。

九月九日。

タルカスが退団したギルドのリーダーと親しいメンバーが、どうやらリーダーと連絡を取る事に成功したらしい。戻ってくるかどうかはまだ何とも言えないが、少なくとも可能性がゼロとは言えない状況らしい。

「とはいっても、性急に進められる種類の話でもないのよね。だからしばらくは静観して、予定通り新しいギルドの整備を続け、いつでも戻って来られる様にしておこうと思ってる。」

まあ、そういう点においても、新ギルドの設立は受け皿として意義がありだろう。

今日は定期メンテナンスの日だが、サキュバスは相変わらずで、午後四時に再開して二十分ほど入れなくなってしまった。もはや周囲も諦めかかっている様子である。公式サイトで告知された人気投票で三位になり、新しい人たちが入ってくる可能性が生まれたのに、逆に悪評が広がりつつあるのではないかと心配になってしまう。果たして今後どうなるのだろうか…



## 第七十五話・フラとリレ四十三に上がる

九月十日。

ひよんな事から、リレイヤーがドルドルの帽子を手に入れた。タルカスと同様、リレイヤーはオシャレ装備にはほとんど興味を示さない。もつともタルカスの場合は、基本のソル系五十装備が変にエロいと言われてから、何となく気にはしている様だ。が、いざかぶってみると、白を基調としたスカ系四十装備と、赤いリボンがついた麦わら帽子が不思議なほど合っている。これをかぶると髪も黒くなるし、さらにリレは、今はジャベリンという槍を持っているので、まるで避暑地で釣りを楽しむお嬢様という風情である。

「何よ、そのたとえ。まあいいわ。前から黒髪にはしてみたいと思つてたから……」

「へえ、そうなの？」

「……べ、別に、クロス姉が黒髪だからとか、関係ないんだからね！」  
そんなこと誰も言っていないのだが……（笑）

九月十一日。

朝早く、タルカスがギルドを設立した。とりあえずは九月七日に経緯を書いた旧サイトの受け皿が主な役割になるそうだ。

「でも、希望者があれば新人メンバーも随時入団させたいわね。にぎやかな方が楽しいし」

まあその通りだろうとは思うが、あまり大きすぎる集団は必ずと言ってよいほど派閥が生まれる。何事も程ほどにしておくべきだろう。

夜、わたしが所属するギルドでイベントがあつた。主催者が掲示板にスクリーンショットを掲載して、他の参加者より早くその場所に行くというものだ。残念ながらわたしは当初の目処が外れて下位に甘んじてしまったが、それでもこういうイベントは面白い。タル

カスのギルドでもやってみたらいいかも知れない。

九月十二日。

わたしとリレのレベル上げ。中々進まないが、焦っても仕方がない。出来る範囲でやっていこう。

夕方、狩りを切り上げて塔周辺まで戻ったら、十九階のエピッククエスト十五をクリアする為のパーティーで回復役を募集するシャウトが聴こえた。知らないプレイヤーだったが、かなり切実な口調だったので協力を打診して参加したが、同じく協力参加したガデさん以外はほとんど十八階や十九階が初めてという人だったので、いささか不安を感じる。案の定、早くも十五階でつまずいてやり直しをしなければならなかったが、それでも十七階あたりから調子がよくなり、十九階では一番目と三番目のモンスターを倒して進むという安全策を採った事もあって誰一人脱落せずクオックスまで辿りついた。無論クオックスとの初対戦も初めてという人がいたが、戦いはかなりスムーズに進んだ。メイジ職の人がクリティカルで一度死んだもののエリクサーで復活、クオックスを倒して奥の目的地にたどり着き、エピ十五はクリアとなった。

なお、十八階のエニグマでアップリフトオーブが出てダイスでわたくしが手に入れる事が出来た。うまく装着すれば出血のデバフが発生するそうなので、ぜひ前衛のどちらかの武器に使ってみようと思う。

九月十三日。

今日はタルカスがひさしぶりに塔二十階から二十三階までの周回パーティーに参加した。十周しただけあって、フェザームープ2や花火師の心得、魔晶五個など、かなり良いアイテムが手に入ったのはありがたい。

九月十四日。

わたしとリレイヤーのレベル上げ続行。途中でクロス姉が所属するギルドのメンバーからエピック9のクリアのため十二階と十三階に登るのを手伝って欲しいという要請があり、タルカスが手伝いにいった。

九月十五日。

引き続きわたしとリレイヤーのレベル上げ。

貯金がようやく三百銀に届いたので、訓練の合間をぬって、いわゆる魔素図を買おうと探している。加護の印章・下級を自分で作るためであり、いまのところ自作出来ない素材は鉄の鑄型と魔素の触媒。ただ、鉄の鑄型はブランクタブレットを作るのに必要で、加護下級に必要なブラタブは七個だから、買ってもそれほどの金額にはならないが、魔素の触媒は三十個必要なので、一個作る度を買っていたらコストが高くなって仕方が無い。まして自作となれば三十個作るのだから、生産レベルの経験値取得数もその分多くなる。以上の理由でまず魔素図を探しているのだが、これがなかなか見つからない。まあ、焦らずじっくり探すつもりだが…

九月十六日。

朝早く、わたしとリレイヤーが四十三に上がった。

夕方になって、新しい狩場「嵐の渓谷」が出現した。ただしレベル六十以上推奨という難所であり、シッパル湖の奥という地理的問題もあるので、行ってみるのはしばらく見合わせる事とする。また、人気投票で三位になった場合の公約が実現され、今日から二週間、獲得出来る経験値が二倍になった。塔が三十階まで行ける様になり、逆にサキュバスは相変わらず入れる様子がないので、しばらくはレベル上げに専念するべきだろう。

## 第七十六話・魔素図獲得とフラのエピ十六開始

九月十七日。

ようやく「製作図・魔素の触媒」を手に入れる事が出来た。三百銀は下らないだろうと思いつつ貯めていたのだが、運良く二百五十銀で出している露店を発見、購入して早速取得する。これでクリスタル五個と研磨材二個があれば魔素の触媒を一個作る事が出来るのだが、研磨材はかなりストックがあるものの、クリスタルはあまり手持ちが多くない。購入するというのも一つの手だが、レベル上げも兼ねて効率良くクリスタルを集められる場所を探す方が良さそうだ。

九月十八日。

またレベル上げ。わたしとリレイヤーが主体だが、その合間にタルカスも少しずつ上げている。レジスト設定が変化してしまったせいでクロス姉はソロ狩りがしにくい状態になっており、ある程度のメドが立つまでしばらくお休みという事になりそうだ。

九月十九日。

ウルクでハイウェイマスター討伐のパーティーを結成したいというシャウトが聞こえた。回復役の希望が切実そうだったのと、ちょうどわたしがクエストを始めていたので参加させてもらう。一旦ラルサ大地溝帯のミゲイまで行って討伐のクエストを受け、ウルク街道に戻ってハイウェイマスターの沸き場所まで行った。ただ、プリのわたしに加えてベル3とログ1という珍しい編成で、スロウやスネアといった足どめのスキルをもつメイ系がない。形勢不利になると逃げるがその場合はどうするか、といった確認をしながら小一時間ほど待っているとようやく沸いた。とにかく逃げる隙も与えず一気に叩いてしまおうという意見でまとまり、なんとか倒す事が出

来た。直ちにラルサに取って返して報告を済ませるが、この後はス  
ーマールのロイクまで行き、さらに塔二十三階に上る必要がある。  
クリア出来るのはもう少し後になるだろう。

いずれにせよ、エピックを進める事が出来たので大喜びしている  
。と言いたいところだが、実はハイウェイマスターの沸く狩場で、  
少々嫌な出来事があった。わたし達のパーティーが到着した時、ス  
カ三十九とドル三十三のペアがレベル上げらしい狩りをしていたの  
だが、こちらがハイウェイマスターの沸き場近くに陣取って抽選場  
所の牛人を狩りながら沸き待ちをしていると、後からやって来たの  
に自分の狩りの邪魔するなど言ってきた。こちらはPDしか狙って  
いないと言うと、抽選場所の牛人を狩る事も認めない、橋まで下が  
れという言い草である。明らかにイタい人種で、パーティー全員二  
の句が継げない気分になった。もう放置する事にして無視を決め込  
んでいたら、どういう具合かしばらくしてどこかに行ってしまった。  
全員ホツとしていたところにハイウェイマスターが沸き、そのスト  
レス解消も兼ねて全力でフルボッコである。

考えてみれば：一番気の毒なのは、その時沸いたハイウェイマス  
ターかも知れない（笑）。

九月二十日。

わたしとリレのレベル上げ。経験値がようやく七時前の方向ぐら  
いまで来た。

九月二十一日。

荷物整理のためにわたしが塔周辺に戻ったところ、エピック十三  
クリアの為十八に登るパーティーで回復職急募というシャウトが聞  
こえた。周回はともかくエピッククエストはなるべく手伝う事にし  
ているので応募し、久々に十五階から登ることになったが、やはり  
というか十五階で失敗してしまった。

ところが再チャレンジという時、メンバーの一人が興味深い意見

を出してきた。塔ウインドウに表示されている残り時間が「ある特定の時間」に特攻スタートすると、クオックスに出会わないで扉まで行けるといふのだ。ダメもとで試してみようという事で意見が一致してその時刻にスタートしたら、確かにクオックスに出会わなかった。つまり十五階はダツシユのチャンスが二階あるという事である。しかも二回目は十分に準備を整えてスタート出来るから成功する確率も高い。さらに言えば二度目の機会があるという事で、一回目も精神的にかなり余裕を持ってスタート出来る。こういう情報は本当に有難い。

## 第七十七話・転職クエスト手伝いの失敗

九月二十二日。

わたしとリレのレベル上げ。経験値が八時前の方向ぐらいまで来た。なお、明日から二十五日までログインできないため、レベル上げはいったんお休みである。

九月二十六日。

今日から再開。あまり時間が取れなかったが、それでも多少は上げる事が出来た。

九月二十七日。

今日から、わたしとリレイヤーがラビリンスに入った。実は、リレイヤーがリスクエをまだクリアしていなかった為、それを済ませておくためである。とはいっても相変わらずでにくい。おまけに日曜日でラビリンスも混雑している。涙は五十個必要だが、結局今日は二十二個しか集まらなかった。まあ焦っても仕方が無い。じっくり集めるしかないだろう。

夜になって、わたし達がクエをやっている場所に、転職クエ目的の三十九スカさんが来た。なりゆきで手伝う事になったが、メンバーを見るとソル系がない。

「まずいわね。ソウルオブラビリンスにタゲられたら、四十クラスでまともに耐えられるのはソル系だけだもの。まして貴女の装備は全然強化していないし……タルカスと交代してもらおう?」

どうせ承知しないとは思ったものの、一応リレに相談してみたが、案の定自分でやると言い出した。まあやるだけやってみようかという話でまとまったが、結果はボロ負け。

意気消沈しているリレを横目に、わたしはクエの該当者にガデ五十一を連れて来て再戦をしたいと提案し、受諾してもらってからタ

ルカスを呼び寄せた。来る間に召還担当のレン五十一さんが助っ人に加わり、布陣が整備されて改めて挑戦。まあ当然ながら勝利した。「この借りはいつか必ず返すからね」

意気揚々と引き上げていくタルカスの背中に向かって言ったこのセリフは、発した本人以外はおそらくわたししか聞こえなかっただろう。

九月二十八日。

リレイヤーのリリスク工続行。わたしも手伝っている。レベル上げにもなる事はなるのだが、リリス三十九や四十相手では中々レベルは上がらない。それでも二人とも、経験値はなんとか九時の方向まで上がってきた。



## 第七十八話・新しい妹達

九月二十九日。

朝の段階でリリスの涙は三十四個。相変わらずなかなか集まらない。

九月三十日。

ようやくリレイヤーのリリスクエが終了。リレはアタックスタンズ3を手に入れる事が出来た。バビリム東まで戻って報告を終えた後、ウルク街道に入ってレベル上げを開始する。

十月一日。

わたしとリレのレベル上げ。あまり時間がとれず、思ったより上がらない。

九月十七日にも書いた通り、加護の印章・下級の自己製作を進めている。赤土と研磨材は割と簡単に溜まるし、七個必要な鉄製の鋳型も購入する事は難しくないが、クリスタルが入手しにくい。狩りで手に入れようとしても、クリスタルが恒常的に手に入る獲物は限られるし、独占すると他の人から嫌がられる。なるべく人の少ない時間を選んで狩りをしてはいるが…

十月二日。

リレイヤーと一緒にラルサにレベル上げに行き、ついでにミゲイのクエストをクリアして四十四スキルであるホーリーレインを手に入れた。早く四十四になって使ってみたいと思う。

十月三日。

クリスタル集め。こういう役目はリレイヤーが得意である。スキル技なら武器の耐久値も下がらないし、レベルの高いモンスターと

は違って瞬殺出来るから防具もほとんどいたまない。とりあえず四人の防具の強化が一段落するまではこちらを優先しようと思う。

十月四日。

今までここには書いていなかったが、実はわたし達四姉妹には、下に二人の妹がいる。学術担当のディシプリン（ソルジャー）と、板金担当のメドル（ドルイド）である。といっても二人とも二十代半ばから後半で、どちらかというわたし達のサポート役をしてもらっている段階であり、メインとして動く事はあまりまだ無いのだが…

現在、このディシプリンの生産技能のレベルアップを優先させており、出来た印章は順次防具の強化に使っている。ディシプリンは魔素の触媒やブランクタブレットが作れるので生産のレベル上げは有利だが、本日、タルカスが十五〜十九階周回に参加して強化スウェードの製作図を手に入れる事が出来たので、このディシプリンに習得させて更なるレベルアップを図っている。まだ五なのでとても無理だが、十一ぐらいになればジル盾のレベルアップもかなりの確率で成功出来るそうさ。

十月五日。

今日は個人的な事情でほとんど狩りやレベル上げが出来なかった。それでも深夜になって、わたしが所属するギルドのメンバーの一人であるドルイドから転職クエストの手伝いを依頼され、ガデが必要そうなのでタルカスに行ってもらった。クエスト自体は成功したが、帰りがけ、審判の荒野でメンバーの一人が寝オチしてしまうという事態が生じた。このまま護衛していてもいいのだが、タルカス自身もかなり睡魔に襲われそうな状態で、ミイラ取りがミイラになる可能性もあるので、失礼して先に帰らせてもらうことにしたという。死んだ場合はデスペナの回復に協力するという事で勘弁してもらおうしかなさそうさ。

## 第七十九話・フラとリレ四十四上がる

十月六日。

今日からまたレベル上げ優先で訓練を始める事にする。当面はわたしとリレイヤー、そしてタルカスが、それぞれひとつ上のレベルに上がる事を目的にしている。

昨日寝オチしたメンバーはやはりデスペナに見舞われたらしい。こちらを気遣ってくれているらしく、はっきりとは言わなかったが…

十月七日。

わたしの経験値がEを過ぎたところまで、リレイヤーもEの手前まで来た。なんとか明日ぐらいには二人とも四十四にあがりたいところだ。一方、デイシプリン of 学術生産レベルが六に上がった。これで力中級以外の三種類の印章が作れるようになった。もっとも素材集めも大変になった訳だが。

十月八日。

早朝、まずわたしが、一時間程遅れてリレイヤーがレベル四十四に上がった。

わたしはこれでホーリーレインという攻撃魔法を習得し、一方リレはコームマインドという、いわゆる遠距離使用可能なヘイトダウンを手に入れた。どちらもまだまだ使う機会が巡ってきていないのだが、そのうちテストしてみようと思う。

## 第八十話・タルカス五十二に上がる

十月九日。

レベル上げ。タルカスの経験値が九時近くまで来ている。わたしたちが優先だったためタルカスはしばらくレベル上げが出来なかったが、それでも少しずつは上げていた。五十二になると新たなクエストも発生するそうなので、ここでタルカスのレベルを上げる様に頑張ってみても良いかと思っている。

十月十日。

クロス姉がシャウトで募集していたスカさん二人とソルさん一人の転職クエストにお手伝いとして参加して、ちょっと面白い事があったようだ。手伝いはサラ五十のクロス姉と、もうひとりログ五十二人の人だったのだが、基本的に徒歩で森、岩穴、運命、ラビリンズと廻ったそうだ。ところがそのログさんと一緒に岩穴から運命に移動する途中の聖域で、フォレスト・ソウル、つまりスピリットPDが行く手に立ちはだかったので、行きがけの駄賃で倒したところ、ピジョンオブソウルという、いわゆるドクロ杖というレアアイテムが手に入った。

売れば百銀前後にはなるものだが、何分にもわたし達姉妹も初めて手に入れたものだし、それにデザインも中々凝っている。売るのはいつでも出来るから、誰かに持たせようという話になった…とは言っても後衛用二十五武器なので、わたしもクロス姉も今さら必要では無い。色々と話し合った末、最近あらたに加わったモデルに装備させる事にした。現在彼女は丁度レベル二十五だし、ショートツインテールの髪型も、可愛らしさと怖さを兼ね備えている。これでゴスロリの黒服でも着たら似合うだろう。

十月十一日。

再びレベル上げ。タルカスの経験値が十時くらいまで来た。明日も休みなので、少し頑張って一気にレベルアップさせようと思う。

十月十二日。

昼少し前に、タルカスが五十二にレベルアップした。これで五十二クエストが受けられるが、鉾脈の亀PDを倒す必要があるので、しばらくは棚上げになるかも知れない。なにしろ前衛にとって亀は鬼門である。

午後から、わたしが以前から放置していたラジオクエをクリアしようというシャウトが聞こえた。タルカスのレベル上げも一段落したので参加してみる事にするが、相変わらずあっちに行かされたりこっちに行かされたりで、面倒この上ない。それでも初めて組むメンバーがなかなか好感の持てるひとたちばかりだったので、楽しくクリアする事が出来た。

## 第八十一話・加護の印章の完全自主製作化成る

十月十三日。

クロス姉の装飾生産レベルが6に上がった。早速レベル6対応製作技能を修得したようだ。

「特に有難いのは、闇のオーブ下級と女神の装飾が作れる様になった事ね。」

「凄いいじゃない。うまくやればガデ四十武器のホワイトソードも自作出来るんでしょ。」

「そうね。ただホワイトソードに関してはタルカスはもう持つてるし、売り物にしてはコストがかかりすぎるから、こっちはあまり用は無さそう。むしろ闇のオーブ製作技能の方が重宝だと思う。ただこちらも材料がかかるから簡単に作れそうに無いわね。中でも問題なのは鉄の鑄型。」

「やっぱりそれか」と頷きあう。クロス姉の装飾にせよディシプリンの学術にせよ、必ずと言って良いほど鉄の鑄型は必要になってくる。現物を買ってもよいが、これだけ頻繁に需要が発生すると、やはり自作したくなってくる。塔十七階で製作図は出るそうだが、それが如何にレアかは製作図の価格が物語っている。いずれにせよ、何とか手に入れたいものだ。

十月十四日。

レベル上げ続行。わたしの経験値が五時半ぐらい、リレイヤーも五時過ぎぐらいまで上がってきた。

十月十五日。

タルカスが「初めて」という体験をしたと報告してきた。

この日、たまたま塔付近を通りかかったら、エピソードクリアの為に十九階に行くパーティーを結成している最中でソル職一人募集、

というシャウトが聞こえて来たそう。十七階以降の工二もやるという条件に加え多少時間があつたので協力する事にしたが、ク工該当のスカさん（まだ転職した事が無いプレイヤーさん）を含めて塔は不慣れというプレイヤーが多いパーティーと判明。これは少し手こずりそうだな…というタルカスの予想通り、十五階は一度やり直しがあつた、十七階は結局外周工二が失敗した。

そして十九階。通路を駆け抜ける事には成功したものの、クオと対決を始めた途端、回復のドル職がどういふ具合かヒールをもたつき、タゲが来たスカ職二名とメイ職一名があつたという間に倒されてしまい、残りはタルカスとそのドル職だけになつてしまつた。こりやダメかなと思いつつも、とにかく目の前に敵がいる以上は戦つたというのが戦士の本分であり、倒されたら倒されたで仕方無いと覚悟し、とにかくクオに向かつて剣を振り下ろし続けた。言うまでもなく一撃ごとのダメージは大きい、幸か不幸か致命傷には至らず、また回復職の人も汚名返上のつもりか全力でタルカスにヒールをし続けている。

こうなると、タルカスもクオとのタイマンという図式が面白くなり、やれるところまでやってみるかと思つた。何度か死ぬ寸前まで追い込まれながら回復が一瞬間に合つて持ち直す…そんな事を続けているうちに、クオのヒットポイントが少しずつ削れていく。ギリギリの攻防が続く、もう限界か…と思つたところでようやくクオが倒れてくれた。工二は間に合わなかつたもの。その直後に戻つてきたスカ職の人にエピ十五をクリアしてもらい、ようやく解散したそう。

「へえ、そりや大変だつたわね…でも、どうせ工二は間に合わない事はわかつてるんだから、仕切りなおして全員がスタートしなおし、クオをひきつけてる間にスカ職さんにエピをクリアしてもらつた方が簡単じゃない？」

「うん。その通りなんだけど、それは倒されてからでもいいと思つたの。それと、さっき言つた様に十九階が不慣れな人が多かつたか

ら、クオのところまで来るのも簡単じゃないのよね。事実、一度死に戻ってからクオのところまでたどり着くのに凄く苦労している様子だった。そんな風に色々と選択肢を探ってる間にクオを倒すという結果になってしまったというわけ。」

確かに突発事態に際しては臨機応変に対処する必要があるだろう。ああすれば良かった、こうすれば良かった、と後から言うのは実に簡単だ。わたしもその辺は分かっていたつもりなのだが…

「とにかく、クオとのタイムマンなんて本当に凄い体験だったわ。もう二度としたくないけどね。回復職の人さえしっかりしてくれれば、こんな苦労はしなくてすむし」

はいはい、肝に命じておきますよ。まったく、言う様になったわね…

十月十六日。

あまり時間はとれなかったがレベル上げは続けている。わたしとリレイヤーの経験値が六時近くまで進んだ。

十月十七日。

今日は幸運だった。タルカスが知人の転職クエを手伝ったのだが、まずエピック十五をクリアするために塔十九階に登り、その途中の十七階でエニグマをクリアした。出たのはなんと鉄の鑄型の製作図。先日から度々日記に書いていたやつであり、しかも手に入れる事が出来たのだ。早速ディシプリンに習得してもらい、鉄とブロンズがそれぞれ五個あれば自作出来る様にした。これで様々な生産に必要な鉄の鑄型をいちいち購入しなくても済むようになった。魔素に必要なクリスタルと違って鉄とブロンズなら素材としても手に入れやすいから、その点においてもありがたい。

これで、加護の印章に必要な素材は全て自己調達出来る様になった。姉妹みんなの防具の強化に向けて頑張ろうと思う。



## 第八十二話・フラジャイルのギルドリーダー就任

十月十八日。

わたしが所属しているギルドで搬送イベントの計画が進んでいる。どういふものかという点、転職している高レベルのPCが、ラジャフから運命の入り口にいるニヤルガ付近まで、いわゆる適正レベルのPCを連れて行くというものだ。例えばレベル二十三付近のPCは聖域で狩りをする効率が良いが、徒歩でそこに辿りつくためには、いわゆるババロード（森の北にある、フンババが大量にいる通路）を通らなければならない。ここはかなりの難所で、その為少人数では聖域に行くのが難しい。こういった人たちを支援するのが目的で、わたし達の経験からしても、有難い事の上無いと思うが、まだ企画段階で、しかも方法についてまだ調整が必要そうである。

十月十九日。

タルカスとクロス姉がスマールに実装された新しいクエストを受けに行ったそうだ。なんでもサソリ四十七を五十匹倒すというもののだそうだが、どうもそれだけで終わるクエでは無いという噂である。ただ、報酬はかなり良いという事なので、わたしも四十五になつたら行ってみようと思う。

十月二十日。

今日は狩りの時間がとれず、レベル上げもあまり進まなかった。わたしとリレは大体六時半ぐらい、タルは四時少し前といったところだ。

十月二十一日。

印章を作る様になってから、大量に必要な素材がいくつも出来てしまい、調達が大変である。

例えば加護の印章・下級はブランクタブレット七片と魔素の触媒三十袋が必要なのだが、ブラタブを作るのに赤土二十袋と鉄製の鑄型が一つ要るし、鉄製の鑄型を作るにはブロンズ五個と鉄五個が必要である。一方魔素は一袋作るのにクリスタル五個と研磨材二袋が必要となる。つまり、加護の印章・下級をひとつ作るには、赤土百四十袋／鉄三十五個／ブロンズ三十五個／クリスタル百五十個／研磨材六十袋が必要になる。もちろんこれは、生産の過程での失敗を考慮していない数値なのだが。

こう考えると、露店で六銀強で売ってる物を買った方がコスト安だし手間もかからないと思う。ただし、そういった人頼みの状態では、いつまで経っても不安定な供給に対して抜本的な対策が取れない。またこういった作業は結果的に自分の生産レベルを向上させるので、例えばジル盾のレベル上げといった能力が上がってくる。こういった事からしても、生産は軽んじるべきではない要素と言えるだろう。

ただ、そうは言ってもこれだけの量と素材はレベル上げのついでに手に入るものではない。特定の素材が足りず、またどうしても露店等で売っていない場合は、素材集めのための狩りをするしか無い。しかし言葉では簡単だが、実際にやる場合は大変だ。特にわたし達が狩りをするには不向きなレベルにしか無い様な素材は、狩りをしていると、いわゆる『適正』レベルのプレイヤーから反感を買いやすい。この問題は今までも何度かこの日記で書いてきたが、転職済みのキャラクターがバビリム平原や城門でサクサク狩りをやっていたら、乱獲と受け取られかねない。とりあえず、わたし達はなるべく他の人がいない様なエリアで狩る事になっているが。

ちなみに、そういった素材集め目的の狩りはスカ職であるリレイヤーの独壇場である。何といても攻撃力が抜群で、相当格下の相手なら反撃される前に倒す事が出来るから防御力はそれほど必要では無い。それにスキル攻撃だけに限定すれば武器も傷まないから、いちいち修理に戻る事も無い。今日も研磨材が足りないというデイ

シプリンの要請を受けて、聖域で二時間ほどスピリットを狩って三百袋ほど手に入れてきた。

「ついでに同じ場所に沸くローパーを倒してたけど、糸が結構出るのよね。結構高値でうれるから資金集めにもなる。何より以前強敵だったローパーをサクサク倒せる爽快感は、ちよつと言葉では言い表せない位の気持ちよさよ。スカやってて本当に良かった。他の職ではこれは出来ないものね」

「まあ、納得してやってくれている様だから、それはそれで構わない事にしよう。」

十月二十二日。

レベル上げが続く。タルカスは五時ぐらい、わたしとリレイヤーはそれぞれ七時から七時半ぐらいまで上がった。

十月二十三日。

タルカスが少し鬱の表情で帰宅してきた。

「どうかしたの？」

「まあ、大した事じゃないんだけど…なりゆきで、ブラックリストに入れてる相手と塔パーティーを組んだのよ」

「それは確かに楽しくない話ね。向こうも貴女を嫌ってるわけ？」

「ううん、おそらく相手は気にも留めていないと思う。考えてみればその程度の事だったんだらうけど、あたしにしてみればどうしても許せない種類の出来事があって、それでブラックリスト入りさせたのよ。」

「なるほどね。まあ許せる許せないというポイントは人それぞれだから、それをとやかく言う気は無いけど…それにしてもよく我慢して塔パーティーを組んだわね。」

「最初はいなかったのよ。あたしが四番目に参加して、その相手が最後に参加してきたの。なんか急用を思い出して抜けようかと思っただけ、知り合いのエピ十三だったし、ソル職がどうしても見

つからないから頼まれたという経緯もあったのよね。」

「なるほど、確かにそれでは抜ける訳にもいかないか。」

「まあエピをクリアするために十五階から十八階まで登るだけだし、さっさと終わらせて帰ろうとしたんだけど、十八階の鍵が一度目は出なかつたし、意外にてこずつたのよ。それに加えて、ブラックリスト入りさせていた相手の物言いを聞いていて、リストに入れたのは正解だったといちいち思ったしね。」

このタルカスにそう思われるのだから、相当なやつらしいという事は分かる。まあわたしもそういう相手がいるから、気持ちは分かんなくはないけど…

十月二十四日。

レベル上げがはかどらない。わたしとリレイヤーは八時から八時半ぐらいの方向、タルカスも六時少し前ぐらいのところには来ているが、時間がとれないせいもあつてなかなか上がってくれないのだ。しかしまあ愚痴っても経験値が溜まる訳ではないので、地道に訓練を続けていこう。

十月二十五日。

タルカスが久しぶりに、2つのアイテムにオーブのエンチャントを行った。

ひとつはスカ二十武器であるシャドウシーカーで、これには闇のオーブを付けた。もうひとつはモデルが持っているビジョン・オブ・ソウル、つまりドクロ杖で、これには火のオーブを付けた。シャドウシーカーは強化する予定であり、すればキラキラした光が付帯するので、闇のオーブによる黒い雲状の光と相まって独特の発光効果が出現する。逆にドクロ杖は強化せず、赤い雲状の光だけをドクロの部分に纏わせて、その不気味さを際立たせようという意図によるものだ。

まあ要するに、どちらも発動効果より見た目を重視しているわけ

だが。

十月二十六日。

以前から要請されていたギルドのリーダーに就任した。この世界のギルドのリーダーというのは……まあ早い話が雑用係なので、当然ながらやりたがる者の方が少数派といえるだろう。ちなみにわたしは、こういう場合においては多数派である。しかし全くの雑用係だけという訳でもない。メンバー任免の権利はあるし、ギルドウィンドウに書き込めるのもリーダーだけである。ただ乱用は当然する気は無い……というより現実的にやれるものでも無い。

いずれにせよ、限られた範囲ではあっても権限とそれに伴う責任が生じたのだから、そこは心しなければならぬだろう。

## 第八十三話・フラとリレ四十五にあがる

十月二十七日。

レベル上げ続行。わたしは経験値が十時半ぐらい、リレイヤーも十時過ぎの方向まで来ている。

十月二十八日。

朝早くわたしが、夕方にリレイヤーが四十五に上がった。これによろやくスーマールに行つてサソリ四十七を五十匹倒すクエストを受けられる…と思つて夕食の後に行こうとしたら、またもやログインが出来ない状態が発生。臨時メインテナンスが告知される。仕方ないので今夜行く予定は中止。

十月二十九日。

朝早くスーマールに到達。わたしもリレイヤーも、ここに来るのは初めてだと思つのだが…とりあえずレベル四十五で受けられる豹四十七の牙集めと、そして今回の目的であるサソリ四十七の肉集めクエストを受諾し、狩りを始める。レベル四十六や四十七相手は流石に大変だが、それでも何とか続けられる。ただ、石碑付近ではサソリ四十七がなかなか沸かない。もう少し良い場所は無いものだろうか…

十月三十日。

スーマールでクエストを続行。よろやくサソリ四十七の肉が三十を越えた。また、豹四十七以外はクエスト対象外とは言え、他の獲物もレベル上げや素材集めのためには有効であり、わたしもリレイヤーも経験値が五時半前後まで来ている。赤土もかなり溜まり易いので、当分はここを狩りの拠点にしてみようと思つている。

## 第八十四話・タルカスの五十二クエストクリア

十月三十一日。

タルカスが、十月十二日に受けていた五十二クエストをクリアする事が出来た。実はこのクエスト、あれから後のメインテナンスでエピッククエストに格上げになっている。つまり今後実装が予想される三次職への転職に際しては必ずクリアしなければならないという事だ。わたしはもちろん、クロス姉やリレイヤーもいずれとりかかるものだから、みんなタルカスの話は興味津々で聞いた。

まず、わたしが所属しているギルドの知人であるプリ五十三が、今日このクエストをクリアするためにパーティーを組むと言って来た。鉱脈にいる亀PDを倒すところからスタートするという。まだ当のプリ五十三とその知人であるログ五十四しかメンバーが決まっていけないというので、そこからまだ進めていないタルカスの参加を打診してみたところオーケーが出た。

あとの二人も助っ人のレンとログで決まり、早速鉱脈の入り口で待ち合わせ、そこにいるクスタフというNPCでクエを確認して鉱脈に入った…というところまでまでは順調だったのだが、当のプリ五十三がクエを受けていない事が判明。慌ててスマールまで全員引きかえし、その人だけ石碑からいったんバビリム西に戻ってクエを進めてもらい、確認してから帰還の書で戻ってきてもらって、もう一度鉱脈の入り口まで走って、ようやくクエ再開である。こういった事は意外にありがちなので、わたし達もやる時はしっかり確認してから行く事を肝に命じた。

さて、目指すのは鉱脈の地図ほぼ真ん中にある、ブリリアントカットというレベル五十五の亀PDの討伐である。タルカス自身、鉱脈は三色のオーブまでしか行った事がないし、石碑まで行った経験があるのはクロス姉だけである。わたし達の誰も石碑から奥に進んだ事がないので、タルカスはわたし達の情報が一切無いところに進

む事になる。久しぶりに味わう緊張感を伴ってタルカスは進み行った。未知のエリアに入った途端、火耐性の巨人やデーモンなどがなりの勢いで沸いてくるそうで、パーティーのメンバーの腕がなければとても進めるものではないという。それでも何とかPD発生エリアにたどり着き、亀五十二を狩りながらブリリアントカットが沸くのを待つ事になった。既にクリアした助っ人の話では、自分の時は二時間待ったという事なので長期戦を覚悟していたのだが、これがなんと十分もしないうちに沸いたという。強運に喜びつつもタルカスは慎重に戦いを進めた。死んだら元も子もないので、攻撃は三人のスラ職さんにゆだね、タルカスは基本的にプロボ4とバツシュ2でタゲを取る事に専念した。さすがにPDだけあってその攻撃力は凄く、ひとつひとつのダメージが通常の亀五十二あたりの二倍に及ぶという。それでもクリア出来ないほどのものでも無い相手であり、タルカスがガデオ義をつかうまでもなく倒す事が出来た。

鉦脈の入り口まで戻ったところで助っ人の一人が離脱。お礼を言ってからクスタフに報告すると、ラジャフの村長のところに行く様に指示されたという。マラソンと跳躍を使ってラジャフまで進むと今度はシッパル湖の奥にいるNPCのところに行かなければならない。幸運な事に、ラジャフからシッパル湖に向かう道程で、わたしと同じギルドに所属しているソーサラー五十一の人と遭遇。いずれ塔二十三階まで行く必要があるので助っ人をお願いしたところ、シッパルに行く段階で協力してくれる事になった。

シッパル湖に入って左上のクエの光点に向かって進む。ここも途中から未知の領域である。慎重に進んでようやくたどり着くと目的のNPCがいたが、そこはムシュフシュのまん前である。もっとも今現在はノンアクティブ…つまりこちらから手を出さない限り攻撃は受けないが、それでも恐ろしさや威圧感には変わらない。噂では三次職の転職PDになるらしい…という事は、いずれ戦う事になるのだろう。

ラジャフに戻って報告すると、今度は塔前のエドムに向かう。そ



こでようやく塔二十三階のウィザード四十七を倒すという指示が得られた。タルカスにとっては周回で何度も行った場所だが、こうなると別の緊張感が感じられるという。また二十三階にいても目的のウィザードがいるとは限らない。案の定、一匹だけいたウィザード四十七ではクリア出来ず、ほかにいないので沸き待ちとなる。二匹目でようやくクリア。助っ人のプレイヤーにお礼を行ってからバビム西に向かい。アルベラに報告してようやくクリアとなったという。

「ひとつひとつのイベントは慎重にやれば問題ないけど、そこに至るまでの段階が結構大変。」

ため息をつきながらタルカスはそうしめくくった。いずれにせよわたし達にとって貴重な情報である。今後対峙する時には大いに役に立つだろう。

## 第八十五話・フラとリレ四十六にあがる

十一月一日。

スーマールでのサソリ四十七の肉集めクエストがようやく一段落した。天然塩が三十個集まったので、學術の生産スキルである速効精神回復剤の製作図を手に入れ、ディシプリンに覚えて貰ったのだが：なんと、その薬を一瓶作るのにもスーマールの天然塩が五個要るのである。つまり、一瓶作るのにサソリ四十七を三十数匹倒さなければならぬ。それだけ頑張つて手に入れられる薬は、以前フェリドーンの連中が五百銅で売っていた（本人達は施しの見返りだとか言っていた様だが）平目のムニエル、或いは塔の七階で売っているラムーネと同等の効果である。正直畏クエストと言わざるを得ない。

クロス姉がいろいろなツノを手に入れた。牡牛の角の様なそのデザインは、通常はいかつい風貌の前衛職キャラがつけそう感じたが、クロス姉の場合はその褐色の肌とヤマトセットとの組み合わせによって、なんとも幻想的な外観になっている。いつの間にか姉妹の中で一番オシャレに気を使うようになってしまった様だ。

「違うのよ。タルカスが偶然安く手に入れて、私に似合うと思うからつけてみてと言つて持ってきたの。まあせつかくの申し出だから」と弁明していたが、あきらかに気に入った様子だ。それにしても今に始まった事ではないが、タルカスはこういう点で世話好きである。かつてわたしに秘書セットをコーディネートしたのも彼女だった。自分は通常装備だけで通しているのに：と思つたら、今までクロス姉がつけていた赤い花の髪飾りをちゃっかりつけている。やはり多少は気にする年頃なのかもしれない。

十一月二日。

夜遅く、わたしとリレイヤーが相次いでレベル四十六に上がった。

これで二人ともようやく二十三階にのぼってエピッククエスト十六を進める事が出来る。ただ、リレイヤーはラルサで受けてはいたものの、まだウルクでハイウェイマスターを討伐するクエストをクリアしていない。そこで二人でウルクに戻り、シャウトしてみると、幸いにもハイウェイマスターが出没するエリアでレベル上げをしているパーティーがあった。出た時点で協力してくれるというので早速行ってみると、幸いな事で到着した時に沸いていた。リレイヤーだけ臨時にパーティーに入れてもらってハイウェイマスター討伐をクリア。礼を述べてラルサとスーマールに報告に行き、それから塔周辺に向かって準備を進める。明日は丁度祝日で時間もあるので、なんとか二人とも終わらせてしまいたいと思う。

十一月三日。

朝、いよいよ二人とも初の二十三階への挑戦である。周回パーティーのシャウトが無いので、まずわたし達自身がパーティーを結成したい旨をシャウトしてみた。集まり具合によってわたしとリレのどちらかを先に進めようと考えていたのだが、最初に答えてくれたのがプリであったため、先にリレイヤーがクエに挑む事になった。最終的にログログレンプリサラという構成でリレイヤーが挑んだが、クロス姉やタルカスからの情報もあって、ソル職無しでもそれほど苦労はなかったようだ。ただ、エピッククエスト十六は二十三階でウィザード四十六がなかなか出てくれず、思いの他難航。結局三周目でようやくクリア出来たという。

リレイヤーの周回が終わったのとはほぼ同時に、二十三階周回パーティー結成で回復職を募集するシャウトがあったので、さっそく応募しエピソード十六に挑む事になる。編成はガデベルログプリエン。わたしの場合もリレイヤーと同じく二十階から上は初めてで、しかもウィザード四十六が出たのはリレより更に遅い四周目だったが、なんとかうまくクリアする事が出来た。周回が終わった後早速バビリム西に戻ってアルベラから四十六スキルを手に入れて習得。わたし

はパーティー全員同時にヒールが出来るグレートヒーラーというスキルを手に入れた。まだ使用テストはしていない。実践のためさな  
いと使いどころや実際の効果は感覚的につかめないから、この点は  
早く試してみたいと思う。

十一月四日。

ディシプリンからクリスタルが足りないので取ってきて欲しいと  
いう要請があり、レイヤーが平原で素材集めを行った。ただし夕  
方だったため狩りをしている者が多く、結局は四百個ほどで切り上  
げたという。それとリレがラジオクエでようやく寄せ書きハンカチ  
を吟遊詩人に渡す事が出来た。ハミングスライムの討伐は周回パー  
ティーがあり次第クリアしたいと言っている。

## 第八十六話・リレイヤーのエピックエ支援役体験

十一月五日。

クリスタル集めがはかどらない。ナラクに行けば一個二十五銅で売っているから、なるべく効率の良い狩りや商売をして、それで得た金銭で買った方が良くもしいない…という相談をしていたら、リレイヤーがひとつ提案をしてきた。

「デিশプリンのエピッククエストが運命のエルダーを倒す依頼を受けたところで止つてるのよ。これを十三まで進めてナラク採掘場のエンレイジドブルを倒し、報告に戻る途中でナラクに寄れば、クエストと買物が両方出来て一石二鳥だと思っただけど、どう？」

なるほど、悪くないアイデアだ。タルカスなら一人でエンレイジドブルぐらい倒せるだろうから、護衛として付いて行けば…

「了解。じゃさっそく…」  
と言つてタルカスが席を立とうとしたら、リレイヤーがそれを制止した。

「うっん、あたしが行く」

「え？」

「言い出したのはあたしよ。それにあたしもレベル四十六になったばかりだし、自分がどの程度出来るか試してみたいと思つてたところだから」

「…でもデিশプリンはソルジャーだから、回復は出来ないわよ。あなたはタルカスみたいな防御力も体力も無いのだから、せめてドルイドのモデルがエピックを進められるようになるまで待つて、行くときは回復役を引き受けてもらつた方が…」

「それじゃテストにならないわ。大丈夫、防御はともかく攻撃力だけならタルカスにも負けないし、火耐性モンスターもス力職のあたしには脅威にはならない。ソル職と違つて、それだけ多彩な攻撃が出来るしね」

相変わらずひと言多い娘だ。だが、そこまで言うならやってみても良いと思う。まだ二十八とは言えディシプリンもかなり防御力の高いソルジャーだし、簡単には死なないだろう。

という訳でレイヤーは早速ディシプリンを連れて意気揚々と出かけていった。で、結論を言えば、この試みは成功している。運命のエルダー、東岸のダチュラ、古戦場の姫、そして採掘場のブル、それぞれうまく沸いてくれて、それほど時間も掛からずクリア、途中で得た報酬も含めてナラクでクリスタルを買えるだけ買って戻ってきた。

「ざつとこんなものよ」

得意げに胸を張るレイヤーの隣でディシプリンがやや苦笑していたので、レイヤーがいない場所で二人きりになり、何かあったのかと訊いてみた。

「…まあ、確かにリレ姉は頑張ってくれたけど、正直かなり危なかったわ。敢えてポットだけでタブも使わなかったものだからサソリ姫やブルとの対決では残りHPが三十パーセントを切ってたし、もうすこし自分の体力を見極めないと、いずれ大怪我するかもしれない」

なるほど、やはりそういう面は出た訳か。タルカスには感じないけどレイヤーには感じる不安が、ここに来て具現化したといえるだろう。…いずれにせよレイヤー自身が気づかなければならない事ではあるのだが。

なお、このクリスタルを使った生産作業で、ディシプリンの生産レベルが七に上がった。

十一月六日。

久しぶりにタルカスがシッパル湖でレベル上げパーティーに参加。と言っても一時間半ぐらいしか出来なかったもので、経験値も三十分ぐらいしか貯まらなかったそうだ。このところわたしやレイヤーが優先的にレベルを上げたり、印章を作って各人の防具を強化した

り…というせいもあってタルカスやクロス姉のレベル上げが止っている。二人とも経験値は午後八時ぐらいまできているし、すこし進めた方がよいだろう。

十一月七日。

リレイヤーがラジオクエをハンカチまでしか進めていなかったの  
で、これを二人の王と会うところまで進めた。この後は例によって  
一階から十三階までを順に辿って二択クイズをやらなければならな  
い。当然ながら一人では難しいのでしばらく留め置く事になるだ  
ろう。

十一月八日。

午前中はギルドイベントの打ち合わせ。夜になって、タルカスが  
二十三階周回を行った。

十一月九日。

今月一日の記述について、情報不足による認識違いがあったので  
記述しておきたい。スマールの塩を使った速効精神回復剤の件だ  
が、一度の作業で作れるのは一個だとばかり思い込んでいた。だが  
実際にやってみたら一度に二十個作れる事が判明したのだ。これ  
も正直微妙だが、少なくとも一個という理不尽なものではないとわ  
かっていささか安心している。

レベル上げは少しずつしか出来ていないが、タルカスが八時半  
ちかくまで、わたしが四時過ぎぐらい、リレイヤーが三時半ぐらい  
といったところだ。

## 第八十七話・タルカス五十三に上がる

十一月十日。

レベル上げ続行。翌朝までにタルカスの経験値が九時ぐらい、リレイヤーが五時前ぐらい、わたしが五時半ぐらいのところまで上がった。

十一月十一日。

本日のメンテナでレベルキャップが六十五まで解放された。また、新しいエリア「ラマン駐屯地」とエピックククエスト十九が実装され、塔も三十二階まで行ける様になった。一時期の停滞に較べて運営がかなり動くようになって来たのは評価して良いだろう。サキュバスの件はさておき…

レベル上げは引き続き行っている。翌朝までにタルカスの経験値が十時少し前ぐらい、リレイヤーが六時ぐらい、わたしが六時半近くまで上がった。

十一月十二日。

夜、塔周辺でエピックエリアのため二十三階に登りたいというシヤウトがあった。時間がなかったので周回は無理だが、早ければ一周で済むクエパーティーなら…と、唯一ポジションが埋まっていなないメイ職にクロス姉が応募した。ところが集合してみると、パーティーを集めていた人からクロス姉がリーダー役を引き受けてほしいと頼まれたそうだ。

「え、なんで？」

「よくよく聞いてみると、クエをクリアしたい人が、二十階から上に登るのが初めてだというのよ。他の三人も登るのは殆ど久しぶりで攻略手順も怪しいし、二十二階の合言葉もうる覚えという状態。恒常的に周回パーティーに参加するのはわたしだけなので、手ほ



どきをしてほしいという訳。もちろん侵攻はその人が出すから……まあそういう事なら引き受けましょう、という訳」

なんだか面倒な話のようだが、全員ちゃんと話は聞くタイプだったそう、特に問題無く攻略は進み、二十三階のウィザード討伐も一周目でクリア出来たという。またもつと嬉しい事に、二十一階エニグマで羽2、二十二階でホワイトソードの現物、二十三階で製作図・加護の印章中級が出たそう。クロス姉は参加賞として魔晶一個、そしてホワイトソードを手に入れた。最近ホワイトソードは値下がりしているが、それでも何十銀という値段がつく。ただ実は、まだディシプリンが持っていなかったので、彼女に渡す事になった。まだ二十八だが、いずれ塔専任のガーディアンとなるので、それまでに強化とエンチャントをしておきたいと思う。

レベル上げも引き続き行っている。翌朝までにタルカスの経験値が十一時ぐらい、リレイヤーが六時半ぐらい、わたしが七時ぐらいまで上がった。

十一月十三日。

レベル上げ。翌朝までにタルカスの経験値がEの手前ぐらい、リレイヤーが七時ぐらい、わたしが七時半ぐらいまで上がった。

十一月十四日。

朝早く、タルカスがレベル五十三に上がった。これでレアながら格安で売られている五十三武器のシルバーサーベルがレベル上げ用として使える。もちろん強化は必要だが、それとリレイヤーが七時半ぐらい、わたしが八時すぎぐらいまで上がった。

## 第八十八話・七番目の妹フアラデーとタルカスのエピソード十九開始

十一月十五日。

今日は、わたし達の七番目の姉妹を紹介しようと思う。

名前はフアラデー。職種はメイジで、昨夜ようやく二十八になったばかりだ。以前からエンチャンターを目指して訓練を続けているが、クロス姉から様々な教えを受けて最近めきめき腕を上げており、転職もそう遠い話ではなさそうである。

そのフアラデーが、今日エピックククエスト9をクリアする為に塔十階から十四階までの周回パーティーに参加した。クエストそのものはすぐにクリア出来たのだが、パーティーの方はいささか問題があったようだ。

「何か嫌な事でも起こったの？」

「嫌な事というか、メンバーの一人が問題だったのよ。能力自体は決して低くないし知識も豊富ではあるんだけど、リーダーや他のメンバーがうっかり手順を忘れていたり失敗したりする都度、それを指摘するわけ。で、何というか…その言い草が、いちいち欠点をえぐる様な感じなの。配置に着く前にバフしないのか？とか、取る順番を決めないでダイスを振るなんて初めてだ、とか…」

「ああ、時々いるわね。正論をふりかざしてるけど実は他人を貶めて快感に浸ってる…少なくとも周囲にはそう思われるタイプ。わたしも何度か遭遇した事がある種類のプレイヤー。まあそういうのに限ってミスを指摘されると逆ギレするのよ。本当に相手にしたくないわよね。」

「でも、結果的にメンバーになってしまったら、嫌でも相手にしなければならぬでしょ。これから色々なパーティーに参加する事になるだろうし、そういう時はどうすればいいのかな…」

「気にしないのが一番ね。野良パーティーにはそういうリスクがどうしてもついてまわるから、嫌なら気の合う固定メンバーだけでパ

ーティーを組むようにするしか無いけど、そういう訳にも行かない時だってあるでしょうし…それと、自分がリーダーとして野良パーティーを組むようにして、そういうプレイヤーが応募してきても無視するという方法もあるわよ。かなり集まりにくくなるし、他のメンバーの納得が得られるかどうかも分からないけどね。」

フアラデーは不承不承の顔色を浮かべながらも小さく首肯した。確かに、こういう問題に『正解』というものは無いだろうし、その場で対処していくしか無いだろう。その対処の仕方が、結果として自分がどういうプレイヤーなのかという他者の評価になっていく。それは自分の手の届かない領域での話なので受け入れるしかないだろう。受け入れられなければこの世界を去るしかない。実際、そういう理由でいなくなってしまうたプレイヤーも知っているし、当然わたしはそれを引き止めるような真似もしていない。言うまでもなく、それは本人の問題だからだ。

十一月十六日。

フアラデーがエピックの十三を、エンレイジドブルを討伐して塔十八階に登る段階まで進めた。ディシプリンと同様まだそこまで登れないので、クリアはしばらく先の事になるだろう。

また、タルカスがフアラデーの護衛を兼ねてエピック十九を始めた。ナラク採掘場にいる長老からの依頼でラビリンスマで行ったものの、戦力が整うまでは自重する事にして引き返したそうだ。ちなみにこのエピック十九をクリアした時の報酬はトリアルレッドラインという五十盾で、ジル盾が入手困難になっている今、性能からしてレベル五十ぐらいの後衛…つまりクロス姉や、あと四レベルで五十に到達するわたしには都合の良い防具となりそうである。

夜、そのクロス姉が久しぶりにレベル上げ訓練を行う。実に二ヶ月以上もレベル上げをやっていないだったので、さすがにまずいと判断したようだ。といっても二時間ほどだったが、シッパル湖で同程度のパーティーに参加して、経験値が九時過ぎぐらいまで上がった。

十一月十七日。

昨日に続いてクロス姉がフレのログさんとレベル上げを行い、経験値が十時半ぐらいまで上がった。わたしも回復として付き合い、九時ぐらいの方向まで上げる事が出来た。

## 第八十九話・クロス五十一・フラとリレ四十七に上がる

十一月十八日。

クロス姉のレベル上げ。経験値がXとPの間ぐらいまで来た。上手くすれば明日には五十一になるかも知れない。

十一月十九日。

朝早く、クロス姉のレベルが五十一に上がった。五十に上がったのが七月十二日だから、実に四ヶ月ぶりのレベル上昇である。

無論、妹であるわたし達のレベル上げに時間を割いてくれたという理由もあるが、この世界のシステムが変わってメイ職のソロ狩りとレベル上げがかなり困難になったという側面もある。中でもレジストが頻繁に起こる件は、本当になんとかしてくれないとメイ職：特にソーサラー…はなり手がなくなるかも知れない。そんな不利な状況の中、少しずつ時間を作ってはこつこつと経験値を上げ、ようやく上がったという訳だ。早く五十二になってエピソード十八を始めて貰えると、こちらにも有難いのだが…

なお、わたしとリレイヤーも並行してレベル上げを続けている。リレイヤーは九時ぐらい、私は十時過ぎぐらいの方向まで上げる事が出来た。

十一月二十日。

朝、わたしのレベルが四十七に上がった。こちらも十八日ぶりで結構時間がかかっている。リレイヤーも十時半ぐらいにはなっているので、この週末には上がりそうだ。四十七になるとエピソード十七が受けられるので、リレイヤーのレベルが上がったらスーマールに移動してクエストを始めようと計画している。

夜になって、タルカスがサキュバスの公開テストに参加。以前より動作は安定しているそうだ。それと一回目でイビルイヤーという

レアなアクセサリーが出た。もちろんテストサーバーなのでそのまま自分のものになる訳ではないが、このくらいの頻度で出てくれると調査や探検もやり甲斐があるのだが、さて本番ではどうなるだろうか。

十一月二十一日。

今日は懸案事項が色々クリア出来た。

まず朝、リレイヤーが四十七に上がった。これで、わたしとでもエピックククエスト十七を始められる。早速スーマールに行つてクエスト依頼を受けたが、その時間はスーマールにあまり人がいなかったたので、上手くパーティーが組めない。

そこでギルドのメンバーに相談してタルカスのエピックク十九を先に出すという局面だったが、流石に強かった。それでも約十匹ぐらいでアイテムが出てくれたので、残りの報告をこなしてトライアルレツドラインを手に入れ、クロス姉に渡す事が出来た。なお、クロス姉が五十三になってエピ十九をクリアできたら、その分はわたしが貰う事になっている。それでようやく四姉妹が全員、ある程度使える盾を持てる事になる訳だ。

タルカスがエピ十九を終えた後、再びわたしとリレイヤーがスーマールに行く。先ほどよりは人の姿が多いので花PD討伐パーティーを組みませんかとかシャウトしてみたところ、二人のエンチャントからささがきた。ただし二人ともまだ四十七に達していないのでエピ十七はやっていない。あくまでもレベル上げという事である。いずれにせよ狩りをする事自体は同じなので、四人で四十八花場に行きエビルローズ狩りを開始する。しばらくするとPDのデモンローズが登場。クロス姉やタルカスからの情報通りさすがに強いが、リレイヤーがスル奥義とレン奥義そしてヒートボイスを同時に発動したので、殆ど瞬殺に近い状態で勝利、無事にエピ十七が進行した。そのままお昼までレベル上げをやる事になったが、ちょうどそ

の時同レベルのガーディアンがお昼までレベル上げのパーティーに入りたいとシャウトしてきたので合流。釣りやタゲ取りを任せる。やはり流石に楽である。

昼食の後一旦報告に戻り、そこから鉱脈に移動して三色のオーブのクエストを達成してエピソード十七をクリア。二人ともラジャフで無事に五十スキルを手に入れた。

なお、夜にタルカスのギルドで塔のぼりパーティーが実施されたが、その直前に平原で黄色にスライムや巨大な花が発生。倒してみると、印章の最下級が手に入る事が分かった。特に巨大なスライムは何個も手に入るようだ。

十一月二十二日。

レベル上げ。わたしが五時過ぎの方向、リレイヤーが四時前くらいまで上がった。なお、夕方になってリレイヤーがラジオクエをクリアしネットワークスを手に入れた。これで全員ようやくクリアである。もっとも、シッパル湖で全耐性ネットワークスが貰える新しいクエストが実装されたので、正直なところクリアする意味が薄れてしまったが…

## 第九十話・超高級精神回復剤の自作可能化

十一月二十三日。

朝早く、岩穴PDを倒す為の戦力を募集するシャウトが聞こえた。岩穴PDというのは危険地帯の最奥にいる大型ゴーストのネクロマンスカーで、そのシャウトの主が組んだフルパーティーではびくともしないそうだ。そこでパーティーで倒す事を諦めて集団で当ろうという事らしい。

わたしやリレ、そしてタルカスはスーマールに來ているので、唯一移動がしやすい塔付近にいたクロス姉がわたし達を代表して参加した。結局集まったのは十二人。レベルは四十代から六十五カンストまで様々だったが、これだけ集まるとやはり強力であり、ものの何分かで倒す事が出来た。もつとも倒した後には大量の召還ゴーストが出て四十代の回復職さんが一人死んでしまったのが残念だが。なお、かなり高性能の後衛用五十五グローブがレアアイテムとして出たが、クロス姉は残念ながらダイスで負けて取る事ができなかったそうだ。

この後わたしとリレのレベル上げ。私は六時半ぐらい、リレが五時過ぎぐらいまで進んだ。

十一月二十四日。

レベル上げ。時間があまり取れなかったが、わたしが六時過ぎの方向、リレイヤーが五時前ぐらいまで上がった。

十一月二十五日。

レベル上げ。時間があまり取れなかったが、わたしが八時少し前ぐらいの方向、リレイヤーが六時半ぐらいまで上がった。また、スーマールでの塩集めも兼ねていて、今日またわたしとリレイヤー、そしてタルカスが採取具を手に入れる事が出来た。



今日から新しいイベントやクエストがいくつか実装された。わたしがちよつとやってみたのはプレイヤーを四つのグループに分けて任意のアイテムを交換するというもの。一定期間内に交換した回数が多いグループに何らかの特典があるという。まあ色々と考えているようだが…

なお、このイベントに参加している時、非常に不愉快な出来事があった。プレイヤーが集まっている近くで「x x（すぐ近くにプレイヤーの名前）謝罪しなさい」という文言を露店で出しているプレイヤーがいるのだ。明らかに私怨で、しかもかなり聞くに堪えない言葉を発していた。詳しい事情は知らないが、その行為自体で、少なくともどちらがイタい人物かは判断できる。また会話の中に本ゲームの違反/迷惑行為に該当すると思われる部分があったので、運営に報告すべきではないかと考えている…まあ独断で行うのも何なので、とりあえずは看板を出していたプレイヤーをブラックリストに登録し、会話が聞こえない様にしたが。

十一月二十六日。

レベル上げと塩集め続行。あまり時間が取れなかったため進まなかった。

十一月二十七日。

引き続きレベル上げと塩集め続行。わたしが九時少し前、リレイヤーが七時半ぐらいまで来た。

十一月二十八日。

ようやく超高級精神回復剤の製作図が手に入った。ただし以前と違って素材が問題である。まず魔素が四袋。これは大丈夫だが、加えて風のオーブの原型・中級がひとつ要る。これは鉾脈の亀が落とす素材であり、出来ればパーティーを組んで取りにいきたいところだ。

十一月二十九日。

引き続きレベル上げと塩集め続行。わたしが十時少し前、リレイヤーが八時半ぐらいまで来た。

なお、夕刻にバビリム近郊で巨大モンスターの大群が出現し、城壁を脅かす事態が勃発した。わたしとリレイヤーは、いまだスーマールに留まっているのです、タルカスとクロス姉が討伐に参加した。運良く加護の印章最下級二個を手に入れたとの事だが、今回も色々問題が噴出したらしい。出現場所のひとつであるウルクのサーバが重くなり、箱は誰に権利があるか分かりにくく、それに誰かが箱を覗いている間は他の人は覗く事もできないから、うかうかしていると捨う間も無く消えてしまうのだ。シャウトで不満の声が飛び交っているところに運営がこのキャラクターで参加してきたものだから、怒りと不満の矛先がそこに集中し、ほとんどイジメに近い状態になってしまったという。やれやれ。

十一月三十日。

メドルがエピッククエストを十二まで進める事が出来た。時間が無くてナラク採掘場の牛クエまではいけなかったが、これは近いうちにクリア出来る予定だ。

## 第九十一話・フラとリレ四十八に上がる

十二月一日。

わたしとリレイヤーのレベル上げ。あまり時間がなくてそれほど進めなかった。

十二月二日。

メインテナンスの日なので、夕方だけ少しレベル上げを行う。わたしがEの少し手前、リレイヤーが九時ぐらいまで上がった。

十二月三日。

朝、レベル上げを行う。わたしがXの後半、リレイヤーが十時過ぎぐらいまで上がった。明日には四十八になれるかも知れない。

十二月四日。

朝早く、わたしが四十八に上がった。まったり狩りだったのでかなり時間がかかったが、いずれにせよ、風のオーブ中級の原石が手に入る鉱脈にもなんとか対応出来るくらいのレベルにはなった。また、当面の目標である五十まであと二レベルである。なお、リレも夕方にはXとPの間まで来たので、早ければ明日には上がるかもしれない。

十二月五日。

朝早く、リレイヤーが四十八に上がった。ギルメンの別キャラであるログ四十九さんと組んで、昨日のまったり狩りから一転して移動狩りに変わったため、リレイヤーの回復剤が瞬く間に無くなつていくが、その分取得出来る経験値も多い。超高級の方が切れた瞬間に上がるというタイミングの良さもあり、スーマールでのレベル上げはそれで終了。一旦バビリムに戻って荷物整理を行う。次からは

シッパル湖か鉾脈での狩りが良いかなと考えている。

夕方、タルカスが久しぶりに二十〜二十三階周回パーティーに参加。魔晶五個に加え、これまた久しぶりにフェザームーブ2を手に入れた。

## 第九十二話・六十防具課金化の波紋

十二月六日。

タルカスのギルドで十四階周回。ただし時間の関係で二周だけだった。

十二月七日。

昼休み、塔周辺でエピュをクリアするためのパーティーでソル職募集というシャウトがあった。昼休みは二十五分しか残っていないが、十四階のエニが無いのでなんとかなるだろうと思い、レベル二十八のディシプリンが参加する事になった。現在は十階から十四階までのエキスパート仕様になっているディシプリンは、タルカス譲りで十階のホロウ釣りを得意とする。今回も一度でクリアしようだ。

ただ、このままでは十五階より上に登ることが出来ない。現在はその場合タルカスが代るが、そういう場合は何かと不便でもある。少なくとも十九階までは登れる様に、なるべく早くレベル上げをした方が良くもしいない。そのためにも上にいるわたし達四人のレベル上げも、出来る限り急ぐつもりだ。

十二月八日。

朝、わたしとリレイヤーのレベル上げ。わたしが4時半を少し過ぎたあたり、リレイヤーが四時ぐらいまで上がった。また夜に、わたしが知り合いのログさんのレベル上げで回復を担当したので五時半かくまで上げる事が出来た。…までは良かったのだが、そのログさんのギルドのイベントで鉾脈のヘルファイヤを見学に行く。…という、参加者の顔ぶれからしてかなり無謀な企画に参加する事になり、予想通りというか、途中で五十八デーモンに囲まれてあえなく死に戻り。経験値が五時過ぎぐらいまで巻き戻ってしまったのは残念で

ある。ただ、半ば覚悟の事であり、姉妹のだれひとり行った事のない場所までいけたので、それはそれで構わない。まあいずれ平気で往来出来る日がくるかもしれないので、その日を楽しみにしていよう。

十二月九日。

今日のメインテナンスで、各職の六十防具や六十五武器などが実装された。ただし現在のところ課金だけである。という事はレベル六十以上になったら、購入を代行しても貰わない限り無課金は成立しないという事になる。既に六十武器などでは概ねその状態だったが、武器のみと防具全部ではおのずと金額も異なってくる。この状態が今後も続くのであれば、これまでも何度か目の当たりにした大量引退や五十代でのレベル上げ停止というプレイヤーも発生するだろう。NPC売りとまでは言わないが、せめて一部の六十武器の様にレアや生産で対処してもらいたい。必ず課金がからむといった選択肢の狭さでは、ただでさえサクキュバスなどで不評を被っているこのゲーム自体の魅力がさらに下がるだろう。

十二月十日。

朝、レベル上げ。一昨日のデスペナを解消する必要もあって多少力をいれ、わたしが六時少し前、リレが五時過ぎぐらいまで上げる事が出来た。

十二月十一日。

昨日に引き続き朝のレベル上げ。あまり時間はとれなかったが、それでもわたしが六時少し過ぎ、リレが五時半ぐらいまで上げる事が出来た。それと、長期塔録という事で、ディシプリンに四つのアイテム（せんぱいのシューズ、倉庫の鍵十日、高級帝国のオイル、祝福された跳躍の書）が振り込まれていた。

## 第九十三話・カーリダガー購入

十二月十二日。

昨日に引き続き朝のレベル上げ。途中で知人のパーティーに回復役で参加もした。その為わたしが七時少し過ぎまであげる事が出来、そのパーティーには参加しなかったリレは六時少しすぎまで上げるに留まった。

十二月十三日。

朝、レベル上げ。ここでわたしが八時ぐらい、リレが七時少し前ぐらいまで上げる事が出来た。昼からはわたしだけがシッパル湖でのシャウトに応募して野良パーティーに参加。ベルログログシヤマプリというやや変則的な構成で夕方まで移動狩りをしたが、回復役が二人というのはかなり楽だ。特にプリのわたしが回復専念で、シヤマさんがバフ優先ただし余裕があれば回復、という分担だったため、双方とも得意分野で力を発揮できた。夕方に解散した時の経緯値は九時をちよつと過ぎたあたりである。

夜は塔周辺でシャウトしていた二十〜二十三階周回パーティーに参加。前衛希望という事で通常はタルカスが行くところだが、ガデとレンのどちらが良いか尋ねたところ、ガデは既にいるのでレンを希望という返答だった。そこでリレイヤーが参加する事になったが、この手の周回パーティーでリレイヤーが参加するのは極めて珍しい、というより純然とした周回はほとんど初めてではないだろうか。無論エピック十六をクリアした時に登っているの、全く初めてではないのだが、五周してレア無しだったため、戦果はあまり良くは無かったが、それでも魔晶五個を初め最小限の目的は達成出来たそうだ。

十二月十四日。

朝、リレイヤーのギルマス（ログ五十）とギルメンのドルさんがシッパル湖でレベル上げを行うというので、リレイヤーも参加させてもらう事になり、ヘビ五十二場で約二時間ほど狩りを続けて大体七時半の方向まで経験値を上げる事が出来た。それが七時に終わった後、デイシプリンが塔周辺で露店を見て廻ったところ「カリーダガー風の宝珠付きレベル五十未強化」が三百銀で売られていた。ドルガチャだけで出る武器で、レンのリレイヤーがレベル五十代で装備できる数少ない短剣であり、むろん性能も良い。そこでリレイヤーに意向を訊いたら、以下の即答があった。

「欲しい！ 買って！」

日頃のツンデレ気味のキャラクターをかなぐり捨てた、悲鳴に近い絶叫。という訳で、わたしとリレイヤーの五十防具代として貯めていた貯金をはたいて購入：やれやれである。まあお互いレベル五十になるのにはまだ少しかかりそうなので、それまでにまた貯金する事にしよう。



## 第九十四話・フラとリレ四十九に上がる

十二月十五日。

朝、レベル上げ。わたしが十時半ぐらい、リレが八時半を少し過ぎたぐらいまで上げる事が出来た。ゆっくりとではあるが、着実に上がっている感じた。今年中にレベル五十はギリギリかもしれないが…

十二月十六日。

朝、レベル上げ。わたしの経験値がXの後半ぐらいまで来た。早ければ今夜上がるかも知れない。リレも九時を少し過ぎたあたりまで上っている。

十二月十七日。

朝、わたしが四十九に上がった。リレは九時半ぐらいまで上がっている。

四十八から四十九まで十三日かかった事になる。もし次のレベル五十まで同じだけかかるとすると、今年中にギリギリ上がる事になる…まあ、そう計算通りいくかどうかは正直微妙なところだが…

十二月十八日。

朝、レベル上げ。わたしが三時半ぐらい、リレが十時ぐらいまで上げる事が出来た。

十二月十九日。

今日と明日は、ギルド関係のパーティーが主体となった。朝はタルカスが所属するギルドで塔のぼり。午前と午後はわたしが所属するギルドのイベントに参加。したがってレベル上げはほとんどしなかった。

十二月二十日。

昨日と同じくギルド関係のパーティーとイベント。夜になって、デイシプリンがクロス姉の所属するギルドのメイさんとクエ消化塔パーティーに参加した。このメイさんとわたし達とはほとんど初めて口をきいたのだが、色々と気の合いそうな人だった。今転職先を悩んでいて、クロス姉がサラを選んだ経緯や、今転職するならどちらが良いか…などを熱心に質問してきた。どちらが良いかは一概にはいえないので、それぞれの長所と欠点を挙げ、最終的に自分で判断する事を薦めたそうだ。

十二月二十一日。

朝、レベル上げ。わたしが4時すぎぐらい、リレイヤーが十時半ぐらいまで上げる事が出来た。夜、クロス姉が塔周辺のシャウトに応じてエピックク十六クリアの手伝いの為二十〜二十三階へ一度だけ登った。二十一階では運良くフェザームーブ2が出たものの、残念ながらダイスで負けたそうである。

十二月二十二日。

朝、レベル上げ。わたしが五時半近くまで上がり、さらにリレイヤーがEの後半まで上げる事が出来た。さらに夕方リレがシャウトに応じて一時間ほどレベル上げパーティーに参加し、それがほぼ終りという時間に四十九に上がることが出来た。二人ともいよいよ念願のレベル五十を視野に捉えられる段階に上がった訳である。特にリレは現在、四十装備のまま五十クラスの敵と対決しなければならぬという状態であり。傍目から見ても、一刻も早く上がる必要があると感じられる。明日は祭日でもあるので、一日じっくりレベル上げに専念しよう。

十二月二十三日。

朝からわたしとリレイヤーのレベル上げ。朝食と昼食を挟んでほぼ一日費やし、わたしが七時少し前の方向、リレイヤーが六時過ぎの方向まで上げる事が出来た。なんとか今年中にレベル五十到達という目標をクリア出来る目処がついたと思う。

## 第九十五話・フラとリレ五十に上がる／ひとまず最終回

十二月二十四日。

朝か、わたしとリレイヤーのレベル上げ。メインテナンスの振り替え日であったため、あまり時間はなかったが、それでもわたしが七時半の方向、リレイヤーが六時半過ぎの方向まで上げる事が出来た。なお、デイシプリンに赤いサラシが振り込まれていた。

十二月二十五日。

ほぼ半日費やしてわたしとリレイヤーのレベル上げ。わたしが十時すぎ、リレが九時過ぎの方向まで上げる事が出来た。特に今日から、ギルドのメンバーに勧められて、いわゆる五十六場でのレベル上げを開始する。かなり大変だが、それだけに得られる経験値はかなり多い。

十二月二十六日。

今日は記念すべき日となった。昼前にわたしが、少し遅れてリレイヤーが、それぞれレベル五十に到達したのだ。

ようやく…というべきだろう。この世界に入ってから一年あまり。レベル四十になって転職したのが七月二十七日だから、そこからほぼ五ヶ月かかって十レベル上げた事になる。知人の中には始めて四ヶ月あまりでレベル六十まで上げたという人もいるから、歩みはかなり遅いだろう。もちろん人それぞれ事情も活動時間も異なるし、まして、わたし達のように四人（実際はデイシプリンやモデル、フラデーといった妹達もいる）同時に上げるのであれば一人当たりの持ち時間は限られるから、比較する事自体がおかしいという事は分かっているが…

さて、五十となれば装備を丸ごと交換する事が出来る。特に前衛のリレイヤーにとって武器と防具の改変は重要だ。早速バビリム東

にある防具屋に行き、頭から足までの防具五点を購入した。スカ系四十装備が白を基調にしたデザインであつたのに対し、今回の五十装備は紺色を基調としている。形状自体はそれほど差は無いが、やはり色彩が一新すると見る側の気分も新たになる。

「でも、無強化の段階では今まで使っていた四十装備とそれほど防御力は変わらないわね。早くデイシプリンに加護の印章を大量に作ってもらつて、少なくとも早急に全部+2にはしないと。」

トリレが言っている様に、今日明日あたりはその素材集めをする必要があるだろう。ただ、それよりもリレイヤーが喜んでいたのは、やはり十四日に手に入れた「カーリダガー風の宝珠付きレベル五十プラス7」が、ようやく持てる様になつた事だ。

「四十九の時に六百八十八だつた攻撃力が、五十になつてこれを持つたら九百九十四になつたのよ。ほぼ五十パーセント増し。バフをかければ軽く千オーバーになるから、これから楽しみだわ。」

トリレは言うが、それは同時にパーティー戦闘でソルから簡単にタゲを奪いやすいという意味でもある。ソロやペアならスカ系の攻撃力の増大は間違いなく有難い。だがバランスやチームワークを考慮すべきパーティーの場合、回復担当からするとタルカスみたいなガデが常にタゲを取つておいてもらうのが一番楽なので、リレが過大な攻撃力を持つというのはあまり好ましい話では無い。今後のパーティー戦闘でリレが地雷呼ばわりされないかちよつと不安である。その五十装備とカーリダガーの試運転として、わたしとリレは、放置していたナラク採掘場の亀三十四狩りとクモPDのクエストを消化しに行った。もつとも流石に回復が必要なほどの相手は少なかった。強いていえば亀三十四場で出ていた亀PDぐらいだが、それもBA2一回だけで充分すぎるほどである。

「もう、この辺はわたしたちにとって散歩道か素材の狩場でしかなくなつたわね。歯ごたえがなさすぎてつままないくらい」

相変わらずリレの発言は強気だが、それでもまだラビンスやウルク以降は慎重に進む必要があるだろう。この強気さをカバーする

ためにも、リレの防具の強化は早急に行う必要があると思う。

## 第九十五話・フラとリレ五十に上がるノひとまず最終回（後書き）

丁度四人がレベル五十代になったのと、年末になった事もあり、この日記も『二〇〇九年版』として今日で一旦しめる事にしました。来年からも新たに書いて行く予定ですので、引き続きご笑読のほどよろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8799f/>

---

フラジャイルの日記帳

2010年10月8日14時16分発行